



獨

步

集







獨
步
集

國木田獨步作

□新潮社出版□

縮刷獨歩叢書

—刊行書日—

- 武藏野及渚
- 獨歩集
- 獨歩書簡
- 運命
- 獨歩小品集
- 濤聲

刊行書籍は此以外にも及ぶべく、出版は必ずしも上掲の順序によらず。毎編その装畫を異にするも、一様の體裁に據る可し。

—新潮出版社—

解題

『獨歩集』は、獨歩が最初の短篇小説集で、明治三十八年、『武藏野』について公にされたものである。『武藏野』には詩人としての獨歩を見る、『獨歩集』は小説家としての彼の特色を最もよく發揮したものである。これと、これに續いて出た『運命』との二集を通讀すれば、以て獨歩の小説を讀んだと云へる。獨歩が初めて世に認められたのは『運命』である。『獨歩集』も亦『武藏野』と同じく、あまりに早く世に出て、曉に鳴く鳥の聽く人もない聲であつた。「余は人氣無き作家である」と、彼自らも亦此の集の序に語つてゐるが、當時の人氣無き作家、今は永久的の人氣をあつめて、本集亦萬世に不朽であるのを思へば、轉た無量の感慨がある。

獨步集

國木田獨步

次 目

富岡先生	一
牛肉と馬鈴薯	三
女難	三
第三者	一〇一
正直者	一三六
湯ヶ原より	一五五
少年の悲哀	一六五
夫婦	一七六
春の鳥	二一〇

予の作物と人氣

予と雖も予の作物が讀書界に於て人氣の多からんことを願ふものなり。人氣役者となりて不愉快を感ずる者あるなし、若しありとすれば、そはヒネクレ者ならざるべからず。予は幸にして未だ斯る不具者たらず。

而も不幸なる哉、予の作物は今日までの経過に依れば、人氣なる者なし。今の人氣作者に比ぶれば、只だ僅に文壇の片隅に籍を加へ居るが如き觀あり、これ甚だ面白からぬ事と謂ふべし。

斯くて思へらく、予の作悪しきかと、有體に言へば、予は否と答へんと欲す。當然の事なるべし、誰しも自ら惡しと思ふ作を世に出す筈なければなり、若しありとすれば、文學者として大なる無責任者ならざるべからず、予は斯る文壇の不徳兒たるを願はず。

既に自ら惡からずと信ずる作物が、尙且つ今の人氣に投ぜずとすれば、是予に取りての大打撃なり、大痛棒なり、大閉口なり。

何とか一思案なかるべからず、されど名案の有るべき筈なし。要するに人氣を迎へて作る者は人氣を得、人氣に頓着なくして作る者は時として、人氣を得ることもあり、得ざる事もあり、逆うて作る者は遂に得ることなし、予は其第二に屬する者にして、得ざる事もある部類なるが如し。

先づ之にてや、安心なり。矢張り今日までの流儀にて根氣よく作る中には、人氣を得ることもあるべく、満都の人氣を一身にあつめ得る時もあるべし、たゞ詩人の本分として人氣に頓着する能はず、此の一小冊を世に出すも我本分を盡さんと欲するのみなり。

明治三十八年七月十二日朝近電報社編輯局にて認む

獨歩生

富岡先生

何公爵の舊領地とばかり、詳細い事は言はれない、侯伯子男の新華族を澤山出しただけに、同じく維新の風雲に會しながらも妙な機から雲梯をすべり落ちて、遂には男爵どころか縣知事の椅子一にも有りつき得ず、空しく故郷に引込んで老朽ちんとする人物も少くはない、斯ういふ人物に限りつて變物である、頑固である、片意地である、尊大である、富岡先生も其一人たるを失はない。富岡先生、と言へば其界限で知らぬ者のない許りでなく、恐らく東京に住む侯伯子男の方々の中にも、「ウン彼奴か」と直ぐ御承知の、そして眉をひそめらるゝ者も随分あるらしい程の知名な老人である。

さて然らば先生は故郷で何を爲て居たかといふに、親族が世話するといふのも拒んで、廣い田の中の一軒屋の、五間ばかりあるを、何々塾と名け、近郷の青年七八名を集めて、漢學の教授をして居た、一人の末子を對手に一人の老僕に家事を任して。

此一人の末子は梅子といふ未だ六七の頃から珍らしい容貌佳しで、年頃になれば非常の美人にな

るだらうと衆人から噂されて居た娘であるが、果して其の通りで、年の行く毎に益々美しく成る、十七の春も空しく過ぎて十八の夏の末、東京ならば學校の新學期の初まるも遠くはないといふ時分のこと、法學士大津定二郎が歸省した。

富岡先生の何々塾から出て（無論小學校に通ひながら漢學を學び）遂に大學まで卒業した者が其頃三名ある、此三名とも梅子嬢は乃公の者と自分で決定して居たらしいことは略世間でも嗅ぎつけて居た事實で、これには誰も異議がなく、但し三人の中何人が遂に梅子嬢を連れて東京に歸り得るか、他所ながら指を叩いて見物して居る青年も少くはなかつた。

法學士大津定二郎が歸省した。彼は三人の一人である。何時から以西、何川邊までの、何町、何村、字何の何といふ處々の家の、種々の雑談に一つ新しい興味ある問題が加はつた。愈々大津の息子はお梅さんを貰ひに歸つたのだらう、甘く行けば後の高山の文さんと長谷川の息子が失望するだらう、何に田舎でこそお梅さんは美人ぢやが東京に行けば彼の位の女は澤山にありますから後の二人だつてお梅さんばかり狙うても居らんよ、など厄鬼となりて討論する婦人連もあつた。

或日の夕暮、一人の若い品の佳い洋服紳士が富岡先生の家の前へに停止まつて、頻りと内の様子を窺つてはもじ／＼して居たが遂に門を入つて玄關先に突立つて、
『お頼みます』といふ聲さへ少し頭へて居たらしい。

『誰か来たぞ！』と怒鳴つたのは確に先生の聲である。

襖が靜に開いて現はれたのは梅子である。紳士の顔も梅子の顔も一時にさつと紅をさした。梅子はわづかに會釋して内に入った。

『何だ、大津の定さんが来た？ ずん／＼お上りんさいと言へ！』先生の太い聲があり／＼と聞えた。大津は梅子の案内で久しぶりに富岡先生の居間、即ち彼が其昔漢學の素讀を授つた室に通つた。無論大學に居た時分、一夏歸省した時も訪うた事はある。

老漢學者と新法學士との談話の模様は大概次の如くであつて。

『ヤア大津、歸省つたか。』

『兎も角法學士に成りました。』

『それが何だ、エ？』

『内務省に出る事に決定しました、江藤さんのお世話で。』

『フンさうか、其で目出度いといふのか。然し江藤さんとは全體誰の事ぢや。』

『江藤侯のこと……直文さんのこと。』

『ウーン三輔のことか、さうか、三輔なら三輔と早く言へば可えに。時に三輔は達者かな。』

『相變らず元氣で御座います。』

『フンさうか、其は結構ぢや、狂之助は？』

『御丈夫のやうで御座います。』

『さうか、今度逢つたら乃公が宜く言つたと言つとくれ！』

『承知致しました。』

『ちつと手紙でもよこせと言へ。エ、侯爵面して古い士族を忘れんと言へ。全體彼奴等に頭を下げべこく頼み廻るなんちうことは富岡の塾の名汚しだぞ。乃公に言へば乃公から彼奴等に一本手紙をつけてやるのに。彼奴等は乃公の言ふことなら聽かん理由にいかん。』

先づこんな調子。それで富岡先生は平氣な顔をして御座る。大津は間もなく辭して玄關に出ると梅子が送つて來た。大津は梅子の顔を横目で見て、『また其内』とばかり、すたこらと門を出て吻息を吐いた。

『だめだ！、まだ彼の高慢狂氣が治らない。梅子さんこそ可い面の皮だ、フン人を馬鹿にして居ると薄暗い田圃道を辿りながら呟やいたが胸の中は餘り穩でなかつた。』

五六日經つと大津定二郎は黒田の娘と結婚の約が成つたといふ噂が立つた。これを聞いた者の多くは首を傾けて意外といふ顔色をした。然し事實全くさうで、黒田といふ地主の娘玉子嬢、容貌は梅子と比べると餘程落ちるが、縣の女學校を卒業して恰度歸郷つたばかりの所を、友人某の奔走で

遂に大津と結婚することに決定したのである。妙なもので斯う決定すると、サアこれからは長谷川と高山の競争だ、お梅さんは何方の物になるだらうと、大聲で喋舌る馬面の若い連中も出て來た。

所で大津法學士は何でも至急に結婚して歸京の途中を新婚旅行といふことにしたいと申出たので大津家は無論黒田家の騷動は尋常でない。此兩家とも田舎では上流社會に位するので、祝儀の禮が引きもきらない。村落に取つては都會に於ける岩崎三井の祝事どころではない、大變な騒ぎである。兩家は必死となつて婚儀の準備に忙殺されて居る。

其の愈々婚禮の晩といふ日の午後三時頃でもあらうか。村の小川、海に流れ出る最近の川柳繁れる小陰に釣を垂るゝ二人の人がある。其一人は富岡先生、其一人は村の校長細川繁、これも富岡先生の塾に通つたことのある、二十七歳の成年男子である。

二人は間を二三間隔てゝ糸を垂れて居る、夏の末、秋の初の西に傾いた鮮やかな日影は遠村近郊小丘樹林を隈なく照らして居る、二人の脊は此夕陽をあびて其傾いた麥藁帽子と其の白い浴衣地とを眞ともに照りつけられて居る。

二人とも餘り多く話さないで何となく物思に沈んで居たやうであつたが、突然校長の細川は富岡老人の方を振向いて

『先生は今夜大津の婚禮に招かれましたか。』

『ウン招ばれたが乃公は行かん!』と例の太い聲で先生は答へた。實は招かれて居ないのである。大津は何と思つたか其舊師を招かなかつた。

『貴様は如何ぢや?』

『大津の方から此頃は私を相手にせんやうですから別に招もしません。』

『招んだつて行くな。彼な輕薄な奴の處に誰が行く馬鹿があるか。彼な奴にやア黒田の娘でも惜い位だ!、彼から見ると同じ大學を出ても高山や長谷川は人間が一等上だのう、其中でも高山は餘程見込がある男だぞ。』

細川繁は黙つて何にも言はなかつた、たゞ水面を凝視めて居る。富岡老人も黙つて了つた。

暫くすると川向の堤の上を二三人話しながら通るものがある、川柳の蔭で姿は能く見えぬが、帽子と洋傘とが折り々木間から隠見する。そして聲音で明らかに一人は大津定二郎一人は友人某、一人は黒田の番頭といふことが解る。富岡老人も細川繁も思はず聞耳を立てた。三人は大聲で笑ひ興しながら恰度二人の對岸まで來た。二人の此處に躊躇んで居ることは無論氣がつかない。

『だつて貴様は富岡のお梅嬢に大變熱心だつたと言ひますぜ。』これは黒田の番頭の聲である。

『嘘サ、大嘘サ、お梅さんは善いにしても彼頑固爺の婿になるのは全く御免だからア!ハッハッ……お梅さんこそ可憐さうなものだ、彼の高慢狂氣のお蔭で世に出ることが出来ない!』これは明

らかに大津法學士の聲である。

三人は一度に『ハッハッハッ……』と笑つた。富岡老人釣竿を投出してぬツくと起上がった。屹度三人の方を白眼で『大馬鹿者!』と大聲に一喝した。此物凄い聲が川面に鳴り響いた。

對岸の三人は吃驚したらしく、其と又氣がついたかして忽ち聲を潜め大急ぎで通り過ぎて了つた。

富岡老人は其儘三人の足音の聞こえなくなるまで對岸を白眼んで居たが、次第に眼を遠くの禿山に轉じた、姫小松の生えた丘は靜に日光を浴びて居る、其鮮やかな光の中にも自然の風物は何處ともなく秋の寂寥を帯びて人の哀情をそゝるやうな氣味がある。脊の高い骨格の逞ましい老人は凝然と眺めて、折り々眼をしばたいたいて居たが、何時しか先きの氣勢にも似ず左も力なさうに細川繁を振向いて

『オイ貴公此道具を宅まで運んでお呉れ、乃公は歸るから。』

言ひ捨て去つて了つた。校長の細川は取殘されて見ると面白くはないが、それでも糸を垂れて居た、實は頻りと考へ込んで居たのである。暫時するとこれも力なげに糸を巻き籠を水から上げて先生の道具と一緒に肩にかけ、程遠からぬ富岡の宅まで行つた。庭先で

『老先生如何かしたのか喃』と老僕倉藏が聲を潜めて問うた。

『イヤ如何もなさらん。』

「でも様子が少し違ふから私又如何かなされたかと思つて。」
 「先生今何をしてお居てる？」

「寢て居なさるが枕頭に嬢様呼んで何か細い聲で話をしてお居てるやうで……」
 「さうか。」

「まア上つて晩まで遊んでお居てなされませえの。」
 「晩にでも来る！」

細川は自分の竿を擔ついで籠をぶら／＼下げ、浮かぬ顔をして、我家へと歸つた。この時が四時過ぎでもあらう。家では老母が糸を紡いで居た。

其夜の八時頃、恰度富岡老人の平時晩酌が済む時分に細川校長は先生を訪うた。田圃道をちら／＼する提燈の數が多いのは大津法學士の婚禮があるからで、校長も其席に招かれた一人二人に逢つた。逢ふ度毎に皆な知る人であるから二言三言の挨拶はしたが、可い心持はしなかつた。

富岡の門まで行つて見ると門は閉つて、内は寂然として居た。校長は不審に思つたが門を叩く程の用事もないから、其處らを、物思に沈みながら／＼して居ると間もなく老僕倉藏が田圃道を大急ぎで遣て來た。

「オイ倉藏、先生は最早お寢みになつたのかね？」

「オヤ！、細川先生、老先生は今東京へお出發になりました！」と呼吸をはずまして老僕は細川の
 前へ突立つた。

「東京へ?!」細川は聲も喉に塞つたらしい。

「ハア東京へ！」

「マア如何したのだらう！お梅さんは？」

「御一緒に。」

「マア如何したのだらう！」校長は吃驚すると共に、何とも言ひ難き苦惱が胸を壓して來た。心も
 空に、氣は氣ではない。倉藏は門を開けながら

「マアお入りなされの。」

校長は後について門を入り縁先に腰をかけたが、それも殆ど夢中であつたらしい。

「マア先生は何にも知らないのかね？」

「乃公が何を知るものか、今日釣に行つて居たが老先生は何にも言はんからの。」

「さうかの？」と倉藏は不審な顔色をして煙草を吸ひ初めた。

「貴公理由を知らんかね？」

「私唯だ倉藏これを急いで村長の處へ持て行けと命令しましたから其手紙を村長さん處へ持て行つ

て歸宅かへつで見ると最早支度が出来て居て、私直ぐ停車場まで送つて今歸つた處ぢやがの、何知るもんかヨ。」

『フーン』と校長考へて居たが『何日頃歸國かへと言はれた?』

『老先生は十日許りしたら歸る、それも能くは解らんちうて……』

『さうか……』と校長は嘆息ためいきをして居たが、

『また來る。』と細川は突然富岡を出て、其足で直ぐ村長を訪うた。村長は四十何歳といふ分別盛りいんごつの男で村には非常な信用があり財産もあり、校長は何時も此人を相談相手にして居るのである。

『貴公富岡先生が東京へ行つた事を知つて居るか』と校長細川は座に着くや着かぬに問ひかけた。

『知つて居るとも、先刻倉藏が先生の手紙を持つて來たが、不在中家の事を託むと書いてあつた、』と村長は夜具から頭ばかり出して話して居る。大津の婚禮に招ねかれたが風邪かぜをひいて出ることが出来ず、寢て居たのである。

『如何いふ理由で急に上京したのだらう?』

『そんな理由わけは手紙に書いてなかつたが、大概想像が着くぢやアないか、』と村長は微笑を帯びて細川の顔をじろく見ながら言つた。彼は細川が梅子に人知れず思を焦がして居ることを看破みわして居たのである。

『私には解せんア』と校長は嘆息ためいきを吐いた。

『解せるぢやアないか、大津が黒田のお玉さんと結婚しただらう、富岡先生少し當が外れたのサ、其處で宜しい此方にも其積があるとお梅嬢おんを連れて東京へ行つて江藤侯や井下伯を押廻はしてオイ井下、嬢を頼む位なことだらうヨ。』

『さうか知らん?』

『さうとも! それに先生は平常から高山々と讚めちぎつて居たから多分井下伯に言つてお梅嬢おんを高山に押附ける積りだらう、可いサ高山もお梅嬢なら兼て狙つて居たのだから。』

『さうか知らん?』と細川の聲は慄へて居る。

『さうとも! それで大津の鼻をあかしてやらうと言ふんだらう、可いサ、先生も最早あれで餘程老衰よわつて御座るから早くお梅嬢の事を決定たら肩が安まつて安心して死ねるだらうから。』

村長は理の當然を平氣で語つた。一つには細川に早く思ひあきらめさしたい積りで。

『全くさうだ、先生も如彼見えても長くはあるまい!』と力なきうに言つて、校長は間もなく村長の宅を辭した。

憐むべし細川繁! 彼は全く失望して了つた。其失望の中には一の苦惱くるわうが雜つて居る。彼は『我若し學士ならば』といふ一念を去ることが出来ない。幼時は小學校に於て大津も高山も長谷川も凌い

て居た、富岡の塾でも一番出来が可かつた、先生は常に自分を最も愛して御座つた、然るに自分は家計の都合で中學校にも入る事が出来ず、遂に官費で事が足りる師範學校に入つて卒業して小學教員となつた。天分に於ては決して彼等二三子には劣らないが、今では富岡先生すら何とかか言つても矢張り自分よりか大津や高山を非常に優つた者のやうに思つてお梅嬢に鬨斗を附けようとする！残念なことだと彼は戀の失望の外の言ひ難き恨を呑まなければならぬこととなつた。

然し彼は資性篤實で又能く物に堪へ得る人物であつたから、此苦惱の爲めに校長の職務を怠るやうなことは爲ない。平常のやうに平氣の顔で五六人の教師の上に立ち數百の兒童を導いて居たが、暗愁の影は何處となく彼に伴うて居る。

二

富岡先生が突然上京してから一週間日のことであつた、先生は梅子を伴うて歸國つて來た。校長細川は『今歸國つたから今夜遊びに來い』との老先生の手紙を讀んだ時には思はず四邊を見廻した。自分勝手な空想を描きながら急いで往つて見ると、村長は最早座に居て酒が初まつて居た。梅子は例の如く笑味を含んで老父の酌をして居る。

『や細川！突如に出發ので驚いたらう、何急に東京を娘に見せ度くなつてのう。十日ばかりも居る

積ぢやつたが癩に觸ることばかりだつたから三日居て出立て了つた。今も話して居る所ぢやが東京に居る故國の者は皆なだめだぞ、碌な奴は一匹も居らんぞ！』

校長は全然何のことだか、煙に捲かれて了つて言ふべき言葉が出ない、たゞ富岡先生と村長の顔を見比べて居るばかりである。村長は怪しげな微笑を口元に浮べて居る。

『エえまア聞いて呉れ斯うだ、乃公は娘を連れて井下聞吉の所へも江藤三輔の所へも行つた、エえ、故國からわざ／＼乃公が久しぶりに娘まで連れて行つたのだから何とか物の言ひ方も有らうぢやア其を何だ！侯爵顔や伯爵顔を遠慮なくさらけ出して其傲慢無禮な風たら無かつた。乃公もグイと癩に觸つたから半時も居らんぞん／＼宿へ歸つてやつた、』と一杯一呼吸に飲み干して校長に差し、

『それも彼奴等の癖だからまア可えわ、辛抱出來んのは高山や長谷川の奴らの様子だ、オイ細川、彼等全然だめだぞ、大津と同じことだぞ、生意氣で猪小才で高慢な顔をして、小官吏になれば彼も増長されるものかと乃公も愛憎が盡きて了うた。業が煮えて堪らんから乃公は直ぐ歸國らうと支度を爲して居ると恰度高山がやつて來て驚いた顔をして斯う言ふのだ、折角連れて來たのだから娘だけは井下伯にでも托けたら如何だらう、井下伯もせめて娘だけでも世話をしやらんと富岡が可憐さうだと言つて、大變乃公を氣の毒がつて居たと斯う言ふぢやアないか、乃公は直然彼奴の頭をばかり一本參つてやつた、何だ貴様まで乃公を可憐さうだとか何とか思つて居るのか、其な積りで娘

を托けると言ふのか、大馬鹿者！と怒鳴つけて呉れた。」

『そして高山は如何しました、』と校長は僅かに一語を發した。

『如何するものか眞赤な顔をして逃げて去つて了うた、それから直ぐ東京を出發して何處へも寄らんでずん／＼歸つて來た。』

『それは無益ませんでしたね、折角おいてになつて、』と校長はおづ／＼しながら言つた。

先生の氣焔は益々昂まつて、例の昔日譚が出て、今の侯伯子男を片端から罵倒し初めたが、村長は折を見て辭し去つた。校長は先生が饒舌り疲ふれ酔ひ倒れるまで辛抱して氣焔の的となつて居た。歸へる時梅子は玄關まで送つて出たが校長何となくこついて居た。田圃道に出るや、彼は此數日の重荷が急に輕くなつたかのやうに、いそ／＼と路を歩いたが、我家に着くまで殆ど路を如何來たのか解らなんだ。

三

其翌々日の事であつた、東京なる高山法學士から一通の書狀が村長の許に届いた。其文意は次の如くである。

富岡先生が折角上京されたと思ふと突然歸國された、夫れに就て自分は大に胸を痛めて居る、先

生は相變らず偏執して居られる。我々は勿論先輩諸氏も決して先生を冷遇するのではないが先生の方で勝手にさう決定して怒つて居られる、實に困つた者で手の着けやうがない。實は自分は梅子嬢を貰ひたいと兼ねて思つて居たのであるから、井下伯に頼んで梅子嬢だけ滯めて置いて後から交渉して貰ふ積りで居た、然るに先生の突然の歸國で其計畫も畫餅になつたが残念でならぬ。自分は容貌の上のみで梅子嬢を思つて居るのでない、御存知の通り實に近頃の若い女子には稀に見る處の美しい性質を有て居られる、自分は随分東京で種々の令嬢方を見たが梅子嬢ほどの癖のない、すらりとしたすなほなる女を見たことはない。女子の特質とも言ふべき柔らかな何處までも優しい處を梅子嬢は十二分に有て居られる。これには貴所も御同感と信ずる。若し梅子嬢の缺點を言へば剛といふ分子が少ない事であらう。併し完全無缺の人間を求めろのは求める方が愚である、女子としては梅子嬢の如き寧ろ完全に近いと言つて宜しい、或は剛の分子の少ない處が却て梅子嬢の品性に一段の奥ゆかしさを加へて居るのかも自分は思ふ。自分は決して浮きたる心でなく眞面目に此少女を敬慕して居る、何卒か貴所も自分のため一臂の力を借して、老先生の方を甘く説いて貰ひたい、彼老人程舵の取り難い人はないから貴所が其處を巧にやつて呉れるなら此方は又井下伯に頼んで十分の手順をする、何卒宜しく御頼みます。

但し富岡老人に話されるには餘程よき機會を見て貰ひ度い、無暗に急ぐと却て失敗する、此の邊

は貴所に於て決して遺漏はないと信ずるが、元來老先生と雖も人並の性情を有つて居るから了解することは能く了解する人である。たゞ其資質に一點我慢の強い處のある上に、維新の際妙な行きが、りから脇道へそれて遂に成るべき功名をも成し得ず、同輩は侯伯たり後進は子男たり、自分は田舎の老先生たるを見、且つ思ふ毎に其の性情は益々荒れて来て、其が慣ひ性となり遂には煮ても焼いても食へぬ人物となつたのである、であるから老先生の心底には常に二個の人が相戦つて居る、其一人は本來自然の富岡氏、其一人は其經歷が造つた富岡先生。そして富岡先生は常に猛烈に常に富岡氏を壓服するに慣れて居る、其結果として富岡氏が希望し承認し或は飛びつき度い程に望んで居ることも、彼の執拗れた焦熬して居る富岡先生の御機嫌に少しも觸らうものなら直ぐ一撃のもとに破壊されて了う。此邊の處は御存知でもあらうが能く御注意あつて、十分機會を見定めて話して貰ひ度い。

といふ意味を長々と熱心に書いてある。村長は委細を呑込んで、何卒機會を見て甘く此縁談を纏めたいものだと思つた。

三日ばかり経つて夜分村長は富岡老人を訪うた。機會を見に行つたのである。然るに座に校長細川あり、酒が出て居て老先生の氣煩頗る凄まじかつたので長居を爲すに歸つて了つた。

其後五日経つて、村長は午後二時頃富岡老人を訪ふ積りで其門まで来た。さうすると先生の聲で

『馬鹿者！貴様まで大馬鹿になつたか？何が可笑しいのだ、大馬鹿者！』

と例の大聲で罵るのが手に取るやうに聞えた。村長は驚いて誰が叱咤られるのかと其まゝ足を停めて聞耳を欬てゝ居ると、内から老僕倉藏がそつと出て来た。

『オイ倉藏、誰だな今怒鳴られて居るのは？』村長は私語いた。倉藏は手を以て之を止めて、村長の耳の傍に口をつけて、

『お嬢様が叱咤られて居るのだ。』

『エッお梅嬢が？』と村長は眼を開腫つた。其筈で、梅子は殆ど富岡老人に從來一言たりとも叱咤されたことはない。梅子に對しては流石の老先生も全然子供のやうで、其父子の間の如何にも平穩にして情愛こまかなるを見る時は富岡先生實に別人のやうだと誰しも思つて居た位。

『マア如何して？』村長は驚るいて訊ねた。

『如何してか知らんが今度東京から歸つて来てからといふものは、毎日酒ばかり呑んで居て、今まで御嬢様にはあんなに優しかつた老先生が此二三日はちよつとしたことにも大きな聲をして怒鳴るやうにならしやつただ、私も手の着けやうがないので困つて居た處で御座りますよ、』さも情なさうに言つて、

『あの様子では最早先が永くは有りますめえ、不吉なことを言ふやうぢやが……』

と倉藏は眼を瞬しんたいいた。此時老先生の聲で

『倉藏！倉藏！』と呼ぶ聲が座敷の縁先でした。倉藏は言葉を早めて、益々小さな聲で

『然し晩になると大概校長さんが來ますから其時だけは幾干か機嫌が宜ええたが校長さんも感心に如何いなんと言はれても逆からはないて溫和おんわうして居るもんだから何時いつか老先生も少しは機嫌が可いくなるだ……』

『倉藏！倉藏は居らんか！』と又も老先生の太い聲が響いた。

倉藏は目禮したまゝ大急ぎで庭の方へ廻まはつた。村長は腕を組んで暫時考へて居たが歎息をして、自分の家の方へ引返した。

四

村長は高山の依頼を言ひ出す機會の無いのに引きかへて校長細川繁は殆ど毎夜の如く富岡先生を訪うて十時過頃まで談話はなしして居る、談話をすると言ふよりか寧ろ其愚痴やら悪口やら氣煽やら自慢嘸やらの的になつて居る。先生は此頃になつて酒を被ること益々甚だしく倉藏の言つた通り其言語が益々荒らしく其機嫌が愈々難むづかしくなつて來た。殊に變はつたのは梅子に對する舉動きよまで、時によると『馬鹿者！死んで了へ、貴様の在るお蔭で乃公おれは死ぬことも出來んわ！』とまで怒鳴ること

がある。然し梅子は能くこれに堪へて愈々從順すまに介抱して居た。其處で倉藏が

『お嬢様、マア貴嬢おんなのやうな人は御座りませんぞ、神様のやうな人とは貴嬢のことで御座りますぞ、感心だなア……』と老の眼に涙をぼろ／＼こぼすことがある。

斯こんな風で何時いつしか秋の半となつた。細川繁は風邪かぜを引いて居たので四五日先生を訪ふことが出來なかつたが熱も去つたので或夜七時頃から出かけて行つた。

家内やうちが珍らしくも寂然ひっそりとして居るので細川は少し不審に思ひつゝ座敷に通ると、先生の居間の次ぎの間に梅子が一人裁縫をして居た。細川が入つて來ても頭を上げないので、愈々訝かしく能く見ると蒼あせざめた頬に涙が流れて居るのが洋燈らんぽうの光にあり／＼と解わかる。校長は喫驚びっくりして、

『お梅さん如何どうかしたのですか、』と驚惶おどろしく訊ねた。梅子は猶も頭を垂れたまゝ運ばす針を凝視みつめて黙つて居る。此時次の室で

『誰だ？』と老先生が怒鳴つた。

『私わたしで御座います。細川で御座います。』

『此方こちらへ入らんで何をして居るのか、用があるからちよつと來い！』

『唯今』と校長が起たうとした時、梅子は急に細川の顔を見上げた、そして涙がはら／＼と其膝にこぼれた。ハツと思つて細川は躊躇ためうたが、一言も發し得ない、止まることも出來ないで其儘先生

の居間に入った。何とも知れない一種の戦慄が身うちに漲ぎつて、坐つた時には彼の顔は眞蒼になつて居た。富岡老人は床に就いて居て其枕許に薬櫃が置いてある。

『オヤ何處かお悪う御座いますか。』と細川は搾り出すやうな聲で漸と言つた。富岡老人一言も發しない、一間は寂として居る、細川は呼吸も塞るべく感じた。暫くすると、

『細川！ 貴公は乃公の所へ元來何をしに来るのだ、エ？』

寢たまふ富岡先生は人を壓しつけるやうな調聲、人を嘲けるやうな聲音で言つた。細川は一語も發し得ない。

『エ、元來何をしに来るのだ？ 乃公の見舞に来るのか。娘の御機嫌を取りに来るのか、エ？ 返事をせえ！』

校長は眼を閉り齒を喰しぱつたまふ頭を垂れ兩の拳を膝に乗せて居る。

『貴公は娘を狙つて居るナ！ 乃公の娘を自分の物にしたいと狙つて居るナ！ ふん。』

細川の拳は震へて居る。

『貴公よく考へて見ろ！ 貴公は高が田舎の小學校の校長ぢやアないか。同じ乃公の塾に居た者でも高山や長谷川は學士だ、それにさへ乃公は娘を與んだぞ。身の程を知れ！ 馬鹿者！』

校長の顔は見る／＼紅をさして來た。其握りしめた拳の上に熱涙がはら／＼と落ちた。侯爵伯爵

を罵る口から能くも其な言葉が出る、矢張人物よりも人爵の方が先生には難有いのだらう、見下けた方だと口を衝いて出ようとする一語を彼は凝と怵へて居る。此先生の言としては怪むに足らない、若し理窟を言つて對抗する積なら初めから此家に入入をしないのである。と彼は思ひ返した。

『エ、それとも如何しても娘が欲しいと言ふのか、コラ！』

校長は一語も發しない。

『判然と言へ！ 如何しても欲しいと言ふのか、男らしく言へ、コラ！』

細川はきつと頭をあげた。

『左様で御座います！ 梅子さんを私の同伴者に貰ひたいと常に願つて居ります！』

きつぱりと言ひ放つて老先生の眼睛を正視した。

『若し乃公が與らぬと言つたらどうする？』

『致し方が御座いません！』

『歸れ！ 招喚にやるまでは來るな、歸れ！』と老人は言放つて寢返りして反對を向いて了つた。

細川は直ちに起つて室を出ると、突伏して泣いて居た梅子は急に起つて玄關まで送つて來て、

『貴下何卒父の言葉を氣になさらないで……御存知の通りな氣性で御座いますから！』とをろ／＼聲で言つた。

『イ、エ決して氣には留めません、何卒先生を御大切に、貴嬢も御大事……』終まで言ふ能はず急いで門を出て了つた。

其夜細川が自宅に歸つたのは十二時過ぎであつた。何處を徘徊して居たのか、眞着な顔色をして左も困憊して居る様子を寝ないで待つて居た母親は不審さうに見て居たが、

『お前又た風邪を引きかへしたのぢやアないかの、未だ十分でないのに餘り遅くまで夜あるきをするのよ。』

『何に格別の事は御座いませぬ、』と細川は何氣なく言つて其の儘自分の居間へ入つた。母親は其後姿を見送つてそつと歎息をした。

五

其翌日より校長細川は出勤して平常の如く職務を執つて居たが彼の胸中には生れ落ちて以來未だ經驗したことの無い、苦惱が燃えて居るのである。

若し富岡先生に罵られたばかりなら彼は何とかして思切るはうに悶いたであらう、其煩悶も苦痛には相違ないが、これ戦である、彼の意力は克く此惱に堪へたであらう。

然し今の彼の苦惱は自ら解く事の出来ない惑である、『何故梅子は彼晩泣いて居たらう。自分が先

生に呼ばれて其居間に入る時、梅子は何故あんな相貌をして涙を流して自分を見たらう。自分が先生に向つて自分の希望を明言した時に梅子は隣室で聞いて居たに違ひない、若し自分の希望を全く否む心なら自分が歸る時あんなに自分を慰める筈はない……』

『梅子は自分を愛して居る、少くとも自分が梅子を戀ひて居ることを不快には思つて居ない』との一念が執念くも細川の心に盤居まつて居て彼は如何しても之を否むことが出来ない、然し梅子が平常何人に向つても平等に優しく何人に向つても特種の情態を示したことはないだけ、細川は十分この一念を信ずることが出来ぬ。梅子が泣いて見あげた眼の訴ふるが如く謝るが如かりしを想起す毎に細川はうつとりと夢見心地になり狂はしきまでに戀しさの情燃えたつのである。戀、惑、そして恥辱、夢にも現にも此苦惱は彼より離れない。

或時は斷然倉藏に頼んで竊かに文を送り、我情のまゝを梅子に打明けんかと思ひ、夜の二時頃まで眠らないで筆を走らしたことがある、然し彼は思返して其手紙を破つて了つた。斯ういふ風で十日ばかり経つた。或日細川は學校を終へて四時頃丘の麓を例の如く物思に沈みつゝ歸つて來ると、倉藏に出遇つた。倉藏に出遇つた。倉藏は手に藥嚢を持つて居た。

『先生！如何して此頃は全然お見えになりませんか？』倉藏はない／＼様子を知りながら素知らぬ風で問うた。

「老先生の御病氣は如何かね？」と校長も又た倉藏の間に答へないで富岡老人の様子を訊ねた。

「此頃はめつきりお弱りになつて始終床にばかり就いて居らつしやるが、別に此處というて悪るい風にも見えねえだ。然し最早長くは有りますめえよ！」と倉藏は歎息をした。

「ふうん、さうかな、一度見舞に行きたいのだけれど……」と校長の聲も様子も沈んで了つた。

「お出なされませ、關うもんかね、疝癪まぎれに何言うたて……」

「それも然うだが……お梅さんの様子は如何だね？」と思切つて問うた。

「何だか此頃は始終鬱屈ばかり御座るが、見て居ても可哀さうでなんねえ、ほんとに嬢さんは可哀さうだ……」と涙にもろい倉藏は傍を向いて田圃の方を眺め最早眼をしばだたいて居る。

「困つたものだナ、先生は相變らず喧ましく言ふかね？」

「ナニ此頃は老先生も何だか床の中で半分眠つてばかり居て餘り口を用かねえだ。」

「妙だねえ」と細川は首をかしげた。

「これまで煩らつたことが有つても今度のやうに元氣のないことは無えが、矢張り長くない證であるらしい。」

「さうかも知れん！」と細川は眉を擡めた。

「それに何だか我が折れて愚に還つたやうな風も見えるだ。それを見ると私も氣の毒でならん、喧

ましい人は矢張喧しうして居て哭れる方が可えと思ひなされ。」

「今夜見舞に行つて見ようか知らん。」

「見非來なさるが可え、關うもんか！」

「うん……」と細川は暫時考へて居たが、「お梅さんに宜しく言つてお呉れ。」

「かしこまりました、是非今夜來なさるが可え。」

細川は軽く點頭き、二人は分れた。いろく〜と考へ、種々に悶いて見たが、校長は遂に其夜富岡を訪問することが出来なかつた。

それから三日目の夕暮、倉藏が眞面目な顔をして校長の宅へ来て、梅子からの手紙を細川の手に渡した、細川が喫驚して目を圓くして倉藏の顔を見て居るうちに彼は挨拶も爲ないで歸つて了つた。

梅子からの手紙！細川繁の手は慄へた。無理もない、曾て例のないこと、又有り得べからざること、細川に限らず、梅子を知れる青年の何人も想像することの出来ないことである！

封を切つて讀み下すと、頗る短い文で、たゞ父に代つて此手紙を書く。今夜直ぐ來て貰ひたい是非のことである、何か父から急にお話したいことがあるさうだとの意味。

細川は直ぐ飛んで往つた。「呼びにやるまで來るな！」との老先生の先夜の言葉を今更のやうに怪しう思つて、彼は途々この一言を胸に幾度か繰返した、そして一念端なくも其夜の先生の怒罵に觸

れると急に足が竦むやう思つた。

然し『呼びに来た』のである。不思議の力ありて彼を前より招き後より推し忽ち彼を走らしめつ、彼は躊躇うことなく門を入つた。

居間に通つて見ると、村長が来て居る。先生は床に起直つて布團に倚掛つて居る。梅子も座に着いて居る、一見一座の光景が平常と違つて居る。眞面目で、沈んで、のみならず何處かに悲哀の色が動いて居る。

校長は懇懇に一座に禮をして、さてあらためて富岡老人に向ひ、

『御病氣は如何で御座いますか。』

『如何も今度の病氣は爽快せん、』といふ聲さへ衰へて沈んで居る。

『御大事になされませんと……』

『イヤ私も最早今度はお暇乞ぢやらう。』

『そんなことは！』と細川は慰さめる積りで微笑を含んだ。しかし老人は眞面目で

『私も自分の死期の解らぬまでには老耄せん、兎ても長くはあるまいと思ふ、其處で實は少し折入つて貴公と相談したいことがあるのぢや。』

斯くて其夜は十時頃まで富岡老人の居間は折々談聲が聞え折々寂と静まり、又折々老人の咳拂が

聞えた。

其翌日村長は長文の手紙を東京なる高山法學士の許に送つた、其文の意味は次の如くである、——御申越し以來一度も書面を出さなかつたのは、富岡老人に一條を話すべき機會が無かつたからである。

先日のお手紙には富岡先生と富岡氏との二個の人が此老人の心中に戦かつて居るとのお言葉が有つた、實に其の通りで拙者も左様思つて居た、然るに恰度御手紙を頂いた時分以來は、所謂富岡先生の暴力益々つりのり、二六時中富岡氏の顔出する時は全く無かつたと言つて宜しい位、恐らく夢の中にも富岡先生は荒れ廻つて居たゞらうと思はれる。

これには理由があるので、此秋の初に富岡老人の突然上京せられたるのには全く梅子嬢を貴所に貰はず目算であつたらしい、拙者は左う鑑定して居る、所が富岡先生には「東京」が何より禁物なので、東京にゆけば是非、江藤侯井下伯其他故郷の先輩の堂々たる有様を見聞せぬわけにはいかぬ、富岡先生に取つては是れ即ち不平、頑固、偏屈の原因であるから、忽ち青筋を立て、了つて、的にして居た貴所の舉動すらも疝癢の種となり、遂に自分で立てた目的を自分で打壊して歸國つて了はれたものと拙者は信ずる、然るに歸國つて考へて見ると梅子嬢の爲めに老人の描いて居た希望は殆んど空になつて了つた。先生何が何やら解らなくなつて了つた。其處で疝は益々起る、自暴にはなる、

酒量は急に増す、氣は益々狂ふ、眞に言ふも氣の毒な淺間しい有様となられたのである、と拙者は信ずる。

現に拙者が貴所の希望に就き先生を訪うた日などは、先生の梅子嬢を罵る大聲が門の外まで聞えた位で、拙者は機會悪しと見、直に引返へしたが、倉藏の話に依れば其頃先生は彼祕藏子なる彼温順なる梅子嬢をすら頭ごなしに叱り飛ばして居たとのことである、以て先生の様子を想像し玉は、貴所も意外の感あることと思ふ。

拙者ばかりでなく斯ういふ風であるから無論富岡を訪ねる者は滅多になかつた、たゞ一人御存知の細川繁氏のみは殆ど毎晩のやうに訪ねて怒鳴られ乍らも慰さめて居たらしい。

然るに昨夕のこと、富岡老人近頃病床にある由を聞いたから見舞に出かけた、若し機會が可かつたら貴所の一條を持出す積りで。老人は成程床に就いて居たが、意外なのは暫時會はぬ中に全然元氣が衰へたことである、元氣が衰へたと云ふよりか殆ど我が折れて了つて貴所の所謂富岡氏、極く世間並の物の能く通曉た老人に爲つて了つたことである、更に意外なのは拙者の訪問をひどく喜こんで實は招びにやらうかと思つて居た處だとのことである。それから段々話して居るうちに老人は死後のことに就き色々拙者に依托せられた、其様子が死期の遠からぬを知つて居らるゝやうで拙者も思はず涙を呑む位であつた、其處で貴所の一條を持出すに又とない機會と思ひ既に口を切

らうとすると、意外も意外、老人の方から梅子嬢のことを言ひ出した。其は斯うで、嬢は細川繁に配する積りである、細川からも望まれて居る、私も初は進まなかつたが考へて見ると嬢の爲め細川の爲め至極良縁だと思ふ、何卒貴所其媒妁者になつて呉れまいかとの言葉。胸に例の一條が在る拙者は言句に塞つて了つた、然し直ぐ思ひ返して此依頼を快く承諾した。

と云ふのは、貴所に對して濟ぬやうだが、細川が先に申込み老人が既に承知した上は、最早貴所の希望は破れたのである、拙者とても致し方がない。更に深く考へて見ると、此縁は貴所の申込が好し先であつても其は成就せず、矢張細川繁の成功に終はるやうになつて居たのである、と拙者は信ずる。其理由は一に貴所の推測に任ず、富岡先生を十分に知つて居る貴所には直ぐ解るであらう。且つ拙者は貴所の希望の成就を欲する如く細川の熱望の達することを願ふ、これに就き少しも偏頗な情を持つて居ない。貴所と雖も既に細川の希望が達したと決定れば細川の爲めに喜ばれるであらう。又梅子嬢の爲にも、喜ばれるであらう。

そして拙者の見た處では梅子嬢も亦た細川に嫁することを喜こんで居るやうである。これが良縁でなくて何うしよう。

拙者が媒妁者を承諾するや直ぐ細川を呼びにやつた、細川は直ぐ來た、其處で梅子嬢も一座し四人同席の上、老先生からあらためて細川に向ひ梅子嬢を許すことを語られ又梅子嬢の口から、父の

處置に就いては少しも異議なく喜んで細川氏に嫁すべきを誓ひ、婚禮の日は老先生の言ふがまゝに來十月二十日と定めた。囃は遂に残者に落ちた。

貴所から無論老先生及細川に向て祝詞を送らるゝことゝ信ずる、

六

婚禮も日出度く済んだ。田舎は秋晴拭ふが如く、校長細川繁の庭では姉様冠の花嫁中腰になつて張物をして居る。

さて富岡先生は十一月の末終に此世を辭して何國は名物男一人を失なつた。東京の大新聞二三種に黒梓二十行ばかりの大きな廣告が出て門人高山文輔、親戚細川繁、友人野上子爵等の名がずらり並んだ。

同國の者は此廣告を見て『先生到頭死んだか』と直ぐ點頭いたが新聞を見る多數は、何人なれば斯くも大きな廣告を出すのかと怪むものもあり、全く氣のつかぬ者もあり。

然し此の廣告が富岡先生の此の世に放つた最後の一喝で不平満腹の先生がせめてもの遺囑を知人に由つて洩らされたのである。心ある同國人の二三はこれを見て泣いた。

牛肉と馬鈴薯

明治俱樂部として芝區櫻田本郷町のお堀邊に西洋造の餘り立派ではないが、それでも可なりの建物があつた、建物は今でもある、しかし持主が代つて、今では明治俱樂部其者はなくなつて了つた。

この俱樂部が未だ繁盛して居た頃のことである、或年の冬の夜、珍らしくも二階の食堂に燈火が點いて居て、時々高く笑ふ聲が外面に漏れて居た。元來この俱樂部は夜分人の集つて居ることはないので、ストーブの煙は平常も晝間ばかり立ちのぼつて居るのである。

然るに八時は先刻打つても人々は未だなか／＼散じさうな様子も見えない。人力車が六臺玄關の横に並んで居たが、車夫どもは皆な勝手の方で例の一六勝負最中らしい。

すると一人の男、外套の襟を立て、巾折帽を面深に被つたのが、眞暗な中からひよつくり現はれていきなり手荒く呼鈴を押した。

内から戸が開くと

『竹内君は來てお出ですかね』と低い聲の沈重いた調子で訊ねた。

『ハア、お出で御座います、貴様は？』と片眼の細顔の、和服を着た受付が丁寧に言つた。

『これを』と出した名刺には五號活字で岡本誠夫としてあるばかり、何の肩書もない。受付は其を受取り急いで二階に上つて去つたが間もなく降りて来て

『どうぞ此方へ』と案内した、導かれて二階へ上ると煖爐を熾に焚いて居たので、ムツとする程温かい。煖爐の前には三人、他の三人は少し離れて椅子に寄つて居る。傍の卓子にウキスキーの壺が上て居てこつぷの飲み干したるもあり、注いだまゝのものもあり、人々は可い加減に酒が廻はつて居たのである。

岡本の姿を見るや竹内は起つて、元氣よく

『まア之れへ掛け給へ』と一の椅子をすゝめた。

岡本は容易に座に就かない。見廻すと其中の五人は兼て一面識位はある人であるが、一人、色の白い中肉の品の可い紳士は未だ見識らぬ人である。竹内はそれと氣がつき、

『ウン貴様は未だ此方を御存知ないだらう、紹介させよう、此方は上村君と言つて北海道炭鑛會社の社員の方です、上村君、此方は僕の極く舊い朋友で岡本君……』

と未だ言ひ了らぬに上村と呼ばれし紳士は快活な調子で

『ヤ、初めて……お書きになつた物は常に拜見して居ますので……今後御懇意に……』

岡本は唯だ『どうかお心安く』と言つたぎり黙つて了つた。そして椅子に倚つた。

『サア其先を……』と綿貫といふ春の低い、眞黒の頬髯を生して居る紳士が言つた。

『さうだ！、上村君、それから？』と井山といふ眼のしよぼくした頭髮の薄い、瘦方の紳士が促した。

『イヤ岡本君が見えたから急に行りにくゝなつたハ、』と炭鑛會社の紳士は少し羞にかんだやうな笑方をした。

『何ですか？』

岡本は竹内に問うた。

『イヤ至極面白いな、何かの話の具合で我々の人生觀を話すことになつてね、まア聽いて居給へ名論卓説、滾々として盡きずだから。』

『ナニ最早大概吐き盡したんですよ、貴様は我々俗物黨と違がつて眞物なんだから、幸ひ貴様のを聞きませう、ね諸君！』

と上村は逃げかけた。

『いけないく、先づ君の説を終へ給へ！』

『是非承はりたいものです』と岡本はウキスキーを一杯、下にも置かないで飲み干した。

『僕のは岡本君の説とは恐らく正反對だらうと思ふんでね、要之、理想と實際は一致しない、到底

一致しない……」

『ヒヤ〜』と井山が調子を取った。

『果して一致しないとならば、理想に従ふよりも實際に服するのが僕の理想だといふのです。』

『たゞそれ丈けですか』と岡本は第二の杯を手にして唸るやうに言った。

『だつてねエ、理想は喰べられませんか！』と言つた上村の顔は兎のやうであつた。』

『ハ、ハ、ハ、ビフテキぢやアあるまいし！』と竹内は大口を開けて笑つた。

『否ビフテキです、實際はビフテキです、スチューです。』

『オムレツかね！』と今まで黙つて半分眠りかけて居た、眞紅な顔をして居る松木、座中で一番年の若さうな紳士が眞面目で言つた。

『ハツ、ハツ』と一座が噴飯だした。

『イヤ笑ひごとぢやアないよ、』と上村は少し躍起になつて、

『例へて見ればそんなものなんで、理想に従へば芋ばかり喰つて居なきやアならない。ことによると馬鈴薯も喰へないことになる。諸君は牛肉と馬鈴薯と何ちが可い？』

『牛肉が可いねエ！』と松木は又た眠むさうな聲で眞面目に言つた。

『然しビフテキに馬鈴薯は附屬物だよ、』と頬髯の紳士が得意らしく言つた。

『さうですとも！理想は則ち實際の附屬物なんだ！馬鈴薯も全きり無いと困る、しかし馬鈴薯ばかりぢやア全く閉口する！』

と言つて、上村はやゝ満足したしく岡本の顔を見た。

『だつて北海道は馬鈴薯が名物だつて言ふぢやアありませんか、』と岡本は平氣で訊ねた。

『其の馬鈴薯なんです、僕はその馬鈴薯には散々酷い目に遇つたんです。ね、竹内君は御存知ですか僕が斯う見えても同忠社の舊い卒業生なんで、矢張その頃は熱心なアーメンの仲間で、言ひ換ゆれば大々的馬鈴薯黨だつたんです！』

『君が？』とさも不審さうな顔色で井山がしよぼ〜眼を見張つた。

『何も不思議は無いサ、其頃はウラ若いんだからね、岡本君はお幾歳かしらんが、僕が同志社を出たのは二十二でした。十三年も昔なんです。それはお目に掛けたいほど熱心なる馬鈴薯黨でしたがね、學校に居る時分から僕は北海道と聞くと、ぞく〜するほど惚れて居たもんで、清教徒を以て任じて居たのだから堪らない！』

『大變な清教徒だ！』と松木が又た口を入れたのを、上村は一寸と臆て止めて、ウキスキーを嘗めながら

『斷然この汚れたる内地を去つて、北海道自由の天地に投じようと思ひましたね、』

と言つた時、岡本は凝然と上村の顔を見た。

『そしてやたらに北海道の話聞いたもんだ。傳道師の中に北海道へ往つて来たといふ者があると直ぐ話を聴きに掛りましたよ。處が又先方は甘いことを話して聞かすんです。やれ自然が何うだの、石狩川は洋々とした流れだの、見渡すかぎり森又た森だの、堪つたもんぢやアない！僕は全然まいツちまひました。そこで僕は色々聞きあつめたことを綜合して如此ふうな想像を描いて居たもんだ。……先づ僕が自己の額に汗して森を開き林を倒し、そしてこれに小豆を撒く、……』

『その百姓が見たかつたねエハツハツ、』と竹内は笑ひだした。

『イヤ實地行つたのサ、まア待ち給へ、追ひ／＼其處へ行くから……、其内にだん／＼と田園が出来て来る、重に馬鈴薯を作る、馬鈴薯さへ有りやア喰うに困らん……』

『ソラ馬鈴薯が出た！』と松木は又た口を入れた。

『其處で田園の中央に家がある、構造は極めて粗末だが一見米國風に出て居る、新英洲殖民時代そのまゝといふ風に出て居る、屋根が斯う急勾配になつて物々しい煙突が横の方に一ツ。窓を幾個附けたものかと僕は非常に氣を採むことがあつたッけ……』

『そして眞個に其家が出来たのかね、』と井山は又しよぼ／＼眼を見張つた。

『イヤこれは京都に居た時の想像をよ、窓で氣を採むだのは……さうだ／＼若王寺へ散歩に往つて

歸る時だつた！』

『それからどうしました？』と岡本は眞面目で促がした。

『それから北の方へ防風林を一區劃、なるべくは林を多く取つて置くことにしました。それから水の澄み渡つた小川が此防風林の右の方からうねり出て屋敷の前を流れる。無論この川で家鴨や鷺鳥が其紫の羽や眞白な春を浮べてるんですよ。此川に三寸厚サの一枚板で橋が懸かつて居る。これに欄干を附けたものか附けないものかと色々工夫したが矢張り附けないほうが自然だといふんで附けないことに定めました……まア構造はこんなものですが、僕の想像はこれで満足しなかつたのだ……先づ冬になると……』

『ちよつとお話の途中ですが。貴様は其の「冬」といふ音にかぶれやアしませんでしたか？』と岡本は訊ねた。

上村は驚ろいた顔色をして

『貴様は如何して其を御存知です、これは面白い！有繫貴様は馬鈴薯黨だ！冬と聞いては全く堪りませんでしたよ、何だか其の冬則ち自由といふやうな氣がしましてねエ！それに僕は例の熱心なるアーメンでしようクリスマス萬歳の仲間でしょう、クリスマスと来ると何うしても雪がイヤといふ程降つて、軒から棒のやうな氷柱が下つて居ないと嘘のやうでしてねエ。だから僕は北海道の冬と

「唯だ東京の奴等を言つたのサ、名利に汲々として居る其醜態は何だ！馬鹿野郎！乃公を見る！といふ心持サ」と上村も亦た眞面目で註解を加へた。

「それから道行は抜にして、兎も角無事に北海道は札幌へ着いた、馬鈴薯の本場へ着いた。そして苦もなく十萬坪の土地が手に入った。サアこれからだ、所謂額に汗するのはこれからだといふんで直に着手したねエ。尤も僕と最初から理想を一にして居る友人、今は矢張僕と同じ會社へ出て居るがね、それと二人で開墾事業に取掛つたのだ、そら、竹内君知つて居るだらう梶原信太郎のことサ……」

「ウン梶原君が！彼が矢張馬鈴薯だつたのか、今ぢやア豚のやうに肥つてるぢやアないか」と竹内も驚いたやうである。

「さうサ、今ぢやア鬼のやうな顔をして、血のたれるピフテキを二口に喰つて了うんだ。處が先生僕と比較すると初から利口であつたねエ、二月ばかりも辛抱して居たらうか、或日こんな馬鹿氣たことは斷然止うといふ動議を提出した、其議論は何も自から斯んな思をして隠者になる必要はない自然と戦ふよりか寧ろ世間と格闘しようぢやアないか、馬鈴薯よりか牛肉の方が滋養分が多いといふんだ。僕は其時大に反對した、君止すなら止せ、僕は一人でもやると力味んだ。すると先生やるなら勝手にやり給へ、君も最少しすると悟るだらう、要するに理想は空想だ、痴人の夢だ、なんて捨

棄辭を吐いて直ぐ去つて了つた。取殘された僕は力味むでは見たものの内々心細かつた、それでも小作人の一人二人を相手に其後、三月ばかり辛抱したねエ。豪いだらう！」

「馬鹿なんサ！」と近藤が叱るやうに言つた。

「馬鹿？馬鹿たア酷だ！今から見れば大馬鹿サ、然し其時は全く豪かつたよ。」

「矢張馬鹿サ、初から君なんかの杓になんだ、北海道で馬鈴薯ばかり食うなんていふ柄ぢやアないんだ、それを知らないで三月も辛抱するなア馬鹿としか言へない！」

「馬鹿なら馬鹿でもよるしいとして、君のいふ「柄にない」といふことは次第に悟つて來たんだ。難有いことには僕に馬鈴薯の品質が無かつたのだ。其處で夏も過ぎて樂しみにして居た「冬」といふ例の奴が漸次近づいて來た、其露拂が秋、第一秋からして思つたよりか感心しなかつたのサ、森とした林の上をバラ／＼と時雨て來る、日の光が何となく薄いやうな氣持がする、話相手はなしサ食ふものは一粒幾價と言ひさうな米を少し許りと例の馬の鈴、寝る處は木の皮を壁に代用した掘立小屋。」

「それは貴様覺悟の前だつたでせう！」と岡本が口を入れた。
「其處ですよ、理想よりか實際の可いほうが可いといふのは。覺悟はして居たものゝ矢張り餘り感服しませんでしたねエ。第一、それぢやア瘦せますもの。」

上村は言つて杯で一寸と口を濕して

『僕は瘦せやうとは思つて居なかつた!』

『ハツハツ、、、』と一同笑ひだした。

『そこで僕はつくづく考へた、成程梶原の奴の言つた通りだ、馬鹿げきつて居る、止さうツといふんで止しちまつたが、あれで彼の冬を過ごしたら僕は死んで居たね。』

『其處で如何いふんです、貴様の目下のお説は?』と岡本は嘲るやうな、眞面目な風で言つた。

『だから馬鈴薯には懲々しましたといふんです。何でも今は實際主義で、金が取れて美味いものが喰へて、斯うやつて諸君と燂爐にあたつて酒を飲んで、勝手な熱を吹き合ふ、腹が減たら牛肉を食ふ……』

『ヒヤ〜僕も同説だ、忠君愛國だつてなんだつて牛肉と兩立しないことはない、それが兩立しないといふなら兩立させることが出来ないんだ、其奴が馬鹿なんだ』と綿貫は大に敦圀いた。

『僕は違うねエ!』と近藤は叫んだ、そして燂爐を後に椅子へ馬乗になつた。凄しい光を帯びた眼で座中を見廻しながら

『僕は馬鈴薯黨でもない、牛肉黨でもない!上村君なんかは最初馬鈴薯黨で、後に牛肉黨に變節したのだ、即ち薄志弱行だ、要するに諸君は詩人だ、詩人の墮落したのだ、だから鮮暗と鼻をびくびくさして牛の焦る臭を嗅いで行く、其醜體つたらない!』

『オイ〜、他人を悪口する前に先づ自家の所信を吐くべしだ。君は何の墮落なんだ、』と上村が切り込むだ。

『墮落?墮落たア高い處から低い處へ落ちたことだらう、僕は幸にして最初から高い處に居ないから其様外見ないことはしないんだ!君なんかは主義で馬鈴薯を喰つたのだ、嗜きて喰つたのぢやアない、だから牛肉に餓ゑたのだ、僕なんかは嗜きて牛肉を喰ふのだ、だから最初から、餓ゑぬ代り今だつてがつ〜しない、……』

『一向要領を得ない!』と上村が叫むだ。近藤は直に何ごとをか言ひ出さんと身構へをした時、給仕の一人がつか〜と近藤の傍に來て其耳に附いて何ごとをか囁いた。すると

『近藤は、この近藤はシカク寛大なる主人ではない、と言つて呉れ!』と怒鳴つた。

『何だ?』と座中の一人が驚いて聞いた。

『ナニ、車夫の野郎、又た博奕に敗れたから少し貸して呉れると言ふんだ。……要領を得ないア何だ!大に要領を得て居るぢやアないか、君等は牛肉黨なんだ、牛肉主義なんだ、僕のは牛肉が最初から嗜きなんだ、主義でもヘチマでもない!』

『大に賛成ですなア』と靜に沈重いた聲で言つた者がある。

『賛成でせう!』と近藤はにやり笑つて岡本の顔を見た。

『至極賛成ですなア、主義でないと言ふことは至極賛成ですなア、世の中の主義つて言ふ奴ほど愚なものはない』と岡本は其訝えくした眼光を座上に放つた。

『其説を承たまはらう、是非願ひたい』と近藤は其四角な腮を突き出した。

『君は何方なんです、牛と薯、エ、薯でせう？』と上村は知つた顔に岡本の説を誘うた。

『僕も矢張、牛肉黨に非ず、馬鈴薯黨にあらずですなア、然し近藤君のやうに牛肉が嗜きとも決つて居ないんです。勿論例の主義といふ手製料理は大嫌ですが、さりとして肉とか薯とかいふ嗜好にも従ふことが出来ません。』

『それぢやア何だらう？』と井山が其尤もらしいしよぼく眼をばちつかした。

『何でもないんです、比喩は廢して露骨に申しますが、僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出来ず、それならつて俗に和して肉慾を充して以て我生足れりとする可いから決めて了つたらと思ふけれど何といふ因果か今以て唯つた一つ、不思議な願を持つて居るから其ために何方とも得決めないで居ます。』

『何だね、其の不思議な願と言ふのは？』と近藤は例の壓しつけるやうな言振で問うた。

『一口には言へない。』

『まづ其様なことです。……實は僕、或少女に懸想したことがあります』と岡本は眞面目で語り出した。

『愉快々々、談愈々佳境に入つて來たぞ、それからツ？』と若い松木は椅子を煖爐の方へ引寄せた。

『少し談が突然ですがね、まづ僕の不思議の願といふのを話すには此邊から初めましょ。其少女はなか／＼の美人でした。』

『ヨウ！ヨウ！』と松木は躍上らんばかりに喜こんだ。

『どちらかと言へば丸顔の色のくつきり白い、肩つきの按排は西洋婦人のやうに肉附が佳くつて而もなだらかで、眼は少し眠むいやうな風の、パチリとはしないが物思に沈んでるといふ氣味がある此眼に愛嬌を含めて凝然と睥視られるなら大概の鐵腸漢も軟化しますなア。處で僕は容易にやられて了つたのです。最初其女を見た時は別にさうも思つて居なかつたが、一度が二度、三度目位から變に引つけられるやうな氣がして、妙に其女のこと氣になつて來ました。それでも僕は未だ戀したとは思ひませんでしたねえ。』

『或日僕が其女の家へ行きますと、兩親は不在で唯だ女中と其少女と妹の十二になるのと三人ぎりでした。すると少女は身體の具合が少し悪いと言つて鬱いで、奥の間に獨、つくねんと坐つて居ましたが、低い聲で唱歌をやつて居るのを僕は縁邊に腰をかけたまゝ聽いて居ました。』

「お榮さん僕はそんな聲を聴かされると何だか哀れつぽくなつて堪りません」と思はず口に出しま

す
「小妹は何故こんな世の中に生きて居るのか解らないのよ」と少女がさもく頼なさうに言ひま

した、僕にはこれが大哲學者の厭世論にも優つて眞實らしく聞えたが、その先は詳はしく言はない

でも了解りませう。

「二人は忽ち戀の奴隷となつて了つたのです。僕は其時初めて戀の楽しさと哀しさとを知りました。二月ばかりといふものは全て夢のやうに過ぎましたが、其中の出来事の一二次お安價ない幕を談すと先づ斯なこともありましたつケ。

「或日午後五時頃から友人夫婦の洋行する送別會に出席しましたが僕の戀人も母に伴はれて出席しました。會は非常な盛會で、中には伯爵家の令嬢なども見えて居ましたが夜の十時頃漸く散會になり僕はホテルから芝山内の少女の宅まで、月が佳いから歩いて送ることにして母と三人ぶらぶら行つて來ると、途々母は口を極めて洋行夫婦を褒め頰と羨ましきうなことを言つて居ましたが、其言葉の中には自分の娘の餘り出世間的傾向を有して居るのを残念がる意味があつて、斯る傾向を有するも要するに其交際する友に由ると言はぬばかりの文句すら交へたので、僕と肩を寄せて歩いて居た娘は、僕の手を強く握りました、それで僕も握りかへした、これが母へ對する果敢ない反

抗であつたのです。

「それから山内の森の中へ來ると、月が木間から蒼然たる光を洩して一段の趣を加へて居たが、母は我々より五歩ばかり先を歩いて居ました。夜は更けて人の通行も稀になつて居たから四邊は極めて靜に僕の靴の音、二人の下駄の響ばかり物々しう反響して居たが、先刻の母の言草が胸に應へて居るので僕も娘も無言、母も急に眞面目くさつて黙つて歩いて居ました。

「森影暗く月の光を遮つた所へ來たと思ふと少女は卒然僕に抱きつかんばかりに寄添つて

「貴様母の言葉を氣にして小妹を見捨ては不可ませんよ」と囁き、其手を僕の肩にかけるが早いか僕の左の頬にべたり熱いものが觸れて一種、花にも優る香が鼻先を掠めました。突然明い所へ出ると、少女の兩眼には涙が一ばい含んで居て、其顔色は物凄く蒼白かつたが、一月の光を浴びたからでも有りませう、何しろ僕はこれを見ると同時に、一種の寒氣を覺えて、恐いとも哀しいとも言ひやうのない思が胸に塞へて恰度、鉛の塊が胸を壓しつけるやうに感じました。

「其夜、門口まで送り、母なる人が一寸と上つて茶を飲めと勧めたを辭し自宅へと歸路に就きました。が、或難い謎をかけられ、それを解くと自分の運命の悲痛が悉く了解りでもするといつたやうな心持がして、決して比喩ぢやアない、確にさういふ心持がして氣になつてならない。そこで直ぐは歸らず山内の淋むしい所を選つてぶらぶら歩き、何時の間にか、丸山の上に出ましたから、ペン

チに腰をかけて暫時凝然と品川の空を眺めて居ました。

「若しか彼女は遠からず死ぬるのぢやアあるまいか」といふ一念が電のやうに僕の心中最も暗き底に閃いたと思ふと僕は思はず躍り上がりました。そして其處らを夢中で往きつ返りつ地を見つめたまゝ歩るいて「決して其なことはない」「斷じてない」と、魔を叱するかのやうに言つて見たが、魔は決して去らない、僕はをりく足を止めて地を凝視して居ると、蒼白い少女の顔がありくと眼先に現はれて来る、どうしても其顔色がこの世のものでないことを示して居る。

「遂に僕は心を静めて今夜十分眠る方が可い、全く自分の迷だと決心して丸山を下りかけました、すると更に僕を惑亂さする出来事にぶつかりました。といふのは上る時は少も気がつかなくつたが路傍にある木の枝から人がぶら下つて居たことです。驚きましたねエ、僕は頭から冷水をかけられたやうに感じて、其處に突立つて了ひました。

『それでも勇氣を鼓して近づいて見ると女でした、無論その顔は見えないが、路にぬぎ捨てある下駄を見ると年若の女といふことが分る……僕は一切夢中で紅葉館の方から山内へ下りると突當に彼の交番まで駈けつけて其由を告げました……』

『其女が君の戀して居た少女であつたといふのですかね』と近藤は冷やかに言た。

『それでは全て小説ですが、幸に小説にはなりませんでした。』

「翌々日の新聞を見ると年は十九、兵士と通じて懐胎したのが兵士には國に歸つて了はれ、身の處置に窮して自殺したものらしいと書いてありました、兎も角僕は其夜殆ど眠りませんでした。

『然かし能くしたもので、其翌日少女の顔を見ると平常に變つて居ない、そして其うつりした眼に笑を含んで迎へられると前夜からの心の苦惱は霧のやうに消えて了ひました。それから又一月ばかりは何のこともなく、たゞうれしい楽しいことばかりで……』

『成程これはお安くないぞ、』と綿貫が床を蹴つて言つた。

『まア黙つて聴き玉へ、それから、』と松木は至極眞面目になつた。

『其先を僕が言はうか、斯うでせう、最後に其少女が欠伸一つして、それで神聖なる戀が最後になつた、さうでせう?』と近藤も何故か眞面目で言つた。

『ハツハツ、ハ、』と二三人が噴飯して了つた。

『イヤ少なくとも僕の戀はさうであつた、』と近藤は言ひ足した。

『君でも戀なんていふことを知つて居るのかね、』これは井山の柄にない言草。

『岡本君の談話の途中だが僕の戀を話さうか?、一分間で言へる、僕と或少女と乙な中になつた、二人は無我夢中で面白い月日を送つた、三月目に女が欠伸一つした、二人は分れた、これだけサ。要するに誰の戀でもこれが大切だよ、女といふ動物は三月たつと十人が十人、飽きて了う、夫婦な

ら仕方がないから結合くわいいて居る。然し其は女が欠伸かみこを嚙殺かみころして其目を送おくつて居るに過ぎない。どうです君はさう思おもひませんか？」

「さうかも知れませんが、然し僕のは幸に其欠伸までには達たしませんでした、先を聴きいて下さい。」

「僕も其頃、上村君のお話と同様、北海道熱の烈しいのに罹かかつて居ました、實をいふと今でも北海道の生活は好よからうと思つて居ます。それで僕も色々想像さうぞうを描かいて居たので、それを戀人と語るのが何よりの樂たのでした、矢張村上君の亞米利加風アメリカの家は僕も大判の洋紙を鉛筆で圖取あまてしました。しかし少し違ちがうのは冬の夜の窓からちら／＼と燈火あかりを見せるばかりでない、折おり／＼樂たのしさうな笑聲わらべ、澄すむだ聲こゑで歌う女の唱歌を響こかしたかつたのです、……」

「だつて僕は相手が無かつたのですもの」と村上が情けなさうに言つたので、どつと皆が笑つた。

「君が馬鈴薯じやが黨いもぢやうを變節へんせつしたのも、一ひとは其故ゆゑだらう」綿貫わたぬきが言つた。

「イヤ其れは嘘うそ言いだ、上村君に若し相手があつたら北海道の土を踏ふまぬ先に變節へんせつして居たゞらうと思ふ、女といふ奴やつが到底馬鈴薯主義じやがぢやうぎを實行し得るもんぢやアない。先天的のビフテキ黨ビフテキだ、恰度僕のやうなんだ。女は芋いもが嗜好しやうごきなんといふのは嘘うそサ！」と近藤ちんどうが怒鳴どなるやうに言つた。其最後の一句で又た皆がどつと笑つた。

「それで二人は」と岡本が平氣で語りだしたので漸々やうやく靜しずまつた。

「二人は將來の生活地を北海道と決めて居まして、相談も漸やうやくく熟じゆくしたので僕は一先故郷に歸り、親族に託たくしてあつた山林田畑を悉く賣り飛ばし、其資金で新開墾地を北海道に作らうと、十日間位の積つり國に歸つたのが、親族の故障こじやうやら代價の不折合ふてあはしやらで思はず二十日はつかもかゝりました。

すると或日あるひ少女むすめの母から電報が來ました、驚おどいて取る物も取あへず歸京して見ると、少女むすめは最早死んで居ました。」

「死んで？」と松本は叫んだ。

「さうです、それで僕の總ての希望が悉く水の泡となつて了しまりました、」と岡本の言葉の未だ終らぬうち近藤は左の如く言つた、それが全まるて演説えんせつ口調くちやう、

「イヤどうも面白い戀愛談ラブたんを聴かされ我等一同感謝の至に堪たへません、さりながらです、僕は岡本君の爲めに其戀人の死を祝いわします、祝すといふが不穩當ふえんたうならば喜びます、ひそかに喜びます、寧ろ喜びます、却て喜びます、若しも其少女むすめにして死なゝんだならばです、其結果の悲慘ひさんなる、必ず死の悲慘ひさんに増すものが有つたに違ちがひないと信ずる。」

とまでは頗る眞面目まじめであつたが、自分でも少し可笑しくなつて來たか急に調子を變へ、聲を低ひうし笑味わらみを含ませて、

「何となれば、女は欠伸おひをしますから……凡そ欠伸に數種ある、其中尤も悲むべく憎にくむ可べきの欠伸

が二種ある、一は生命に倦みたる欠伸、一は戀愛に倦みたる欠伸、生命に倦みたる欠伸は男子の特色、戀愛に倦みたる欠伸は女子の天性、一は最も悲しむべく、一は尤も憎むべきものである。』と少し眞面目な口調に返り、

『即ち女子は生命に倦むといふことは殆どない、年若い女が時々そんな様子を見せることがある、然し其は戀に渴して居るより生ずる變態たるに過ぎない、幸にして其戀を得る、其後幾年月かは至極樂しさうだ、眞に樂しさうだ、恐らく樂といふ字の全意義は斯る女子の境遇に於て盡されて居るだらう。然し忽ち倦んで了う、則ち戀に倦んで了う、女子の戀に倦んだ奴ほど始末にいけないものは決して他にあるまい、僕はこれを憎むべきものと言つたが實は寧ろ憐れむべきものである、處が男子はさうでない、往々にして生命そのものに倦むことがある、斯る場合に戀に出遇ふ時は初めて一方の活路を得る。そこで全き心を捧げて戀の火中に投ずるに至るのである。斯る場合に在ては戀則ち男子の生命である。』

と言つて岡本を顧み、

『ね、さうでせう。どうです僕の説は穿つて居るでせう。』

『一向に要領を得ない!』と松木が叫むだ。

『ハッ、、要領を得ない?、實は僕も餘り要領を得て居ないのだ、たゞ今のやうに言つて見たい

ので。どうです岡本君、だから僕は思ふんだ君が馬鈴薯黨でもなくピフテキ黨でもなく唯だ一の不思議なる願を持つて居るといふことは、死んだ少女に遇ひたいといふんでせう。』

『否!』と一聲叫んで岡本は椅子を起つた。彼は最早餘程酔つて居た。

『否と先づ一語を下して置きます。諸君にして若し僕の不思議なる願といふのを聽いて呉れるなら談しませう。』

『諸君は知らないが僕は是非聴く』と近藤は腕を振つた。衆皆は唯だ黙つて岡本の顔を見て居たが松木と竹内は眞面目で、綿貫と井山と上村は笑味を含んで。

『それでは否の一語を今一度叫んで置きます。』

『成程僕は近藤君のお察しの通り戀愛に依て一方の活路を開いた男の一人である。であるから少女の死は僕に取ての大打撃、殆ど總ての希望は破壊し去つたことは先程申上げた通りです、若し例の反魂香とかいふ代物があるなら僕は二三百斤買ひ入れたい。どうか少女を今一度僕の手に戻したい。僕の一念こゝに至ると身も世もあられぬ思がします。僕は平氣で自狀しますが幾度僕は少女を思つて泣いたでせう。幾度其名を呼んで大空を仰いだでせう。實に彼少女の今一度此世に生き返つて來ることは僕の願です。』

『しかし、これが僕の不思議なる願ではない。僕の眞實の願ではない。僕はまだ大なる願、深

い願、熱心なる願を有つて居ます。この願さへ叶へば少女は復活しないでも宜しい。復活して僕の
 面前で僕を賣つても宜しい。少女が僕の面前で赤い舌を出して冷笑しても宜しい。

「朝に道を聞かば夕に死すとも可なりといふのと僕の願とは大に意義を異にして居るけれど、其心
 持は同じです。僕は此願が叶はん位なら今から百年生きて居ても何の益にも立たない、一向うれしく
 ない、寧ろ苦しう思ひます。」

「全世界の人悉く此願を有つて居なくても宜しい、僕獨り此願を追ひます、僕が此願を追うたが爲
 めに其爲めに強盜罪を犯すに至ては僕は悔いがない、殺人、放火、何でも關ひません、若し鬼ありて
 僕に保證するに、爾の妻を與へよ我これを姦せん爾の子を與へよ我これを喰はん然らば我は爾に爾
 の願を叶はしめんと言はゞ僕は雀躍して妻あらば妻、子あらば子を鬼に與へます。」

「此奴は面白い、早く其願といふものを聞きたいもんだ！」と綿貫が其髯を力任せに引いて叫んだ。
 「今に申します。諸君は今日のやうなグラ／＼政府には飽きられたらうと思ふ、そこでピスマー
 クとカプールとグラッドストーンと豊太閤見たやうな人間をつきまぜて一鋼鐵のやうな政府を形り、
 思切つた政治をやつて見たいといふ希望があるに相違ない、僕も實にさういふ願を有つて居ます、
 併し僕の不思議なる願はこれでもない。」

「聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、基督や釋迦や孔子のやうな人になり

たい、眞實にさうになりたい。併し若し僕の此不思議なる願が叶はないで以て、さうなるならば、僕
 は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。

「山林の生活！と言つたばかりで僕の血は沸きます。即ち僕をして北海道を思はしめたものもこれ
 です。僕は折り／＼郊外を散歩しますが、この頃の冬の空晴れて、遠く地平線の上に國境をめぐる
 連山の雪を戴いて居るのを見ると、直ぐ僕の血は波立ちます。堪らなくなる！然しです、僕の一念
 ひとたび彼の願に觸れると、斯んなことは何でもなくなる。若しも僕の願さへ叶ふなら紅塵三千丈
 の都會に車夫となつて居てもよろしい。」

「宇宙は不思議だとか、人生は不思議だとか。天地創生の本源は何だとか、やかましい議論がありま
 す。科學と哲學と宗教とはこれを研究し闡明し、そして安心立命の地を其上に置かうと悶いて居る。
 僕も大哲學者になりたい、ダルキン跳足といふほどの大科學者になりたい、若しくは大宗教家にな
 りたい。併し僕の願といふのはこれでもない。若し僕の願が叶はないで以て、大哲學者になつたな
 ら僕は自分を冷笑し自分の顔に「偽」の一字を烙印します。」

「何だね、早く言ひ給へ其願といふやつを！」松木はもどかしさうに言つた。
 「言ひませう、吃驚しちやアいけませんぞ。」

「早く早く！」

岡本は靜に

『吃驚したいといふのが僕の願なんです。』

『何だ！馬鹿々々しい！』

『何のこつた！』

『落噺か！』

人々は投げだすやうに言つたが、近藤のみは黙言で岡本の説明を待つて居るらしい。

『斯ういふ句があります、』

Awake, Poor troubled sleeper: shake off thy torpid night-mare dream.

即ち僕の願とは夢魔を振り落したいことです！』

『何のことだか解らない！』と綿貫は呟やくやうに言つた。

『宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です！』

『愈々以て謎のやうだ！』と今度は井山が其顔をつるりと撫でた。

『死の祕密を知りたいといふ願ではない、死てふ事實に驚きたいといふ願です！』

『イクラでも君勝手に驚けば可いぢやアないか、何でもないことだ！』と綿貫は嘲るやうに言つた。

『必ずしも信仰そのものは僕の願ではない、信仰無くしては片時たりとも安ずる能はざるほどに此

宇宙人生の祕義に悩まされんことが僕の願であります。』

『成程こいつは益々解りにくいぞ、』と松木は呟やいて岡本の顔を穴のあくほど凝視して居る。

『寧ろ此使用古した葡萄の様な眼球を剝出したのが僕の願です！』と岡本は思はず卓を打つた。

『愉快々々！』と近藤は思はず聲を揚げた。

『ブルムスの大會で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの膽は喰ひたく思はない、彼が十九歳の時

學友アレキシスの雷死を眼前に視て死そのもの、祕義に驚いた其心こそ僕の欲する處であります。

『勝手に驚けと言はれました綿貫君は。勝手に驚けとは至極面白い言葉である、然し決して勝手に驚けないのです。』

『僕の戀人は死にました。此世から消えて失なりました。僕は全然戀の奴隷であつたから彼少女に死なれて僕の心は揺亂されてたことは非常であつた。しかし僕の悲痛は戀の相手の亡なつたが爲の悲痛である。死てふ冷冽なる事實を直視することは出来なかつた。即ち戀ほど人心を支配するものはない、其戀よりも更に幾倍の力を人心の上に加ふるものがあることが知られます。』

『曰く習慣の力です。』

Our birth is but asleep and forgetting.

この句の通りです。僕等は生れて此天地の間に来る、無我無心の小兒の時から種々な事に出遇ふ、

毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、是に於てか此不可思議なる天地も一向不可思議でなくなる。生も死も、宇宙萬般の現象も尋常茶飯となつて了ふ。哲學で候ふの科學で御座ると言つて、自分は天地の外に立つて居るかの態度を以て此宇宙を取扱ふ。

Full soon thy soul shall have her earthly freight,

And custom lie upon thee with a weight,

Heavy as frost, and deep almost as life!

この通りです、この通りです！

『即ち僕の願は如何にかして此霜を叩き落さんことであります。如何にかして此古び果てた習慣の壓力から脱がれて、驚異の念を以て此宇宙に俯仰介立したいのです。その結果がビフテキ主義とならうが、馬鈴薯主義とならうが、將た厭世の徒となつて此生命を咀嚼が、決して頓着しない！』

『結果は頓着しません、原因を虚偽に置きたくない。習慣の上に立つ遊戯的研究の上に前提を置きたくない。』

『ヤレ月の光が美だとか花の夕が何だとか、星の夜は何だとか、要するに滔々たる詩人の文字は、あれは道樂です。彼等は決して本物を見ては居ない、まぼろしを見て居るのです、習慣の眼が作る處のまぼろしを見て居るに過ぎません。感情の遊戯です。哲學でも宗教でも、其本尊は知らぬこと其

末代の末流に至つては悉くさうです。

『僕の知人に斯う言つた人があります。吾とは何ぞや (What am I?) なんていふ馬鹿な問を發して自から苦むものがあるが到底知れないことは如何にしても知れるもんでない、と斯う言つて嘲笑を洩らした人があります。世間並からいふと其通りです、然し此問は必ずしも其答を求むるが爲めに發した問ではない。實に此天地に於ける此我てふものゝ如何にも不思議なることを痛感して自然に發したる心靈の叫である。此問其物が心靈の眞面目なる聲である。これを嘲るのは其心靈の麻痺を白状するのである。僕の願は寧ろ、如何にかして此問を心から發したいのであります。處がなか〜』

此問は口から出ても心からは出ません。
『我何處より來り、我何處にか往く、よく言ふ言葉であるが、矢張り此問を發せざらんと欲して欲せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るので、詩でもさうです、だから其以外は悉く遊戯です虚偽です。』

『もう止ませう！ 無益です、無益です、いくら言つても無益です。……ア、疲勞た！しかし最後一言しますがね、僕は人間を二種に區別したい、曰く驚く人、曰く平氣な人……』

『僕は何方へ屬するのだらう！』と松木は笑ひながら問うた。
『無論、平氣な人に屬します、こゝに居る七人は皆な平氣の平三の種類に屬します。イヤ世界十幾

億萬人の中、平氣な人でないものが幾人ありませうか、詩人、哲學者、科學者、宗教家、學者でも、政治家でも、大概は皆な平氣で理窟を言つたり、悟り類をしたり、泣いたりして居るのです。僕は昨夜一の夢を見ました。

『死んだ夢を見ました。死んで暗い道を獨りだとぼく、辿つて行きながら思はず「マサカ死なうとは思はなかつた！」と叫びました。全くです、全く僕は叫びました。』

『そこで僕は思うんです、百人が百人、現在、人の葬式に列したり、親に死なれたり子に死なれたりしても、矢張り自分の死んだ後、地獄の門でマサカ自分が死なうとは思はなかつたと叫んで鬼に笑はれる仲間でせう。ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、』

『人に驚かして貰へばしやつくりが止るさうだが、何も平氣で居て牛肉が喰へるのに好んで吃驚したいといふのも物數奇だねハ、ハ、』と綿貫は其太い腹をかゝへた。

『イヤ僕も吃驚したいと言ふけれど、矢張り單にさう言ふだけですよハ、ハ、』

『唯だ言ふだけのことか、ヒ、ヒ、ヒ、』

『さうか！唯だお願ひ申して見る位なんですなハッ、ハッ、』

『矢張り道樂でさアハッハッ、ハッ』と岡本は一緒に笑つたが、近藤は岡本の顔に言ふ可からざる苦痛の色を見て取つた。

女 難

—

今より四年前の事である、(と或男が話しだした) 自分は何かの用事で銀座を歩いて居ると、或四辻の隅に一人の男が尺八を吹いて居るのを見た。七八人の人が其前に立つて居るので、自分もふと足を止めて聴く人の仲間に加はつた。

頃は春五月の末で、日は西に傾いて西側の家並の影が東側の家の礎から二三尺も上に這ひ上つて居た。それで尺八を吹く男の腰から上は鮮かな夕陽に照されて居たのである。

夕暮近いので、街は一層の雑沓を極め、鐵道馬車の往來、人車の東西に駈けぬける車輪の音、途を急ぐ人足の響など、四方は騒然紛然として居た。此騒がしい場處の騒がしい時に彼男は悠然と尺八を吹いて居たのである。それであるから、自分の目には彼が半身に浴びて居る春の夕陽までが如何にも靜かに、穩やかに見えて、彼の尺八の音の達く限り、其處に悠々たる一寰區が作られて居るやうに思はれたのである。

自分は彼が吹き出づる一高一低、絶えんとして絶えざる哀調を聴きながらも、熟々彼の姿を看た。

彼は盲人である。年頃は三十二三でもあらうか、目に焼けて黒いのと、垢に埋れて汚ないので、年も確とは判じかねるほどであつた。たゞ汚ないばかりでなく、見るからして彼は甚だ憔悴て居た、思ふに晝は街の塵に吹き立てられ、夜は木賃宿の隅に垢染た夜具を被るのであらう。容貌は長い方で、鼻も高く眉毛も濃く、額は櫛を加へたこともない蓬々とした髪で半ば被はれて居るが、見たところ程能く發達し、よく下品な人に見るやうな骨張つた無下に凸起した額ではない。

音の力は恐ろしい者で、如何な下等な男女が彈吹しても、聴く方から思ふと、何となく彈吹者其人までをゆかしく感ずるものである。殊に此盲人は其のむさぐるしい姿に反映して何處となく人品の高いところがあるので、猶ほ更ら自分の心を動かした、恐らく聴いて居る他の人々も同感であつたらうと思ふ。其吹き出づる哀樂の曲は彼が運命拙なき身の上の舊歡今悲を語るが如くに人々は感じたであらう。聴き捨てにする人は少なく、一錢二錢を彼の手に握らして立去るが多かつた。

二

同じ年の夏である。自分は家族を連れて鎌倉に暑を避け、山に近き一小屋を借りて住んで居た。或夜のこと、月影殊に冴えて居たので獨り散歩して濱に出た。濱は晝間の賑ひに引きかへて、月の景色の妙なるにもかゝらず人出少し。自分は小川の海に注

ぐ汀に立つて波に碎くる白銀の光を眺めて居ると、何處からともなく尺八の音が微に聞えたので、四邊を見廻はすと、笛の音は西の方、程近いところ、漁船の多く曳上げてある邊から起るのである。近づいて見ると、果して一艘の小舟の水際より四五間も曳上げてあるを其周圍を取り巻いて、或者は舷に腰かけ、或者は砂上に蹲踞り、或者は立ちなど、十人あまりの男女が集まつて居る、其中に一人の男が舷に倚つて尺八を吹いて居るのである。

自分は、人々の群よりは、離れて聴いて居た。月影はこんもりと此一群を映して居る、人々は一語を發しないで耳を傾けて居た。今しも一曲が終はつたらしい、聴者の三四人は立ち去つた。餘の人々は次の曲を待つて居るけれど吹く男は尺八を膝に突き首を垂れたまゝ身動きも仕ないのである。斯して又四五分も経つた。他の三四人が又立ち去つた。自分は小船に近づいた。

見ると残つて居る聴者の三人は濱の童の一人、村の若者の二人のみ、自分は舷に近く笛吹く男の前に立つた。男は頭を上げた。思ひきや彼は此春、銀座街頭に見たる其盲人ならんとは。されど盲人なる彼れの盲目ならずとも自分を見知るべくもあつず、暫時自分の方を向いて居たが、やがて又た吹き初めた。指端を弄して低き音の縷の如きを引くこと暫し、突然中止して船端より下りた。自分は卒然、

『盲人さん、私の宅に来て、少し聞かして呉れんか。』

『へい、へい、』と彼は驚いたやうに言つて急に自分の顔を見て、そして又頭を垂れ首を傾け『へい、何方様へでも参ります。』

『ウン、それぢや来てお呉れ。』と自分は先に立つた。

『お前の眼は全く見えないのかね。』と四五歩にして振り返りさま自分は問うた。

『い、エ、右の方は少し見えるので御座います。』

『少しでも見えれば結構だね。』

『へエ、へ、へ、』と彼は軽く笑つたが『イヤなまじすこしばかり見えるのも能く御座いません、慾が出ましてな。』

『オイ橋だぞ。』と溝にかけし小橋に注意して『けれども全く見えなくちやアこんなところまで来て稼ぐわけにゆかんではないか。』

『稼ぐのなら宜う御座いますが流がすので……。』

『お前何處だい、生れは。』

『生れは西で御座います、へい。』

『私はお前を此春、銀座で見たことがある、如何いふものか其時から時々お前のことを思ひだすのだ、だから今もお前の顔を一目見て直ぐ知つた。』

『へい左様で御座いますか、イヤもう行き當りばつたりで足の向き次第、國々を流して歩くので御座いますから何處で何誰様に逢ひます事やら……。』

途で二三の年若い男女に出遇つた。輕雲一片月をかざしたので四邊は朦朧になつた。手風琴の軽い調子が高い窓から響く。間もなく自分の宅に着いた。

三

縁邊に席を興へて、先づ麥湯一杯、それから一曲を所望した。自分は尺八の事には全然素人であるから、彼が吹く其曲の善悪、彼の技の巧拙は解らないけれども、心をこめて吹く其音色の脈々として我に迫る時、われ知らず凄動したのである。泣かんか、泣くには餘りに悲哀深し、吹く彼れは抑も何の感ずることなきか。

曲終れば、音を賣るものゝ常として必ず笑み、必ず謙遜の言葉の二三を吐くのに反して、彼は默然として控へ、今しも我が吹き終つた音の虚空に消えゆく、消えゆきし其跡を逐ふかと思はるる許りであつた。

自分け彼の言葉つき、其態度に依り、初より其身の上に潜める物語りのあるべきを想像して居たから、遠慮なく切りだした。

「尺八は本式に稽古したのだらうか、失敬なことを聞くが。」

「イ、エ左様ではないので御座います、全く自己流で、たゞ子供の時から好きで吹き慣らしたといふばかりで、人様にお聞かせ申すものではないので御座います、へい。」

「イヤさうでない、全く巧妙いものだ、これほど技があるなら人の門を流して歩かないでも弟子でも取つた方が楽だらうと思ふ、お前獨身者かね？」

「へい、親もなければ妻子もない氣樂な孤獨者で御座います、へッへ、へ、へ。」

「イヤ氣樂でもあるまい、日に焼け雨に打れ、住むところも定まらず國々を流れゆくなどは餘り氣樂でもなからうぢやアないか。けれどもいづれ何か理由のあることだらうと思ふ、身の上話を一ツ聞かして貰ひたいものだ。」と思ひ切つて正面から問ひかけた。人の不幸や、零落につけこんで、其祕密まで聞かうとするのは、決して心あるものゝすることでないとは承知しながらも、彼に二度まで遇ひ、其遇うた場所と趣とが少からず自分を動かしたゆめに、それらを顧慮することが出来なかつたのである。

「へい、お話ししても可しう御座います。今日は如何いふものか頻りと子供の時の事を想ひだして、先程も別荘の坊様達がお庭の中で聲を揃へて唱歌を歌つてお居でになるのを聞いた時何だか泣きたくなりました。」

私の九十の頃で御座います、能く母に連れられて城下から三里奥の山里に住んで居る叔母の家を

訪ねて、二晩三晩泊つたもので御座います。今日も恰度その頃のことを久ぶりで思ひ出しました。

今思ふと、私が十七八の時分他が尺八を吹くのを聞いて、心を擣られるやうな氣が仕ましたが今私が九や十の子供の時を想ひ出して堪らなくなるのと恰度同じ心持で御座います。

父には五の歳に別れまして、母と祖母との手で育てられ、一反ばかりの廣い屋敷に、山茶花もあり百日紅もあり、黄金色の荔枝の實が袖垣に下つて居たのは今も眼の先にちらつきまします。家と屋敷ばかり廣うても貧乏士族で實は喰ふにも困る中を母が手内職で、子供心には何の苦勞もなく日を送つて居たので御座います。

母も心細いので山家の里に時々歸へるのが何よりの樂み、朝早く起きて、淋しい士族屋敷の杉垣ばかり並んだ中をとぼくと歩るきだす時の心持は何とも言へませんでした。山路三里は子供には少し難儀で初めの中こそ母よりも先に勇ましく飛んだり跳ねたり、田溝の鮎に石を投げたりして参りますが峠にかゝる半程で凹たれて了ひました。それを母が勵まして絶頂の茶屋に休んで峠餅とか言ひまして茶屋の婆が一人定めの名物を喰はして貰ふのを樂みに、又一呼吸の勇氣を出しました。

峠を越して半程まで来ると、直ぐ下に叔母の村里が見えます、春さきは狭い谷々に霞が飄飄いて晝のやうで御座いました、村里が見えると最早到着した氣で其處の路傍の石で一休しまして、母は煙草

を吸ひ、私は山の崖から落ちる清水を飲みました。

叔母の家は古い郷士で、其頃は大家産が傾いて居たさうですが、それでも私の目には大變金持のやうに見えたので御座います。太い大黒柱や、薄暗い米倉や、葛の這ひ上つた練塀や、深い井戸が私には皆な難有かつたので、下男下女が私のことを城下の旦那様と言つてくれるのがうれしかつたので御座います。

けれども何より嬉しくつて今思ひだしても堪りませんのは同じ年輩の従兄弟と二人で遊ぶことでした。二人は能く山の峽間の溪川に山鱒を釣りに行つたもので御座います。山岸の一方が淵になつて蒼々と湛へ、此方は浅く瀬になつて居ますから、私其は其瀬に立つて糸を淵に投込んで釣るので御座います。見上げると兩側の山は切削だらうに突立つて、それに雑木や楮松が暗く茂つて居ますから、下から瞻ると空は帯のやうなのです。聲を立てると山に響いて山が唸ります、黙つて釣つて居ると森として居ます。

或日兩人は餘念なく釣つて居ますと、何時の間にか空が變つて、颯と雨が降つて來ました。ところが其日は殊によく釣れるので二人とも歸らうと言はないのです。太い雨が竿に中る、水面は水烟を立て、雨が跳る、見あげると雨の足が山の絶頂から白い糸のやうに長く篠白を立て、落るのです。衣服はびしょぬれになる、これは大變だと思ふ矢先に、グイグイと強く糸を引く、上げると尺にも

近い山鱒の紫と紅の條のあるのが釣れるので御座います、暴れるやつをグイと握つて籠に押込む時は、水に棲む魚までが此雨に濡れて他の時よりも一倍鮮かだ新しいうらに思はれました。

『最早歸らうか、』と一人が言つて此方を一寸向きますが、直ぐ又た水面を見ます。

『歸らうか、』と一人が答へますが、これは見向きもしません、實際何を自分で言つたのかまるで夢中なので御座います。

其内に雷が直ぐ頭の上で鳴りだして、それが山に響いて山が破裂するかと思ふやうな悽い音がして來たので、二人は物をも言はず糸を巻いて、籠を提げるが早いかドン／＼逃げだしました。途中まで來ると下男が迎へに來るのに逢ひましたが、家に歸ると叔母と母とに叱られて、籠を井戸邊に投げ出したまゝ、衣服を着更へ直ぐ物置のやうな二階の一室に入り小さくなつて、源平盛衰記の古本を出して畫を見たものです。

けれども母と叔母は對坐して居ても決して笑ひ轉げるやうなことはありません、二人とも言葉の少ない、物案じ顔の、色艶の悪い女でしたが、何か優しい低い聲でひそ／＼話し合つて居ました。一度は母が泣顔をして居る傍で叔母が涙ぐんで居るのを見ましたが私は別に氣にも留めず、たい／＼一寸可恐いやうな氣がして直ぐと茶間を飛び出したことがありました。

私は七日も十日も泊つて居たいのでございますが、長くて四日も經ちますと母が歸らうと言ひま

すので仕方なしに歸るので御座います。一度は一人残つて居ると強情を張りましたので、母だけ先に歸りましたが、私は日の暮かゝりに縁先に立つて居ますと、叔母の家は山に據つて高く築きあげてありますから山里の暮れゆくのが見下されるのです。西の空は夕日の餘光が水のやうに冴えて、山々は薄墨の色にぼけ、蒼い烟が谷や森の裾に浮いて居ます、何だか裏悲しくなりました。寺の鐘までが平時とは違うやうに聞え、其長く曳く音が谷々を渡つて遠く消えてゆくのを聞きましたら、急に母が戀しくなつて、何故一緒に歸らなかつたらう、今時分は家に着いて祖母さんと何か話して御座るだらうなど思ひますと堪らなくなつて叔母にこれから直ぐ歸ると云ひだしました。叔母は笑つて取合つて呉れません、其中に燈火が點く、從兄弟と挾將棋をやるなどする中に何時か紛れて了ひましたが、次の日は下男に送られ直ぐ家に歸りました。

又た母と一しよに歸る時など、二人とも出かける時ほどの元氣はありませんで、峠を越す時、母は幾度となく休みます。思ひ出しますのは其時の母の顔で御座います。石に腰を卸してほつと呼吸を吐いて言ふに言はれん悲しげな顔容を仕ます、其顔容を見ますと私までが子供心にも悲しいやうな氣がしまして黙つてつくねんと母の傍に腰をかけて居るので御座います。さうすると母が、『お前腹が減きはせんか、腹が減いたら餅をお喰べ、出して上げようか、』と言つて合財囊の口を開きかけます。私が、『腹は減ない、』と言へば、『そんなことを言はないで一つお喰べ、母親も喰べるから、』と言

つて無理に餅を呉れます。さうされますと、私は何故か尙ほ悲しくなつて、母の膝にしがみ附いて泣きたいほどに感じました。

私は今でも母が戀しくつて戀しくつて堪らんで御座います。』

盲人は懷舊の念に堪へずや、急に言葉を止めて頭を垂れて居たが、暫時して（聽者の誰人なるかは既に忘れ終てたかの如く熱心に）

『けれどもこれは當然で御座います、母は全然私のために生きて居ましたので、一人の私をたゞ無暗と可愛がりました。めつたに叱つたこともありませんが、たまさか叱りましても直ぐに母の方から謝罪るやうに私の機嫌を取りました。それで私は我儘な剛情者に育ちましたかと言ふにさうではないので、腕白者のすることだけは一通りやりながら氣が弱くて女のやうなところがあつたので御座います。』

これが昔氣質の祖母の氣に入りません、やゝともすると母に向ひまして、
『お前が餘り優しくするから修藏までが氣の弱い兒になつて了う。お前からして今少し毅然して男は男らしく育てんと不可まけんぞ、』とかく言つたものです。

けれども母の性質として如何しても男は男らしくといふやうな烈しい育て方は出來ないので、不たゞ無暗と私が可愛いので、先から先と私の行末を考へては、それを幸福の方には取らないで、不

幸なことばかりを想ひ、一層私がふびんで堪らないので御座いました。
 或時、母は私の行末を心配する餘りに、善教寺といふ寺の傍に店を出して居た怪しい賣卜者の所へ私を連れて参りました。

賣卜者の顔は能く憶えて居ります、丸顔の眼の深く落ちこんだ小さな老人で、顔容は薄氣味悪う御座いましたが母と話をする其言葉つきは大變に優しく丁寧で、「ア、左様かな、それは心配なこと、御尤も、能く私がトて進めます」といふ調子で御座いました。

老人は私の顔を天眼鏡で覗いて見たり、筮竹をがちゃ／＼いはして見たり、まるで人相見と八卦見と一緒にやつて居ましたが、やがてのことに、

『イヤ御心配なさるな、此の兒さんは末は必然出世なさるゝ、よほど好い人相だ。けれど一つの難がある、それは女難だ、一生涯女に氣をつけてゆけば必然立派なものになる、』と私の顔を撫でて、「むゝ、好い兒だ、』と繁々私の顔を見ました。

母は大喜びに喜びまして、家に歸るや直ぐと祖母にこの事を吹聴しました處が祖母は笑ひながら『男は劍難の方が未だ男らしいぢやないか、この兒は色が白うて弱々しいから其て卜者から女難があると云はれたのぢや、けれども今から女難もあるまい、早く 十七八、遅くとも二十ごろから氣をつけるが可い、』と申しました。

ところが私には其時(十二でした)最早女難があつたので御座います。

こゝまでお話したので御座いますから、これから私の女難の二つ三つを懺悔いたしませう。賣卜者はうまく私の行末をトひ當てたので御座います。

その頃、私の家から三丁ばかり離れて飯塚といふ家が御座いましたが其處の娘におさよと申しまして十五ばかりの春のすわりとして可愛らしい兒が居りました。

其兒が途で私を見ると必然我家に遊びに來いと言ふのです。私も初の中は行きませんでした餘り度々言ふので一度参りますと、一時間も二時間も止めて還さないで膝の上に抱き上げたり、頸にかじりついたり、頭の髪を丁寧に搔き下して猶ほ可愛くなつたと其柔かな頬を無理に私の顔に押しつけたり、色々な眞似をするので御座います。

さうすると私もそれが嬉しいやうな氣がして、その後は度々遊びに出かけて、おさよの顔を見ないと物足りないやうになりました。

その中、賣卜者から女難のことを言はれ、母からは女難といふことの講釋を聞かされたので、子供心にも、若しか今のが女難ではあるまいかと、甚く可恐くなりましたが、母の前では顔にも出さず、ない／＼心を痛めて居ながらも時々おさよの許に遊びに参りましたので御座います。

今から思ひますと、矢張そのころ私はおさよを慕うて居たに違ひないので、おさよが私を抱い

て赤兒扱ひにするのを私は表面で嫌がりながら内々はうれしく思ひ、其温かな柔かい肌で押しつけられた時の心持は今でも忘れないので御座います。女難といへば其時最早女難に罹つて居たといつても宜しう御座います。

母は毎日のやうに、女は可恐ものだといふ講釋をして聽かし、色々昔の人のことや、城下の若い者の身の上などを例に引いて話すので御座います。安珍清姫のことまで例に引きました。外面如菩薩内心如夜叉などいふ文句は耳にたこの出来るほど聞かされて、何んでも若い女と見たら鬼か蛇のやうに思ふが可い、親切らしいことを女が言ふのは皆な欺すので、うかと其口に乘らうものなら直ぐ大難に罹りますぞよといふのが母の口癖でありましたので御座います。

私は母を信仰して居ましたから母の言ふことは少しも疑ひませんでした。それですからおさよも事に依つたら内心如夜叉ではないかと可恐がりながらも、自分で言譯を作らへて、おさよさんは未だ子供だし自分も未だ子供だからそんな可恐いことはない、おさよさんが自分を可愛がるのは眞實に可愛がるので決して欺すのぢやあないと斯ういふ風に考へて居たので御座います。

ところが或日、日の暮に飯塚の家の前を通るとおさよが飛び出して来て、私を無理に引張り込みました。そして何故此四五日遊びに来なかつたと聞きますから、風邪を引いたといひますと、其は大變だ、最早癒つたかと、私の顔を覗きこんで、未だ顔色が好くない、大事になさいよ修さんが病

氣になつたら私は死んで了うと言つて熱と私の眼を見るので御座います。私は氣が弱う御座いますから斯ういはれますと何だからうれしいやら悲しいやらツイ我知れず涙ぐみました、それを見ておさよは私を抱きかゝへましたが見るとおさよも眼に一杯涙をもつて居るので御座います。そして今夜は泊れ母上の代りに私が抱いて寝てあげるからといひます。母上に叱られるから嫌だと申しますと、母上には私が今往つて謝つて来るから關はないといひます。其時私が、若し母上に言つたら猶ほ叱られる、おさよさんのところへ遊びに来るのも内證なんだからと小聲で言ひましたら、卒然私を突き離して、何故内證で来るの、修さんと私と遊んぢやア悪いの、悪いのなら最早来なくつても可う御座んすよと、可恐い顔をして私を睨みつけたので御座います。私は慄ひ上つて縁から飛び下り、一目散に飯塚の家から駆け出しました。

それからといふものは決して飯塚に参りません、おさよに逢つても逃げ出しました。おさよは私の逃げ出すのを見て何時もたゞ笑つて居ましたから、私は尙ほおさよが自分を欺しかけて居たのだと信じたもので御座います。

五

次の女難は私の十九の時御座います。此時は最早祖母も母も死んでしまひ、私は叔母の家の厄

介になりながら、村の小學校に出して貰つて月五圓の給料を受けて居ました。祖母の亡くなつたのは十五の春、母は其秋に亡くなりましたから私は急に孤兒になつて了ひ、終に叔母の家(ごう)に引取られたので御座います。十八の年まで淋しい山里に居て學問といふ學問は何にも爲(な)ないでたゞ城下の中學校に寄宿して居る從兄弟(いとこ)から送つて寄す少年雜誌見たやうなものを讀み、其の他は叔母(おぢい)の家に昔から在つた源平盛衰記、太平記、漢楚軍談、忠義水滸傳のやうなものばかり讀んだので御座います。それですから小學校の教師さへも全くは覺束ないのですけれど、叔母の家が村の舊家で、其威光で無理に雇つて貰つたといふ次第で御座いました、母の病氣の時、母は呉れくも女に氣をつけると、死ぬる間際まで、女難を戒しめ、何卒早く立身して呉れ、草葉の蔭から祈つて居るぞと言つて死にました。けれども如何して立身するか、それは全然母にも見當がつかかなかつたので御座います。母は叔母の家から私の學資を出さうとしたらしう御座いました。之が都合よく參りませんものから、私の立身を堅く信じながらも、たゞそれは漠としたことで、實は内々甚く心痛したものと見えます。それですから母としては唯だ女難を戒しめる外に立身の方法はなかつたので御座います。私は又性質意氣地が無いのかして、自分の立身のことには如何いふものか餘り氣をかけませんでした。たゞ母に急に別れたので、其當座の悲しき、一月二月は叔母の家に居ても、如何かすると人の見ぬところで、めそく泣いて居りました。

月日の經つ内に悲みもだんく薄らぎ、終には時々思ひ出す位のことと、叔母の親切にほだされ、何時しか叔母を母のやうに思うて目を送るやうになつたので御座います。

十八の歳から、叔母の家を五丁ばかり離れた小學校に通つて、同僚の三四人と共に村の子供の世話をして、夜は尺八の稽古に浮身をやつし、此世を面白可笑しく暮すやうになりました。尺八の稽古といへば、そのころ村に老人(おじい)が居まして、自己流の尺八を吹いて居ましたのを村の若い者が煽つて大先生のやうにいひふらし、終に私も其弟子分になつたので御座います。けれども元大先生からして自己流ですから弟子も皆な自己流で、たゞ無暗と吹くばかり、その内手が慣れて來れば、やれ誰が巧いとか拙いとか各自に評判をし合つて皆なて天狗になつたので御座います。私の性質でありませうか、私だけは若い者の中でも別段に凝り固まり、間がな隙(すま)がな、尺八を手にして、それを吹いてさへ居れば慾も得もなく、朝早く日の昇らぬうちに裏の山に上つて、岩に腰をかけて曉の霧を浴びながら吹いて居ますと、私の尺八の音でもつて朝霧が晴れ、私の轉ばす音につれて日がだんく昇るやうにまで思つたこともあつたので御座います。

それですから自然と若い者の中でも私が一番巧いといふことになり、老先生までが眞實に稽古すれば日本一の名人になるなど、そのかしたものです。その中十九になりました。恰度春の初めのことで御座います。日の暮方で、私は例の通り、尺八を持つて村の小川の岸に腰をかけて、獨り吹

き澄まして居ますと、後から『修藏様、』と呼ぶものがあります。振り回つて見ると武之允といふかめしい名を寺の和尚から附けて貰つた男で隣村に越す坂の上に住んで居る若い者でした。

『何だ。武之允山城守。』

『全く修藏様は尺八が巧いよ。』とにや／＼笑ふのです。この男は少し變物で、横着物で、随分人をひやかすやうな口振をする奴ですから、『殴るぞ、』と尺八を構へて喝す眞似をしますと、彼奴急に眞面目になりまして、

『修藏様に是非見て貰ひたいものがあるんだが見て呉れませんか、』と妙なことを言ひ出したので御座います。變に思ひまして、

『何だらう、私に見て貰ひたいといふのは。』

『何でも可いから、たゞ見て貰へば可いのだ。』

『どんなものだい、品物かい、』と問ひますと武の奴、妙な笑ひかたをして、

『貴郎の大ききなものだ。』

『手前はおれを愚弄なッ。』

『愚弄のぢやアない、全く見て貰ひたいので御座んす。私のお頼みだから是非見てやつて下さい、』と今度は又大眞面目に言ふので御座います。

『宜しい、見てやらうから出せ。』

『出せつて、今此處にはありません、一寸私の家へ来て貰ひたいので御座いますが。』

『お家の寶、何とかの劍といふ品物かな、』と私がいひますと今度又た妙に笑ひ出しまして、

『先づそんな物で御座います、何しろ寶にや相違ないのだから、ウンさうだ、寶で御座います、』と手を拍ちますので私も不思議で堪りません、私の方からも見たくなりましたから、

『それぢやこれから一緒に行かう、サア行つて見てやらう、』とそれから二人連れ立ちまして、武の家に參りました。

前に申した通り武の家は小さな坂の頂にあるので御座います。叔母の家からは七八丁もありませんか、其坂の下に例の尺八の大先生が住んで居るので御座いますから私も坂の下までは始終參りますが、坂に登つたことは三四度しかありません。この坂を越しますと狭い谷間でありまして、其處に家が十軒とはないので。だから此坂を越すものは村の者でも澤山はないので御座ります。武の家は一軒の母屋と一軒の物置とありますが物置は何時も戸が締切つてあつて其上に崖から大きな樅の木がおつかぶさつて居ますから見るからして陰氣なので御座います。母屋も廣い割合には人氣が無いかと思はれるばかり、シンとして居るのです。家に相對つた崖の下に四角の井戸の淺いのがありまして、いつも清水を湛へて居ました。總體の様子が如何も薄氣味の悪い處で、私は此坂に来て、

武の家の前を通る度に直ぐ水滸傳の麻痺藥を思ひ出し、武松がやられました十字坡などを想ひ出した位です。

それですが、武から妙なことを言はれて大に不思議に思つて居る上に武の家に来てゆかれますので、坂を上りながらも内々薄氣味が悪くなつて來たのです。途々、武に何を見せるのだから聞きましても、武は如何しても言はないばかりか、締めたといふ顔容をして根性の悪い笑ひ方をするので御座いました。

日は全然暮れて、十日頃の月が鱗やかに映して居ましたが、坂の左右は樹が繁つて居ますから十分光りが届かないので御座います。上りは二丁程しかありません、直ぐ武の家の前に出ました。家の前は廣くなつて樹の影がないので月影判然と地に印して居ました。

障子に燈火がぼんやり映つて、家の内はひっそりとして居ます。武は黙つて内庭に入りました。私は足が進みません、外で躊躇つて居ますと、

『お入りなされ！』と暗い處で武が言ひました。

其聲は低いけれども底力があつて、何んだか私を命令するやうでした。

『此處で見やるから持つて來い、』と私は外から言ひました。

『お入りなされと言ふに！』と今度は猶ほ強く言ひましたので私も仕方がないから、のっそり内庭に

入りました。私の入つたのを見て、武は上にあがり茶の間の次ぎに入りました。暫く出て參りません、其様子が内の誰かとこそ一話をして居るやうでした。間もなく出て參りまして、今度は優しく、『お上りなされませ、汚ないけども、』といひますから少しは安心して上りました。そして武の案内で奥の一間に入りますと、此處は案外小綺麗になつて居まして、行燈の火が小さくして部屋の隅に置いてありました。しかし先づ私の目につきましたのは其處に一人の娘が坐つて居ること御座います。私が入ると娘は急に起たうとして又た居住ひを直して顔を横に向けました。私は變てすから坐ることも出来ません。すると武が出し抜けに、

『見て貰ひたいと言うたのは是で御座います、』といふや女は突伏して了ひました。私は何と言つて可いか、文句が出ません、呆氣に取られて武の顔を見ると、武も少し顔を赤らめて言ひ悪くさうにして居ましたが、

『まア此處へ坐つて下さりませ、私は一寸出て來ますから、』と言ひ捨て、行かうとしますから、

『何だ、何だ、私は嫌だ、一人残るのは、』と思はず言ひますと、

『それでは坐つて下さらんのか、』と言つて可憐い顔をして私を睨みました。私が歸るといへば直ぐにでも蹶飛しさうな劍幕ですから私も仕方なしに其處に坐つて黙つて居ますと、娘は泣いて居るのです。嗚咽びかへつて居るのです、それを見た武の顔は眞實に例へやうがありません、額に青筋を

立て、齒を喰ひしぼるかと思ふと、泣き出しさうな顔をして眼をまじくさせます。何か言ひ出しさうにしては口の邊を手の甲で摩るので御座います。

『一體如何したのだ、』と私も事の様子に餘り妙なので問ひかけました。しますると武が吃りながらかういふので御座います。妹が是非貴様に遇はしてくれと言つて聞かない、色々言ひ聞かしたがる何しても承知しない、それだから貴様を欺して連れて來たのだ、何卒不憫な女だと思つて可愛がつてやつて呉れ、私から手を突いて頼むから、と先づかういふ次第なのです。馬鹿々々しい話だと思ひも御座いませうが、全くさうでしたので、先づ私が村の色男になつたので御座います。

其頃私は女難の戒を全て忘れたのではありませんが、何を申すにも山里のことですから、若い者が二三人集れば直ぐ娘の評判で御座います。小學校の同僚も何ぞと言へば何處の娘は別嬪だとか、彼娘には最早色があるとか、そんな噂をするのは平氣で、全くそれが一つの楽しみなのです。私も何時か其風に染みまして村の娘とからかつて見たい氣も時々起したので御座います。さすが母の戒がありますから、浮とは手も出ませんでした、決して心から其實、女を恐れて居たのではなく、若し好い機會があつたら必然色の一つ位出來る筈になつて居たので御座います。

ところで武の妹はお幸と申しまして若い者の中で大評判な可愛い娘で御座いまして年は其頃十七でした。私も始終顔を見知つて居ましたが言葉を交はしたことはなかつたのです。先方では私が叔

母の家の者であり、學校の先生といふことで遇ふ度に禮をして行過ぎるので御座います、田舎の娘に似はない色の白い、眼のはつきりとした女で、身體つき能くおさよに似てすらりとして居ました。城下の娘にもあの位なのは少ないなど、村の者が自慢さうに評判して居たのですが全くさうだと私も遇ふ度に思つて居たので御座います。でありながら、私も眼の前にお幸を突きつけられて、其兄から代つて口説かれましては女難なぞを思ふことが出來なかつたのです。それに氣の弱い私ですから、よしんば危いことゝ氣がつかましたところで、とても彼の場合、武とお幸を振り切つて逃げて歸るといふやうな思切つた所作は私には出來ないので御座いました。

その後は私も二晩置きか三晩置きには必ずお幸の許に通ひましたが、極く内證にして居ましたから、誰も氣がつかせませんでした。それに兄の武之允が何かにつけて被保つて呉れますし、又た武の女房も初めかと能く事情を知つて居て、やはり武と同じやうにお幸と私の仲を巧くゆくやうにのみ骨を折つてくれましたので私も武の家では公然で遊んだもので御座います。

二人の仲は武の夫婦から時々冷かされるほど好う御座いました。かれこれする内二月三月も経ち、忘れもしません六月七日の晩のことです、夜の八時頃、私は平時のやうにお幸の許に参りますと、此晩は宵から天氣模様が怪しかったのが十時頃には降りだして参りました。大降りにならぬ内、歸らうと言ひ出しますと、お幸と武の女房が止めて歸しません、武は不在で御座いましたが、今に歸

るだらうから歸つたら橋まで送らすからと申しますので暫時ぐづぐづして居ますと、武が歸つて参りました。何處で飲んだか大ぶ酔つて居ましたが、私が奥の部屋に臥轉んで居ると、其處へづかづか入つて來まして、どつかり大蹲坐をかきました。お幸は私の傍に坐つて居たので御座います。

『外方は大變な降りて御座りませぬ、今夜はお泊りなされませ、』と武は妙に言ひだしました、と申すのは私がこれまで泊らうとしても武は、若し泊つて事が知れたら不味いからと何時も私を宥めて歸しましたので、私も決して泊つたことはなかつたのです。

『イヤ矢張り泊らん方が可からう、』と私の言ひますのを、打消すやうにして武は、

『實は今夜少しばかり話がありますから、それで泊りなされといふのだから、お泊りなされというたらお泊りなされ、』と語氣がやゝ暴らなつて参りました。舌も少し廻り兼ねる體で御座いました。

『話があるツて何だらう、今直ぐ聞いても可いぢやアないか。』

『貴様氣が附いて居ますか、』と出抜けに聞かれました。

『何をサ?』私は判じ兼ねたので御座います。

『だから貴様は不可ません、お幸はこれになりましたぜ。』と腹に手を當て、見せましたので私は喫驚して了つたので御座います。お幸は起つて茶の間に逃げました。

『眞實かえ、それは、』と思はず聲を小さくしました。

『眞實かつて、貴様がそれを知らんといふことはない、だけれども知らなかつたらそれまでの話です、最早貴様も知つて見れば此後の方法をつけんぢやア。』

『如何すれば可えだらう?』と私は氣が顛倒して居ますから言ふことが戦々として居ます、さうしますと武は可恐れ眼をして、

『今になつてそれを聞く法がありますか、初から解りきつて居るぢやありませんか、貴様の方でもかうなればかうと覺悟がある筈ぢや。』

言はれて見れば尤もな次第ですが、全く私には何の覺悟もなかつたので、たゞ夢中になつてお幸の許に通つたばかりですから、かやうに武から言はれると文句が出ないので、

私の黙つて居るのを見て、武は忌々しきうに舌打ちしましたが、

『直ぐ公然の女房になされ。』

『女房に?』

『嫌で御座りますか?』

『嫌ぢやないが、今直ぐと言つたところで叔母が承知するかせんか解らんぢやないか。』

『叔母さんが何といはうと貴様が其氣なら何でも、貴様さへウンと言へば私が明日にでも表向の夫婦に見せます。何にも此處ばかりが世界ぢやないから、叔母さんや村の者がぐづぐづ言や

ア二人で何處へでも出てゆけば可い、人間一匹何をしても飯は喰へますぞ！」とまで云はれて私も急に力が着きましたから、

『よろしい、それでは兎も角も一應叔母と相談して、叔母が承知すれば可し、故障を言へばお前のいふ通り、お幸と二人で大阪へでも東京へでも飛び出すばかりだが、お幸はそれを承知だらうか。』
『へん！そんな事を私に聞くがものは有りませんぢやないか、貴様の行くところなら例ひ火の中、水の底と來まサア！』と指の尖で私の頬を突いて先の劍幕にも似ず上機嫌なんです。

その晩はそれで歸りましたが、サア此話が如何しても叔母に言ひ出されないので御座います。それと申すのは叔母も私の母より女難の一件を聞いて居ますし、母の死ぬる前にも叔母に女難のことは繰返して頼んで置いたのですから、私の口からお幸のことも言ひ出さうものなら如何なに驚きもし、心配もするか解らないので御座います。次の朝から三日の間、私は今言はうか、最早切り出さうかと叔母の部屋を出たり入ったりしましたが、到頭言ふことが出来なかつたので御座います。叔母に言ふことが出来ないとすれば、お幸と二人で土地を逃げる他に仕方がないと一度は逃亡の仕度をして武の家に出かけましたが、それもイザとなつて踏み出すことが出来ませんでした。と申すのは、『これが女難だな、』といふ恐しい考が、次第々々に嵩つて來て、今までお幸の許に通つたことを思ふと『失策つた、』といふ念が湧き上るので御座います。それですから若し、お幸を連れて逃

けでもすれば、行先如何な苦勞をするかも知れず、それこそ女難のどん底に落ちて了うと、一念かうなりましたは脱落も出来なくなつたので御座います。

それで四苦八苦、考へに考へぬいた末が、一人で土地を逃げるといふ了見になりました、忘れも致しません、六月十五日の夜、七日の晩から七日目の晩で御座います、お幸に一目逢ひたいといふ未練は山々でしたが、此處が大事の場合だと、母の法名を念佛のやうに唱へまして、暗に乗じて山里を逃亡いたしました、其晩あたりは何も知らないお幸が私の來るのを待ち焦れて居たのに違ひありません。女に欺されてはならぬとばかり教へられた私が何時か罪もない女を欺すこととなり、女難を免れる積りで女を捨てた時は最早女難にかゝつて居たので、其時の私にはそれが解らなかつたので御座います。

叔母の家から持出した金は僅か十圓で御座いますから東京へ着きますと間もなく尺八を吹いて人の門に立たなければならぬ次第となりましたのです。それから二十八の年まで足かけ十年の事は申上げますまい。國とは音信不通、東京には勿論、親族もなければ古い朋友もないので、種々様様の事やつて参りましたが、何時も女のごとで大事の場合を失策つて了ひました。二十八になるまでには公然の妻も一度は持ちましたが半年も續かず、女の方から逃げて了ひました。しかし其妻も私が本郷に下宿して居る中に其處の娘と出来やつたので御座います。

二十八の時の女難は私の生涯の終りで、女難と一緒に目を亡くして了つたので御座いますから、それをお話いたして長物語を切り上げることになります。」

六

『二十八の夏で御座いました、そのころはやゝ運が向いて参りまして、鐵道局の雇となり月給十八圓貰つて居ましたが女には懲りて居ますから女房も持たず、婆さんも雇はず、一人で六疊と三疊の長屋を借りまして自炊しながら局に通つて居つたので御座います。』

住居は愛宕下町の狭い路次で、兩側に長屋が立つて居ます中の其の一軒でした。長屋は兩側とも六軒づゝ仕切つてありましたが、私の住んで居たのは一番奥で、直前には大工の夫婦者が住んで居たので御座います。

長屋の者は大通りに住む方とは違ひまして、御承知でも御座いませうが、互に親しむのが早いもので、私が十二軒の奥に移りますと間もなく、十二軒の人は皆な私に挨拶するやうになりました。その中でも前に住む大工は年頃が私と同じで少し、朝出かける時と、晩歸る時とが大概同じで御座いますから始終顔を合せますので何時か懇意になり、終には大工の方から度々遊びに来るやうになりました。

大工は名を藤吉と申しましたが、やはり江戸の職人といふ氣風が何處までも附いて廻り、様子がいなせで辯舌が爽かて至極面白い男で御座いました。たゞ容貌は餘り立派では御座いませぬ、鼻の丸い額の狭いなどは殊に目につきました。笑ふ時は何處かに人のよい、悪く言へば少し抜けて居るやうな處が見えて、それが亦た此人の愛嬌で御座います。

私のところへ夜遊びに来ると、必然酒の香をぶん／＼させて、いきなり尻をまくつて跣坐をかきます。そして酒を呑まぬのを冷かしたもので御座います。

そして又た、頻りと女房を持てとすゝめました。其序に如何かいたしますと、『君などは女で苦勞したこともない唐偏木だから女の難有味を知らないのだ、』とやるのです。御本人は如何かと申しますと、餘り苦勞をしたらしくもないので、其女房も、親方が世話をして持してくれたとかいふので御座います。

けれども私は東京に出てから十年の間、種々な苦勞をしたに似ず、矢張り持つて生れた性質と見えまして、烈しい事も出來ず、烈しい言葉すら餘り使はず、見たところ女などには近よることも出來ない野暮天に見えますので、大工の藤吉が唐偏木で女の味も知らぬといふのは決して無理ではなかつたのです。實際私は意氣で女難にかゝつたといふよりか皆んな、溫柔くつて野暮だから却つて女難にかゝつたので御座います。

或夜のことに藤吉が参りまして、洗濯物があるなら鼻に洗はせるから出せと申しますから、遠慮なく單衣ひとへと襦袢を出しました。さう致しますと其翌日の夕方に大工の女房が自分で洗濯物を持って参りまして、これだからお神さんを早くお持ちなさい、女房の難有味は之でも解らうと私の膝の上に持つて来たのを投げ出して歸りました。この女はお俊と申しまして、年は二十四五で御座います。長屋中でお俊は何時か噂にのぼり、又お俊の前でもお神さんは如何見ても意氣だなぞと、賞そやす山の神がある位ですから私の目にも是は唯の女ではない位のことは感づいて居たので御座います。藤吉は每晚のやうに来るやうになりました。それは一ツは私から尺八を習はうといふ熱心であつたのでういますが、笛とか尺八とかいふものは性質と見えまして藤吉は器用な男でありながら如何しても進歩いたしません。それでも屈せずブウ／＼吹いて居たので御座います。

お俊も遊びに来るやうになりました。初は二人で押しかけて参りましたが後には日曜日など、藤吉の居ない時は晝間でも一人で遊びに来て、一人で饒舌しゃべつて歸つてゆく様になつたので御座います。私も後には藤吉の家に出掛けて夜の十二時まで下らん話をして遊ぶやうになりました。お俊は頻りに私の世話を焼いて、飯まで炊いて呉れることもあり、菜が出来ると持つて来て呉れる、私の役所から歸らぬ中にちやんと晩の仕度をして呉れることもあり、それですから藤吉が或時冷かしまして、『お前は此頃亭主が二人出来たから忙がしいなア、』と言つたことがあります。けれども藤吉は決し

て私を疑ぐるやうなことはなく、初はたゞ隣り交際つきあひでしたのが後には、何でも身の上のことを打明けて私に相談するやうになりました。それですから私は其積りつみりで交際つきあひで、随分彼奴の力にもなつてやり、時には金の用までたしてやりましたので彼奴は猶ほ私を又ない友と信じ、二目ばかり私が風邪をひいた時など一日は仕事を休んで私の傍そばに附いて居たことさへ御座ります。

それに長屋中、皆な私を可愛がつて呉れまして、溫柔おだやい方だ良い方だ、珍しい堅人かじんだと褒めて呉れるので御座います。ですからお俊ばかりでなくお神さん達が頼みもせぬ用を達して呉れるので御座います。ところが可笑いのはお俊がこれを焼いて、何を私が附いて居るに餘計なお世話だと、お神さん達の目の前で嫌な顔をする、それをお神さん達は猶ほ面白半分面白半分に私の世話を焼いたこともありません。けれども、それで以てお俊と私の仲を長屋の者が疑ぐるかといふに決してさうでなく、てんで私をば木か金で作つたものゝやうに無類の堅人かじんだと信じて居たので御座います。けれどもお俊の方はそれほどの信用はないのです。ですからお俊さんは少し怪しいが、とても物にはならぬなど、明らかに私に向つて言つた山の神さへ居たので御座います。

實際、お俊は怪しいと言はれても仕方がありません。或晩のことに私が床を延べて居ますと、お俊が飛んで参りまして、

『どうせ私やお氣に入りませんよ、』と言ひさま布團ひらたきを引奪つて自分でどん／＼敷き『サア、旦那

様お休みなさい、オ―世話の焼ける亭主だ、』と言ひながら色氣のある眼元で熟と私を見上げましたことなどは、たゞの仕草ではなかつたので御座います。そして其時の私の心持を言ひますと、決して長屋の者が信じて居たほどの堅固なものでなかつたので、木や石でない限り、矢張り妙な心持がしたので御座います。

私が或時藤吉に向ひ、『如何もお俊さんは意氣だ、まるで素人ぢやアないやうだ、』と申しますと、藤吉にやゝ笑つて居ましたが、『巧いところを當てられた、實はあれはさる茶屋で可なり名を賣つた女中であつたのを親方が見つけ出し、本人の心持を聞いて見ると堅氣の職人のところにゆきたいといふので、それこそ幸と私に世話して呉れたのだ、』と少々得意の氣味でお俊の身元を打明けたので御座います。その時から獨更ら私はお俊の態度を妙に感じて來ました。

けれども先づ平穩無事に目が經ちます中、恰度八月の中頃の馬鹿に熱い日の晩で御座います、長屋の者はみんな外に出て涼んで居ましたが私だけは前の晩寝冷をしたので身體の具合が悪く、宵から戸を閉めて床に就きました。なんでも十時ごろまで外はがやゝ話聲が聞えて居ましたが其内だんだん静になりお俊もおとなしく内に引込んだらしかつたのです。私は眠られないのと熱つ苦しいとて、床を出まして暫く長火鉢の傍でマツチで煙草を喫つて居ましたが、外へ出て見る氣になり寝衣のまゝフイと路次に飛び出しました。路次には最早誰も居ないので、路次から通りに出ますと、

月が傾いて恰度愛宕山の上にあるので御座います。外はさすがに少しは風があるので其處からぶらぶら歩いて居ますと、向うから一人の男が、何かぶつゝ口小言を云ひながらやつて参ります、其様子が酔ばらひらしいので私は道を避けて居ますとよろゝと私の前に來て顔を上げたのを見れば藤吉で御座いました。

藥吉は私を見るやいきなり、

『イヤ大將、うめえところで遇つた、今これからお前さんとこへ、押かけるとこなんだ。サア家へ歸れ、今夜こそ己は勘辨ならんだ、如何してもお前さんに聞いて貰うことがあるんだ、』と私の手を取つてグイゝ路次の方へ引張つて参るので御座います。

私も酔ばらひと思ひまして『よしゝ、サア歸らう、何でも聞かう、』と一緒に連立つて家に入りました。

藤吉の顔を見ると悽い程蒼ざめて眼が据つて居るので御座います。坐るが早いか、『サア聞いて呉れ、私は最早如何しても勘辨ならんだ、』と、それから巻舌で長々と述べ立てましたところを聞きますと、つまりかうなんです、藤吉が其日仲間の者四五人と一緒に或所で一杯やりますと、仲間の一人が何かの機會から藤吉と口論を初めました。互に悪口雜言を仕合つて居ます内に、相手の男が、親方のお古を頂戴して難有がつて居るやうな意氣地なしは黙つて引つ込めと怒鳴つたものと見えま

す。それが藤吉にグツと癢に觸りましたといふものは、これ迄に朋輩からお俊は親方が手をつけて持餘したのを藤吉に押しつけたのだといふ當磨を二三度聞かされましたさうで、それを藤吉が人知れず苦にして居た矢先、又もや斯ういうて罵られたものですから言ふに言はれぬ不平が一度に破裂したので御座います、餘計なお世話だ、親方のお古なら如何した、手前はお古を貰うことも出来まいと、我鳴りつけたものと見えます。さうすると相手はあざ笑つて、お古ならまだ可いが、新しいのだ、今でも月に二三度はお手が附くのだと悪たれたので御座います。藤吉はこれを聞きますが早いか、『よし、見て居ろ、』と直ぐ其處を飛び出して家に歸るとお俊をたゞき出して了う了見でぶらぶらと歸る途中、私に逢つたので御座いました。

それでこれから直ぐにお俊を追出す積りだがお前さんも同意だらうと申しますから私はお俊が元親方と怪しい關係のあつた女であるか、ないか、そんなことは解らないけれど、今ではお前を大切にして立派なお神さんになつて居るのだから追出すほどのことはあるまい、見たところでも親方と怪しいといふ様子もないやうだ、それは私が請合ふと申しますと、藤吉『今でも怪しいなら打殺してやるのだ、以前の關係が有ると聞いたゞけて私は承知が出来ねえのだ、お俊を追出して親方の横面を張擲つて呉れるのだ、何ぞといへば女房まで世話をしやつたといふ、大きな面をして無暗と規方風を吹かすからして最早氣に喰はねえて居たのだ、お古を押付けて置いて世話も何もあるもの

か、ふざけるな！』私が幾何なだめても聽かないでとうとう宅に歸つて參つたので御座います。

私も打捨つても置かれなないと、藤吉の後について行かうとしますと、關はないで置いて呉れると、私を内に入れません、仕方なしに外に立つて内の様子を聽いて居ました。お俊は最早床に就いて居た様子でしたが、藤吉は引ずり起して怒鳴りつけて居るので御座います、お俊は何も言はないで聞いて居たやうですが、暫時しますとブイと外へ出て參りました。私を見て、

『下らないこと言つてらア、酔ばらひに取合つても仕方がないから打捨つて置ませう、』と言ひながらズン／＼私の宅に入るの御座います。私もお俊の後について私宅へ歸りました。

『誰が下らないことを焼附けたのだらうねえ、眞實に仕様がなねえ、』とお俊はかう言つて、長火鉢の横に坐つて、其處に置いてあつた煙草を吸うて居るのです。

『明日の朝になれば何でもないサ、』と私も爲事なしに宥めて居ましたが、お俊が歸りさうにもないので、

『静かになつたやうだから見て來たら可からう、』と言ひますと、お俊は黙つて起つて出てゆきましたから、私は直ぐ蚊帳の内に入つて了つたので御座います。ところが間もなくお俊は戻つて參りまして、

『能く寝て居るから外面から戸締りをして來ました、』と澄して居るのです。

『そしてお前さん如何するのだ、』と私は蚊帳の内から問ひました。

『私はかうして朝まで寝ないで居てやるのサ、』

『そんなことが出来るものか、歸つて寝たが可からう、』と申しますとお俊は焦慮つたさうに「打捨つて置いて下さいよ、酔ばらひだから夜中に又た如何なことをするか解るもんぢやアない、私や可恐いワ、』と平気で煙草を吸つて居るのです。私も言ひやうがないから黙つて居ますと、お俊も平時のお饒舌に似ず黙つて居るので御座います、蚊帳の中から透して見ると、薄暗い洋燈の光が房々とした髪から横顔にかけてぼーツとして居ます、夫に蒸暑いのでダラリとした様子が何時にない生めかしい様に私は思つたので御座います。

其内、かれこれ二十分も経ちましたらうか。お俊は折り／＼團扇で蚊を追つて居ましたが『オ、ひどい蚊だ、』と急に起ち上がりまして、蚊帳の傍に来て、『貴様最早寝たの？』と聞きました。

『最早寝かけて居るところだ、』と私は何故か寝ぼけ聲を使ひました。

『一寸と入らして頂戴な、蚊で堪らないから、』と言ひさま、やつと一人寝の蚊帳の中に入つて來たので御座います。

朝早くお俊は歸つてゆきましたが、如何いふ風に藤吉の機嫌を取つたものか、それとも酔が醒めて藤吉が逆戻りしましたのか、温順しく仕事に出て參りました。出際に上り口から頭を出して『お

早う、』と言ひさま、妙に笑つて頭を搔いて見せまして『いづれお謝罪は歸つてから、』と、言ひ捨てて出て參りました。其後姿を見送つて、『ア、悪いことをした、』と私はギツクリ胸に來ましたけれど最早追附きません。それからといふものは、お俊の亭主は眞實に二人になつたので御座います。

それから一月も経たぬ内に藤吉は又た親方に何か言はれて、ブン／＼怒つて歸つて參りましたが、今度は少しも酔つて居ないのです。お俊と別れて自分は暫く横濱へ稼ぎに行くと言つた様子は甚く覺悟をしたらしいので、私も濱へゆくことは強ひて止めません、お俊と別れるには及ぶまい、暫く私が預かるから半年も稼いだら歸つて來て又一緒になるが可からうと申しますと、藤吉は涙を流して喜びまして、萬事宜しく頼むと家を疊んでお俊を私の宅に同居させ、横濱へ出かけて了ひました。

最早かうなれば澄したもので、お俊と私は全然夫婦氣取で暮して居たので御座います。

さうすると一月程たちまして私は眼病にかゝつたので御座います。たいしたことあるまいと初は醫者にもかゝらず、役所には力めて通つて居ましたが、段々に悪くなりましたして終ひには役所を休むやうになりました。醫者に見せますと容易ならぬ眼病だと言はれて、それから急に出来る丈の療治にかゝりましたが治る様子も見えないので御座います。

お俊はなか／＼氣を注げて看護してくれました。藤吉からは何の消息もありません、私は藤吉のことを思ひますと、あゝ悪いことを爲たと、つく／＼我身の罪を思ふので御座いますが、さればと

てお俊を諭して藤吉の後を逐はすことを致す程の決心は出ませんので、たゞ悪い〜と思ひながらお俊の情を受けて居りました。

その内だん〜眼が悪くなる一方で役所は一月以上も休んで居るし、私は氣が氣でならず、若し盲目になつたらといふ一念が起るたびに、悶え苦しみました。

こゝに怪しいことの御座いますのは、お俊の様子が甚く變つたことで御座います、何となく私を看護する舉動が前のやうでなく、つまらぬことに疝癢を起して私に難く當るので御座います。そして折り〜は半日も何處にか出行いて歸らぬこともあるのです。私は口に出してこそ申しませんが、腹の中は面白くなって堪りません。ところが或日のことで御座いました、『御免なさい、』と太い聲で尋ねて來た者があります。

『居らつしやい、』とお俊は起つてゆきましたが、暫く何か其男とこそ〜話をして居ましたが、やがて私の枕元に参りまして、『頭領が見えました、何か貴郎にお話したいことがあるさうです。』

何の頭領だらうと思つて居ます中に、其男はづか〜私の枕元に参りまして、

『お初にお目にかゝります、私ことは大工助次郎と申しますもので、藤吉初めお俊がこれまで色々お世話様になりましたにつきましては、お禮の申上げやうも御座いません、別してお俊が厚いお情を被りました儀につきましては藤吉に代りまして私より十分の御禮を申上げます。就きましては、

お俊儀は今日只今より私が世話することになりましたに就きましては早速お宅を立退くことに致します、左様悪からず御承知を願ひ置きます。』と切口上でベラ〜と饒舌立てました、私は文句が出ないので御座います。

それからお俊と頭領がどたばた荷ごしらへをするやうでしたが、間もなくお俊が私の傍に参りまして、『色々事情があるのだから、悪く思つちやアいけませんよ、左様なら、お大事に。』

二人は出て行きました。私は泣くことも叫喚することも出来ません、これは皆な罰だと思ひますと、母の憔悴た姿や、孕んだまゝ置去りにして來たお幸の姿などが眼前に現れるので御座います。

役所は免められ、眼はとう〜片方が見えなくなり片方は少し見えても物の役には立たず、其内少しの貯蓄は無くなつて了ひました。それから今の姿に零落たので御座いますが、今ではこれを悲しいと思ひません、たゞ自分で吹く尺八の音につれて戀ひしい母のことを思ひ出しますと、いつそ死んで了つたらと思ふことも御座いますが死ぬることも出来ないで御座います。』

盲人は去るに臨んで更に一曲を吹いた。自分は殆ど其哀調を聴くに堪へなかつた。戀の曲、裏書
の情、流轉の哀、うたてや其底に永久の恨をこめて居るではないか。

月は西に落ち、盲人は去つた。翌日は彼の姿を鎌倉に見ざりし。

第 三 者

一

大井君足下

君も僕も此問題の第三者である。

第三者といふ奴は冷静なる判断を下し得る者である。そして結婚とか離婚とかいふ感情の問題には第三者ほど大切なものはないのだ。と先づ君も僕もあきらめて取りかゝるより致方があるまい。

そこで先づ役割は僕がお鶴の代表者、君が君が江間君の代表者、代表者といふ言葉は穩當でないが、今の場合、僕がお鶴の義兄であり、君が江間君の朋友であつて見れば先づそんなものと見て可からう。由來叔父さんとか義兄さんといふ奴は妙な役廻にはめられる者だ。

單刀直入申上げるが、お鶴は脈があがつたよ。だめだよ。此女の血管には最早愛とか戀とかいふ熱のある汁氣はちつとも流れて居ないぞ。平氣の平三で居るぞ。君は第一に此事實を江間君に傳へ玉へ。

女といふしろものは例の「機會」と同じことで前額に髪のあるばかり、後頭には無い。一度あちら

を向くともうだめだ。捕へやうとすれば益逃げてゆく。江間君にさう言ひ玉へ、斷然離婚しろと。

二

武島君足下

前額の御講釋、委細承知した、けれども江間はなか／＼思ひきりさうにもないよ。自分では未だ前額の髪を握つて居る氣で居るから困る、これを放してなるものかと、蒼くなつて力んで居る。

其處で實は君の言葉通り お鶴さんは平氣で居ることを話した處が、可哀さうに、『それは僕も無論信じて居る、彼女の愛はとうにさめて居た、』と口では言つたが心では未だなか／＼さう思つて居ないらしい。『しかし君、妻は僕を愛しはいても僕は妻を愛するから離婚は出来ない、』と言つて其聲は泣きだしさうであつた。

君、其處は君の力だ、何とかお鶴さんを説いて見ないか、兎も角も今一度歸さして呉れ給へ、さうすれば又江間御自身の力で脈を取りかへす工夫もあるだらう。然し、僕は離婚の方が賛成であることを一言して置く。

三

大井君足下

今一度繰り返へすがお鶴の脈はあがつたよ。昨日もこんなことを言つて居た、『今度結婚するなら極く優しい人が可い、わたしのやうな我儘者は勘辨の強い人でないと到底添ひとげられないから。』つまり江間君は飽きられたのだ。二度目の結婚のことを口に出すやうでは、再び江間君の許に歸れと言つて見た處で無益の話。

それでも昨日の夕方、縁側に立つて何か頻りと考へて居るやうであつた、見ると泣いて居たツケ。思ひだして悲しくなつたのだらう。然し思ひだした愛は、蒲燒の味を思ひだして口に唾液をわかす程のことで、今度喰ふ鰻は先の鰻ではない。

僕も離婚説であること一言して置く。

四

武鳥君足下

鰻の比喩は恐れ入つた。そして見るとお鶴さんは江間を喰ひ飽きたのだ。喰ひ飽かれた者こそ可い面の皮だ。不幸にして江間は未だお鶴さんを喰ひ足りないと思える。折角のことだから骨までしゃぶらしてしまへばよいに、江間は瘦せたよ。

今朝僕が様子を見にゆくと先生未だ寢て居た、『オイどうしたのだ最早九時過ぎだぞ、』と言ふと、『何時でもかまはん、』と顔を衾の中に隠してしまつた。枕許にはラブ時代にお鶴さんからよこした手紙が二三通置いてある。『君泣いてるな、』と僕は思はず怒鳴つてやつた。さうすると『馬鹿を言へ、』と顔を出したのを見ると成程泣いては居ない、涙の痕はないが、眞着な顔をして、頬もたしかにこけて居た。『女房といふものは其様に有難いものか知らん、』と僕は言ふと、

『君は僕を侮辱するな!』

『ウン侮辱するよ!』

『失敬ぢやアないか、失敬だ!』

『失敬でも何でもかまはん、僕は君を侮辱する、大井徳五郎は君を侮辱する、侮辱せざるを得ずだ。』

『何だ得ずだ、得ずの理由を言ひ給へ、笑ひごとぢやアないぞ、』と先生半分起き上つた、武鳥君足下、君も可笑いだらう、僕も實は笑はざるを得なかつたのだ、然し江間の見脈がすさまじいので、強て眞面目な顔をして『まア寢て居たまへ、起きない方がよからう、君は病人だから、』と言ふと、先生寢てしまつたが天井を見つめて居る。

『江間君、君さうおこらないで僕の言ふこと聞け、僕は君の親友だぞ、一朝一夕の交ではないぞ、然も敢て僕は君を侮辱するのだ、侮辱せざるを得ないのだ……』

『いくらでも侮辱し給へ。』

『まあ黙つて聞き給へ、兩方に愛があつてこそ夫婦だらう、こんなことは君の方が百も承知の筈だ、君は何時も僕を野蠻人だの豪傑だのとけなしで居た位だから、僕が君に愛の講釋をするのは少し勝手が違ふやうだが、一方ばかりの愛では眞實の夫婦ではない位のことは知つて居るぞ。然るにお鶴さんは如何だ、君を捨て、逃げたぢやアないか、果してお鶴さんに愛が居ると言はれうか、愛がないなら君の妻ぢやアない、赤の他人だ、其赤の他人をどうあつても妻といふ名目にして置きたいなんて、君の持論のやうでもないぢやアないか、今更何をくよくよ思ふのだらう。男を出し給へ男を、……僕は君のその蒼い面を見ると初めは可哀さうだと思ふけれど終には侮辱したくなるのだ。』

『だから君は野蠻人だ、男たア何のことだ、君等のいふのは瘦我慢のことだ。僕は愛のために瘦我慢を張るまでに墮落しないぞ。』

『成程君はエライ、立派なハイカラだ、然しいくら君がお鶴さんを愛しても、お鶴さんが少しも君を愛しないならどうする。』

『しかたがない。』

『大ありだ！』

『さうさ、僕の愛を以て彼の愛を呼び醒すのだ。』

『馬鹿を言へ！離婚するのだ。』

『それは出来ない、僕はお鶴を何處までも愛して居るから。』

『これは可笑しい、君がそれほどまでに愛して居る女が何故逃げたらう。』

『だから僕は苦しんで居るのだ。』

『苦しいかも知れないが理窟はかうだ、それほどまでに君の愛は燃えて居るのに而も女は逃げた、然らば逃げた女を歸して見た處で君の愛は女の愛を呼び醒す力がない、理窟はかうだよ、冷靜に判断し給へ。』

『違つて居る、今までは僕の愛が十分お鶴に知れなかつたのだ。僕は十分愛したけれど彼は其を知つて呉れなかつたのだ。それを思ふと僕は如何にも残念でたまらない、何故だらう？ 何故僕の愛が解らないのだらう？』

『知らんねえ、僕はたゞさういふ女なら離婚してしまふだけだ。』

武島君足下、先づ問答は右の次第で、僕も少々もてあぐんでしまつた。とても急には思ひきりさうにも見えない、可哀さうに先生何處までお鶴さんにほれたのだらう、お鶴さんは君の義妹だが何處に其程の好い處があるだらう。女ほど不思議な動物は無い。

兎も角、今しばらく見物して見ようぢやないか。第三者の尊嚴を維持しようぢやないか。

大井君足下

君の手紙は面白く讀んだ、君はなか／＼の文學者である。會社をやめて文人の仲間に加はつた方が可からう。謹んで君に大井蠻骨の雅號を奉る。

お蔭様で江間君の近狀が解つた。僕は心に心が動いた。君の言ふ通りお鶴にそれほどまでの好い處があるとは僕にも受取れない、こゝらが所謂のほれた慾目といふ奴かも知れない。江間君の目から見るとたまらん處があるのだらう。兎も角、僕は君の手紙をお鶴に見せた。泣いたよ。

『どうだね、歸る氣になつたかね、』と僕は問はざるを得なかつた。

『さうねえ。』

『それほどまでに思つて居る夫を捨てるなんて罪だぜ、よく考へて御覽。』

『しかしねえ兄さん歸つて見た處でつまらないんですもの。』

『しかしお前は江間さんを憎いとは思はないだらう。』

『さうねえ、憎くは無いわ。だつて今までのやうぢやア全くつまらないんですもの。』

『今度歸れば今までのやうに江間さんも亂暴なことはしないだらうよ、其んなに苦しんでる程だか

ら。』

『兄さんはさう思つて？』

『さうサ、人の性質といふものは一朝一夕に變るもんでなし、先づ持つて生れた氣質は生涯變らないと言つても可い位だから、江間君も今度の一件で全く今までの風を變へてしまふことは出来まい、しかし幾干かは變るだらうよ。』

『とてもだめ、兄さん。わたしは最早つく／＼思つたわ、とても此人の性分は變らない。と、若し變るものなら今までの中に少しは變りさうなものですわ。二人のごたく／＼は今度初まつたのぢやアなし、先月の初にも兄さんの御厄介になつたぢやアありませんか。彼の時兄さんが、不幸なる愛だつて被仰つたが全くさうよ、江間さんも私も不幸なのね。』

お鶴は涙をぼろ／＼落した。大井君足下、お鶴は江間君の愛を全然否定しては居ないのだ、のみならず彼は江間君の不幸に少なからず同情を持つて居るらしい。併し彼自身は最早江間君を愛しては居ないのである。つまり彼の逃げだしたのは江間君の愛が其性質のために常に暴ら／＼しく彼の頭上に注がれ、そして彼は其愛を受け入れるには餘りに弱かつたのである。

一月前ごとくが持上つて僕をわざ／＼呼び寄せた時も、僕はしみ／＼江間君の愛の決して淺くないことを見ると同時に、江間君の性格の如何にもお鶴の性格と一致しないことを感じた。そこで

僕は江間君に向つて、君の愛は不幸なる愛だと言つた。今少しく心持を安らかに持つて、いらしくしないで、春風吹き渡る野邊を二人が手に手を取つて散歩するやうな心持で暮らしたら如何だらうと忠告した。

然し性格の衝突は本人ですら如何とも爲難い、況んや他人の忠告位で納まるものでない。僕は一月前既に早晚破裂することを確信して居た。

おまけに彼等二人は最早四五月前から互に相手の人物を研究するに怠らなかつたらしい。江間君はお鶴を、お鶴は江間君を、研究といはんよりも邪推しだした。二人は夫婦として一家にありながら殆ど敵同志のやうに狙ひ合つて居たらしい。敵ならば却つて忘却する時もある、なまじに愛てふ魔力に捕へられて居るだけ、互に互を忘れることが出来ないで、二六時中、二人の問題は其一人て有つたらしい。この如くして夫婦の間が平和に行く道理があらうか。

彼等の不幸は彼等二人の愛の如何ではなく、二人とも愛を現はす寸法を誤つたのである、そして方法を誤らしめたものは彼等の性質である。

であるから君、到底此二人は一緒になつた處で決して幸福ではない。お鶴は今にして初めて之感じて來た。だからとても再び江間君に歸らう筈がない。江間君はお鶴の愛よりも更に深い愛を持つて居るだけ、却つてお鶴ほど冷やかに此結果を見ることが出来ないのである。

見物大賛成、しばらく君も見て居たまへ、江間君も其うちには冷えるから。冷えればお鶴と同じ心持になつて來るから。

六

武島君足下

我々は見物して居る積りで居たが當局者は成程第三者よりも熱心である。江間から次のやうな手紙とも隨筆とも知れぬものを送つて來たから参考の爲め御覽に入れることにした。

鶴子今は余を愛せずなりたり然し曾ては余を愛したるなり。余は曾て鶴子を愛し而て今日も愛す、實に愛す彼女は余を捨てゝ走りぬ、されど其事の爲に余の愛は加ふるとも減せず、激揚するとも銷沈せず。

余自身と雖も、余の愛着の念のかくまでに深かりしを知らざりし。彼女の余を見捨てたる今日、寒風一陣、心頭に吹き入りて、めぐり轉じて我を惱ます、此苦惱の堪へ難きことよ。

嗚呼戀てふものゝ苦しきかな。冷めし戀の夢を逐ふ苦、何にか譬へん。

余は永久に鶴子を愛す、我が心は暫時も鶴子を忘るゝ能はざる也。鶴子は最早戀の墓か、然らば余は其中に埋れん。

諸君にして若し余に鶴子を思ひきれと言ふならば、これ余に死せよといふことを勸むる也。而て余の今の苦惱は死の更に平易なるほどまでに深きを知らざる也、思ひもそめぬなり。

云々と未だ色々のことが書いてあつた、然り我々は第三者である、なんて江間君の苦惱のそれほどまでに深いといふことを知らうぞ、否、知つては居る、しかし知るといふことゝ感ずるといふことは全く別だ、醫者は病人の苦痛を知つて居る、しかし感じはしない、たゞ薬を投じて其熱のさめゆくを待つばかりである。武島君足下、我々の病人はまだ容易に熱がさめさうにもない。

彼の母及び姉妹は此病人を見てひとかたならぬ心痛をして居る、然し母も姉妹もお鶴さんには何等の尊敬を拂つて居ない、寧ろ少なからぬ悪感を持つて居るといふものは、要するにお鶴さんの人格問題に歸着するので、もつちの幸だから離婚しろといふのが我が病人の周囲の輿論らしい。第三者の中でもこのやうな第三者は少し熱のある奴で由來當局者の苦痛の手傳をするばかりのもの、甚だ始末の困るしるものだ。

七

大井君起下

江間君の書はなるほど戀の苦惱を自白して申分なき出来である、僕もこれを讀んで至極同情に堪

へなかつた、然し由來同情といふ難有さうに聞えるしるものは左程價值はないので、到底本人が感ずる百分一も感ずるものではない、實は人間の組織がさういふ風に出来て居るのだから如何とも致方がない。つまり第三者或は第二者が到底思ひもそめぬ苦惱に沈んだのが御本人の不幸とあきらめる外はない、そのかはり御本人は又到底他の者の感じ得ないおたのしみを感じて、折ふし他の者にも其百分一を同感せしめたから、つまり決算は至極よく合つて居るのである。

幸と僕も人間並に同情位のところで済んだ、これをお鶴に讀ますと、或は同情以上に突走るかも知れないから僕は、第三者の冷靜を以てお鶴には見せなかつた、これは君も賛成だらうと思ふ。

元來お鶴も女の一人であるから、やはり感情の奴隷である、感情の奴隷の常に陥る惡徳は自己を欺いて自ら知らざることである、故に女ほどよく自己を欺くものはない、自己を欺いて居ながら一かどの善い事でもした氣で居るものである、であるからお鶴に江間の書でも見せやうものなら、忽ちエラクなつてしまひ、忽ち節婦になりすまし(則ち自己を欺き)、これほどまでに此身を思つて下さるならば此人の爲に犠牲になつても宜しい位の考をむらゝと起すかも知れない。何と危険な話ではないか。さう急に節婦になれるものならば、彼は一年も添つた男を捨て逃げては來ないのだ。殊にお鶴といふ女は其中にも「むらゝ」派の最も激烈な方なんで、おまけに膽の極めて小さい女であるから少し優しい言葉でもかけられると直ぐに涙、まことにしをらしい娘々した、ラブるのに

は持つて来いといふ女になつて了う、畢竟江間君のラブ魂を全然魔し去つたのは此點であらうと思はれる。その代り殆ど人の想像にも及ばぬくだらぬ事で氣が狂つたかと思ふほどの大騒をやらかす。泣く、眞着になる、眼に毒々しい光を遠慮なく漲らして人の顔をねめつける、恨む、ひつかく、ひつく、そして全く方角の違つた憎々しい邪推を廻はす。かうなると殆ど手もつけられぬ女となる。江間君との衝突は蓋しお鶴に原因するのが多いと、僕は鑑定して居るのだ。

蓋し、お鶴といふ女は妻とすべき女ではない、ラブつて居るに詭向きの女で、自分でもさう思つて居るらしい、昨日も僕と濱を散歩して居ると、

『兄さん、私のやうな者は實際人の妻なんかには成られないんだわ、』とためいきをし乍ら言ふから、『さうかも知れない。』

『さうよ、とても私のやうな我儘者は誰も辛抱できないわ、江間さんだから一年も怵へて居たのかも知れないのよ。』

『そんなら逃げて来ないでも可いぢやないか。』

『だつて私の方で辛抱が出来ないんですもの。』

『それが即ち我儘サ。』

『さうかも知れませんが、しかし最早かうなつては仕方がないから、私は今度お嫁にゆくなら四十

にも五十にもなつた人の處に行きたいわ、子供と思つて我儘をしても可愛がつて呉れるから。』

『古川市兵衛さんはどうだね、僕も外には心當りが無い、それとも平沼専三かね。』

『あんな事を言つて、人が悪いのね、一生獨身で居る方が可いかも知れない。』

『ラブばかりして。』

『まさか、』とお鶴は笑つて少し顔をあからめたが、思ひだしたやうに『しかし兄さん、結婚してしまふと全くつまらないのね、何だか生涯のことがきまつてしまつたやうで望も何にも無くなつてしまひますわ。人間は戀して居るうちが一番幸福ですね。』

先づこんなもので實にたわいのない女さ、江間君も結婚しないで居たら却つて今のやうな日に遇はず、お互に幸福であつたかも知れない。

昨夜九時頃、細君の部屋に行つて見るとお鶴は細君の針仕事の傍で頬杖を支き何か讀んで居た。眞面目な顔をして、ひどく感に堪へん風であつたが、

『兄さんの御存知の方に基督教の牧師は無くつて?』と問ふから、

『いくらも有るが、どうしたの?』

『私はさういふ處へいきたいね。』

『お嫁にかね?』

『いゝえ、唯だ世話になつて居たいわ、田舎なら猶ほ可いけれど。』

『そしてどうすると言ふんだね？』

『兄さん私はね、一生獨身で傳道したいわ、質朴な田舎に住んで居て其村の一人でも神の道に導びいて一人の靈魂でも可いから救ひたいわ。』

これを聞いて僕はふきだし度くなつた、君も恐らく笑はざるを得まい。何と果敢ない空想ではないか、こんなのを稱して「小さな美感」とでもいふのだらう、「田舎の村の傳道」どうしても清新派の小説の題目だ。しかし今の生若い基督者の中にはお鶴と同じやうな男子が随分あるやうだ。

要するに女はこんなものだらうよ。ラブの相手が無くなると急に心細くなつて、悲しくなつて、眞面目になつて、エラク感激して、一人の靈魂でも救ひたくなる位が大出来の方だらう。

八

武島君足下

酷くお鶴さんを攻撃するぢやアないか。然し傳道の一節は僕も思はず噴きだした。ところが此處に噴き出しては居られんことがある。今朝江間が青い顔をして出馬に及び、

『君、僕はどうあつてもお鶴のことを思ひきることが出来ん、僕の書いたものを見たらう、全く僕

は苦しくて堪らん、助けると思つて如何かして呉れ、』といふ言葉すら眞實に苦しうだ。

『だから頻りと運動して居るぢやアないか、』と僕も困つたから言つた。さうすると、

『イヤ君等の盡力は打壊はす方の盡力だ、決して僕等夫婦を前のやうに爲する氣ではないのだ、實に君等は惨忍刻薄なことをする。』

『しかし其が第三者の義務だ、君と同じやうに氣が狂つてしまふなら第三者の効能はないのだ。』

『そんな義務は盡してもらひたくない。』

『難有き仕合に存じ奉ります、實は僕も、こずつて居たのだ。』

『君、それは眞面目でいふのか、』とすごい顔をするから、

『君は本氣かね。』

『死ぬるか生きるかの苦みを爲て居る者が本氣でなからうか。』

『少くとも病氣だね、熱病患者だね。』

『宜しい熱病患者でも宜しい、君等はそれを見殺しにするのだ。』

『熱の冷めるのを待つて居るのだ、君無理をするとぶりかへすよ。』

『戲談言つちや困る、』と患者少しく機嫌を直し『僕の熱は到底冷めない、上つても冷めは爲ないが君等のやうに爲て居られるとお鶴は益々冷却してしまふ。』

『君は未だそんなことを言つて居るね、お鶴さんは冷却したから逃げだしたぢやないか。』
 『それはさうだらう、然しお鶴も人間なもの、僕がこんなに苦しんで居ると聞けば多少心を動かすだらう、まさか憎いとは思ふまい、僕はそれで十分だから君何とかして武島君にも相談をして歸つて来るやうに力を盡して呉れ給へな、頼むから、助けると思つて。』

『君に聞くがそんな女が君の傍に居て君は幸福と思ふかね、君はお鶴さんを買ひかぶつて居るのだ、君の夫人であつた人を攻撃するぢやないが、あの女は唯だの女の、もちつと手におへない女だよ、武島君の手紙の中にもラブするには可いかも知れんが決して妻とすべき女ではないつて言つて來たぜ。君もこりくした筈だが。』

『僕だつてお鶴の性質は知つて居る。随分持て餘した、然し愛は少しも變らない、將來或は不幸かも知れないが決して頓着しないのだ。』

『矢張り逃げた魚は大きいのだ。』

『決してさうは思はない。』

『なに其れが人情だよ、お鶴さんが逃げたので今更難有く思ふのだよ、釣り上げて見給へ、やはり唯だの小さい魚だから、おまけに君を刺す危険な魚だから。海は廣いよ、其中には又大きな鯛でもかゝるだらう、釣り直し給へ。』

『小さくても刺れても僕は逃げた魚を望む。』

『生憎くと先方では命を拾つた積りでうれしさうに遊び廻はつて居るだらう。』

『酷いこと言ふ、』と先生大しよげにしよげで黙つて終つたから僕も氣の毒になり、君のお鶴さんの人物評を讀ませてやつたら多少思ひつくだらうかと、君から來た昨夕の手紙を見せた。

ほいしまつた思つたが後のお祭、江間は熱心に讀んで、讀み終ると暫く目をふさいで居たが、

『なるほど第三者といふ者は冷酷な者だ、』と言つて長嘆息を發するから、

『可笑なことを言ふね、』と聞くと、

『お鶴の人物は武島君の評する通りかも知れない、それはどうでも宜しい。しかし何も強ひてお鶴をして僕を思ひ出さなない様に爲なくても可いぢやないか。僕の書いたことが武島君にも氣の毒に取れるならお鶴に見せて呉れたつて可いぢやないか、君等はお鶴が冷えたといふけれど實は君等も手傳つて冷えさして居るのだ。宜しい最早頼まない、僕は直接にお鶴と話す、僕の口からお鶴に向つて僕の苦痛を訴へる。』

『逢ひたいといふのかね、逃げた女房に。』

『何でも宜しい、僕は第三者に一任するわけにいかない。君等が僕の將來を慮つて思ひきれといふのは感謝する、しかし必ずしも愛の冷却しない僕の妻をして益々冷却せしめやうとするのは實に慘

酷だ、僕は武島君に手紙をやつてお鶴に逢はして貰はう。』
 『それは君の隨意だ、しかし多分お鶴さんは君に逢うまいよ、』と僕は餘り馬鹿々々しいから刳ぐつてやつた。
 『そんなことは無い、僕はきつと逢う、』と言ひ放つて先生歸つてしまつた。多分先生からも手紙が行くだらう、このことに就ては僕何とも言はない、一に君の處置にまかせる。
 そして僕は見物の方に廻らう。

九

大井君足下

來たよ手紙が。長々しく書いてあつたが要するにお鶴に逢はして呉れろといふ意味。
 逢はすことは決して雙方の爲でないから僕は何處までも第三者の冷酷(江間君の所謂る)を守つて居やうかと思つたが、それでもお鶴はどういふかと試に問うて見た。
 『兄さんは孰ちが可いと思つて?』と聞くから、
 『逢はん方が可いと思ふ、逢つて見て話の様子で歸つても可いと思ふのかね。』
 『歸る氣は少しもないけれど、それで如何な顔をして居るかと思つて逢つて見たいわ。』

『そんなことなら逢はん方が可い。』

『さう、ぢやア逢ひますまいよ。』

見給へ、女といふものは先づこれだ。其處で僕は斷然、逢つた處で無益だ、却つて君の面を汚すばかりと答へてやつた。

兎も角、君様子を見に行つて呉れ給へな。實に氣の毒なものだ。

十

武島君足下

江間が行つたらう。僕は君の手紙を見るや、其夜出かけて見ると先生最早出立つた後サ。驚いて母なる人に尋ねると、何でも君の手紙は見たらしい。然し彼は母に、一寸逗子まで行つて來ると言つて、止めるのも聞かないで出立たさうな。

一足違ひで江間の男を十割下げさしてしまつた。然し僕もまさか君が止めるのを、押切つて出かけるとは思はなかつた。

十一

大井君足下

芝居はそろ／＼大切に近づいた。夜の十時、突如として江間君が現はれた。第三者の冷静なる僕もこれを見て暫時は驚かざるを得なかつた。眠くなりかけた眼をこすつて篤と見ても矢張蒼ざめた顔の、すごい眼つきをした男、江間君其人。

『如何して君は来た。』

『お鶴に逢ひに来た。』

『お鶴は最早寝たよ、』と言つたのは自分ながら可笑しかつた。『だつて君、逢はない方が可いと僕は返事をしたが、』と言ひ足した。

『君の手紙は見た、しかし僕は利害を考へて逢うのぢやない。逢つて僕から直接にお鶴の心聞きたいのだ。』

『腹が立つばかりだぜ。』

『いや僕は決して怒らない、怒りたうても怒ることが僕には出来ないのだ、何卒逢はして呉れ給へ、僕は……僕は唯だ一言したいことがある。』

『ぢや逢ひ給へ、』と言はざるを得なかつた、其顔を見ては、其聲を聞いては。其處で僕はお鶴を起して右の次第を話すと、お鶴は非常に驚いて寧ろ恐怖れて、

『兄さんも一緒に居て下さいな、私は恐いから、』と慄へ上つて居る、女が男を恐れるやうになつては愛も戀も有つたものではない。

八疊の間の疊を一間も置いて、お鶴の傍に僕が坐り、江間君と差向つた。お鶴は顔を上げ得ないのも無理はない、江間君は昂然として此方こちを向いて居る。かういふ場合になると有聲まじがに、みえはあるものと見えて、江間君は寧ろお鶴をしりめにかけて居る。

『お鶴、お前は最早これぎり僕の處へは歸らない氣かね？』と先づ江間君から口を切つた。お鶴は一寸顔をあげたが直ぐ又下を向いてしまつて一言も發しない。

『お前は僕の愛を疑ぐつて居るね。』

『さうでは御座いませぬよ、』とお鶴は僅に口を開いた、其様子はまるで鷹に睨まれた雀も同様なわなとして氣も轉動して居るらしい。僕はこれらの様子を見て、此會見の結果を直ぐ豫測してしまつた。打解けて物と言つた處で江間君の思ふやうになるは甚だ覺束ないのに、かう四角四面しかしめんに、まるで外交談判でもするやうにお互が構へ込んで面白話になるわけがない。女は畏縮して、益々男の心から遠ざかるばかりである。

『そんなら何故僕を見捨てた。』

『とても御互の幸福ではないやうですから。』

『これは可笑しい、僕がお前を愛し、お前が僕を愛するなら其以上の幸福はないではないか、それともお前は最早僕を愛さないのかね?』

お鶴は此問に何とも返事のしようのないのは當然のことである。

『どうだね?、愛しないなら愛しないと明白に言へ!』

江間君の聲は疇走つて来た。大井君足下、江間君は此種の間を此種の聲で、今日まで幾度となく長火鉢の傍で發したのである、と僕の思つたのは無理もあるまい。これでは折角出かゝつた愛も引込んでしまふ。

『返事をしないか!』と江間君の喝破した時、これが火鉢の傍であるなら忽ち鐵拳空に舞ふ大亂ちきの序幕であつたらう。お鶴は泣くやうな顔をして僕を見上げて救を求めた。

『まア君のやうに言つてもお鶴が困るだらう、お鶴は決して君を愛しないではないが、つまり性の合はんものが夫婦になつて居た處で將來お互の幸福でないと思つたのだらうよ、』と僕は口を入れた。

『イヤ君と話をするのぢやない、お鶴の口から明白な答辯を望むのだ。』

『政府委員の答辯を望むかね、』と僕はまぜつ返し度くなつた位。大井君足下、江間君は女にもてる柄ぢやないことを僕は愈々確かめた。

『私も兄さんの被仰つたのと同じよ。』

『そんなら何處が性に合はんのだ、合はなければ合うやうにすれば可いぢやないか、性なんて口實だ、お前の愛がないのだ!』

『さうお思ひなるなら、其でも仕方が御座りません、』とお鶴は忽ち「性」を發揮して皮肉の矢を一本。

『うん僕はさう認定する、然し僕は何處までもお前を愛する……』

『貴所のが愛でせうか。』

『愛だとも、愛でなくつて何だ。』

『さう、妙な愛が御座いますことね。』

『妙とは何だ失敬な……』

『だつて妙ぢや御座いませんか、ぶつたりた、いたりする愛があるでせうか、そんな愛なら私は御免蒙りますわ。』

『それは別問題だ、お前が失敬なことをいふからな、愛とは別問題だ。』

『だから私はそんな愛なら御免を蒙るといふんですわ。』

『まア、二人でそんなことを言つて居たつて仕方がない、江間君それよりか本問題に取りかゝらうぢやないか。』と遂に又僕は口を入れざるを得なかつた。大井君足下、僕は斯る馬鹿々々しき場に立合ふことを免かれた君の幸福を祝する。彼等は「愛」を持餘して遂に丸めてだんごとなし、江間君は

これを嫌がるお鶴の口に捻込ねぢこまうとして居るのである。而も其だんごは餘りあくどくつて、大概の女は一度口に入れて見ても直ぐ吐き出すべきしろものらしい。

『本問題とは何だらう。』

『離婚問題サ。』

『イヤ僕は決して離婚りこんしない、たとひお鶴は僕を見捨てても僕はお鶴を愛して居るのだから僕から断じて離婚しない。』

『だつて御覽の通りのお鶴ぢやないか、離婚しない處で決して君の幸福ではなからう、君がそれほどにまでお鶴を思つて呉れるならお鶴の望み通り離婚してやつたはうがお鶴を愛する所以ぢやあるまいか、君よく考へて呉れ給へ、第一君の體面にも關するよ。』

『體面も幸福も僕は最早もうちかま關はないのだ、又離婚してやつてお鶴を愛するなんて、そんな聖人には僕成りたくない。』

『さういふなら君はどうすると言ふんだ。』

『お鶴に歸つて貰ひたいのだ。』

『だつてお鶴は歸らんといふぢやないか。』

『お鶴、お前はどうかあつても歸らんのか、僕がこれほどまでに頼むのに歸つて呉れんか、』と江間君

はお鶴をきつと見て言つた。

『それは兄にいさんに聞いて下さいな、私の身體からだは兄さんに任してあるのですから。』

『イヤお前の口から直接に返事をして呉れろ。』

『兄さん貴所おんた何とか言つて頂戴な、私こはいからあちらへ行きますよ、』と小聲で言つてお鶴は逃げてしまつた。江間君は驚いたが止めることも出来ず、熱あつと見送つて暫時しばしは物を得言はなかつた。

『よろしい解わかつた！離婚のことは何れ大井君から何とか返事をして貰ふことにする。失敬。』

『まア今夜は泊つて行き給へ。』

『イヤ宿が取つて有るから。失敬。』

憤然として江間君は去つた、會見の模様は以上の通り。江間君も恐らく意想外だらうと思ふ。

十二

武島君足下

今朝訪問して見ると未だ歸つて居なかつた。母じやひとは心配で昨夜遂に眠らなかつたさうな。暫時しばしすると歸つて來た、其顔色を見ると僕も泣きたくなつた。母にも僕にも一言も言はないで直ぐ蒲團ふとんを被つて寢てしまつた。そのまゝ休ました方がよからうと、僕も會社へ出勤して、午後四時

頃私宅へ歸つて見ると、手紙が来て居る、其文面に依れば、最早自分もあきらめた、然し今直ぐ離婚したくない、籍まで持つて行かれては縁が全く絶えたやうな気がして、とても堪へ得ないことである、だから實際は離婚でもよいから、せめて今暫く籍を置いて貰ひたい、自分は不幸な男である、自分を愛しない女をこれ程までに愛し然も此愛を自分の思ふやうに示すことが出来ないとは。といふ意味であつた。

いづれ會見の様子は君から報知があるだらうが、兎も角も以上のことを通知する。僕も最早此以上には手段がない。お鶴さんも今が今再婚する身體でもなからうから、江間の言ふ通りにしてやつたらどうだらう。

ところで僕は今日、會社で北海道の支店詰を命じたから三四日の中には出發しなければならぬこととなつた。一度逢ひたいが忙がしくつて僕から訪ねる譯にいかぬ。君上京して呉れるなら非常にうれしいが。

兎も角も一度逢ひたい。

十三

大井君足下

君と分れてから後、二週間ばかりは極めて穩かに過ぎた、お鶴も別に變りなく、性のまゝに手足を動かして居た、心細い聲で讚美歌を歌つて見たり、口をすぼめて氣取つて見たり、驚く程浮かれて見たり、泣いて居るかと思ふ程沈んで見たり、少し氣に入らんことがあると忽ちしよげて突劍どんに僕の妻に當つて見たり、それかと思ふと十四五の娘のやうなあどけないことを言つて見たりして日を送つて居た。見た處では例のお鶴に變りはないが、然し何處かに物足らなさうな處が見える、何となくじれつたさうな風もあるらしかつた。或日突然、

『兄さん江間様はどうなすつたてせう、』と聞くから、

『別にどうも爲まいよ、病氣も次第に快くなつて來たらしい。』

『さう、それなら可いけれど。』

『お前氣になるかね？』

『だつて一年も連添つた人ですもの多少氣になりますわ。』

『感心だね、いつそのこと歸つてやつたら病氣も忽ち全快するだらう。』

『兄さんは直ぐあんなことを言つてからかうから嫌、眞面目で聞いて下さいよ、私昨夜こはい夢を見たのよ。』

『江間君に追駈けられる夢でも見たのかね。』

『心中した夢！私思ひだしてもぞつとするの。未だ江間様と結婚しない時でした、江間様と連れだつて大宮に行つたことが御座いましたね……』

『おやく／＼乙なことを爲たのね、僕初めて聞くよ。』

『だから今白狀するんぢやありませんか……昨夜の夢も矢張その大宮。私が木の間から覗いて居ると一人の男が池の周囲をまご／＼して行つたり來たりして居るのよ。月影に透して見ると江間様によく肖て居るから、若しかと思つて出て見ると果して江間様なのよ、貴郎どうしてこんな處に來て居らつしやるの、御病氣は最早快くなつたのですかと聞くとね、悲しさうな顔をしてね、とても僕にはお前のことが思ひ切れんからこれから自殺しようと思ふ處だ、しかしお鶴僕は決してお前を恨みはせん、恨むどころか一年の間でも僕のやうな狂人じみた男の妻として能く辛抱して呉れた、僕はうれしいと言つて私の顔をちつと見ながらぼろ／＼涙をこぼすのですよ、私も急に悲しくなつて、江間様悉んな私が悪いのだから勘忍して頂戴な、私は最早どうあつても貴郎のお傍を離れないからと言つてしがみ附いたのよ。さうして二人で抱き合つて思ひきり泣いたのよ。それから江間様の被仰るには此儘二人が東京に歸つて又夫婦になつた處で大井や武島の言ふ通り決して幸福ではない、二人の性は決して直りはしないのだから其れよりか今二人がかうやつて抱合つて居る時、このまゝ死んでしまつた方が可いと言ふのよ、さうですとも、私も貴所と一緒に死んだ方が可いと、夫れから

二人で抱き合つたまゝ池へ飛び込んでしまつたの。それから先を言ふと兄さん笑ふから止ませう。』
『なんで笑ふものか、言つて御覽な。』

『それから妙なのよ、死ぬる時少しも苦しくないの。それから私が江間様に最早死んだのでせうかと聞くと死んだのだらうよつて、被仰るのよ。それから二人で手を引いて野のやうな處をぶら／＼歩いてると快い氣持なのよ、そして江間様が大變優しくなつて今までのやうぢやないの。きつとこれは二人とも性が直つてしまつて二人とも天使のやうになつたのだらうと思ふと私うれしくつて堪らないのよ。すぐ好きな讚美歌を歌はうと思つて聲を出さうとすると出ないから、頻りと出さうと腕いたら眼が醒めてしまつて。』

僕は此夢物語を聞いた時、たゞ微笑したゞけで別に何とも言はなかつた、お鶴も此夢をたいして氣にする風でもなかつた。處が二三日經つと突然江間君から次のやうな手紙が來た。

僕の病氣は未だ全快しない、度々お見舞ひ下さつて難有いには難有いが、僕は少しも全快を欲しない。

餘り女々しいやうでさぞ君も僕に愛憎が盡きたであらう、僕も自分で自分の心がわからない。先達夜中君を驚かした時、僕はたゞ僕の心のほどを打明けて君にもお鶴にも訴へる積りで出かけたのである。處が御覽の如きていたらく。要するに家庭に於ける僕はあの通りなので、僕の性質にはど

うしても穩に靜かに物を抱擁するやうな趣はないのである。言ひ換ゆれば僕は愛を湛へ得る器ではない、自分の愛する女をして心靜かに氣も暢やかに我愛の泉を掬はしむることは出来ないものである。これを思ふと僕は生命の薄運を歎く外はない、僕は決してお鶴を恨まない、恨むどころか一年の間でも僕のやうな不具者と連れ添つて辛抱して居て呉れたことを感謝するのである。

そして僕はお鶴のことを思ふと實に可哀さうで堪らなくなる。お鶴も僕と同じく不具者の一人、其心は清く正しいが其性は深く穩やかでない。しかも燃るやうな愛情を以て其心を焼くことがある。あゝ可憐の少女よ、吾等二人は實に薄命に造られて来た！二人とも人並に戀てふものを知つたが爲めに、そして其一人は人並よりも幾倍烈しき、情火を燃したるが爲めに、そして不運にも此二人一度相抱きたるが爲めに、遂に幾千萬人にして僅に一人が陥るべき不幸に二人とも陥ってしまった。

僕は最早此世に希望も何にもない。若し僕の病氣が癒ゆるとて僕は死灰のそれと同じである。

僕とても男の一人。幾度か我心を引起すべき桿杆を用ゐた。「正義」、「眞理」、「事業」、「名譽」、その他、平生僕を奮起さすべき題目に由つて僕を再び此世の人たらしめんと試みた。案外に脆いものは此等の題目であつた。愛のために碎けた心に向つて、何等の方も與へ得ないのである。茫々たる天地にたゞ一人立つて居るやうな氣がして淋しくて堪らない。

戀しくもある哉お鶴。來つて我を救へ、助けよ、此薄命なる孤獨者を救へと、嗚呼僕は幾度叫ん

だか。

然し最早僕も全くあきらめた。否、あきらめたのらしい。死と定まりし人の案外沈靜なる如く僕も大に沈靜になつて来た。

就ては止め置いた籍をお返しする。此旨をどうかお鶴にも傳へて呉れ給へ。結婚してから今日で恰度一年と十五日。』

我々第三者と雖も此手紙を讀んでは涙のこぼれない譯にゆかない。殊に不思議なのはお鶴の夢の中で江間君が言つたといふ言葉と右の手紙の中の文句とまるで同じな處があることだ。そして見るとお鶴の心の底には未だ江間君の心が宿つて居るかも知れない、戀ほど奇態なものはなく女ほど戀手古な動物はない。かうなると第三者の冷靜も甚だ當にならなくなつた。

さて江間君も愈々籍を返すといふので恰度手紙を受取つた日から四日目、僕は朝早く上京し、其日の午後四時頃江間君を訪ね、庭の方から廻つて其書齋の外から聲をかけると返事がない、不在か知らんと今度は母堂に會つて御留守かと聞くと居る筈だとのこと。然るに何處にも先生の影が見えない、定めし散歩にでも出たのだらうと僕は暫時母堂と語つて居た、ところが母堂の言葉の中に今朝お鶴さんから手紙が來たらしかつた、差出人の名は書いてないが確にお鶴さんの手であつたとの事に僕も頗る驚いた、『それは間違でせう、お鶴が手紙をよこす筈がありません。』と言つて見たが、

いやどうしてもお鶴さんの手であると言はれる。争つたところで仕方がないから僕は唯「へえ、不思議なこともあるものだ」位の挨拶をして帰宅した。

翌朝僕は再び江間君を訪ふ積りで家を出かけると、逗子の妻から電報。直ぐ歸つて来いといふ意味。別に何とも書いてはないが、僕はお鶴の身の上といふことを直ぐ覺つた。逗子に歸つて見ると果して。

江間君とお鶴の死體が奥の八疊の間に最早運びこんであつた。様子を聞いて見るとお鶴は前夜八時頃、月が佳いから一寸海濱を散歩すると言つて出たきり歸つて来ず僕の妻は夜通し心配して待つて居ると、次の朝になつて小坪と鎌倉材木座との崖の下で心中があつたとの取沙汰、女の風俗を聞いて見るとどうも怪しいので早速飛で行つて見ると、二人の死體が既に磯に引上げてあつたさうな。僕は白状するが此珍事に就いて何等の豫測も出来なかつた、餘りに小説じみて、餘りに事が突飛なので、到底僕のやうな者の頭では其前兆を捉へることが出来なかつたのである。

しかしお鶴も江間君も書置らしい者は遺して置かなかつた。たゞ江間君の懐中にお鶴からやつた手紙があつて其手紙に依ると江間君から僕によこした最後の手紙をお鶴が讀んだものらしい、僕は机の抽斗に入れて置いたのである。今までお鶴は僕が許して見せぬ手紙は決して見たことのない女であるのが、故意か偶然か、兎も角僕の納つて置いた手紙を見つけ出して、之を讀んだのは唯事で

はないのである。

それから其手紙を讀んで非常に泣いたらしい。泣いて江間君に手紙を出したらしい。其手紙には先夜の夢物語が書いてあつた。然し少しも其夢を實行しようなどの意味はほのめかしてない。又た江間君を誘ひ出すやうな文句もない。

前後の事情を以て推測するに、江間君の飛び出したのも心中の覺悟ではなく、お鶴が散歩に出たのも江間君に出遇ふ積りではなかつたらしい。この以上は到底僕等如き第三者には判断も推測も出来ないのである。

大井君足下、僕は此哀れなる男女が、あの斷崖の上に立ち月色茫々たる相模灘を望んで、其薄命なる肉體を冷酷なる自然に還し、其刹那に燃え上つた愛情を永久に保たんことを願ひ、相抱いて泣いた光景をあり／＼と想像することが出来る。

東京の新聞紙には痴情云々を例の筆法で書いて居た。痴情か、痴情か、痴情とは何ぞや。若し自殺する人が、生きて此世に呼吸すべく何の意味だと問はゞ、何人か克くこれに對して彼を満足させる程の答辯を爲し得る者ぞ、第三者の説明と答辯とは當局者にどれほどの力があらう。

僕から言はすると、江間君もお鶴も今は相携へて、お鶴が夢に見たやうな野邊を散歩して居るだらう、お鶴は心ゆくばかりに其好きな唱歌を謳うて居るだらう。

正 直 者

見たところ成程私は正直な人物らしく思はれるでせう。たゞ正直なばかりでなく、人並變つた偏物らしくも見えるでせう。

けれども私は決して正直な者ではないのです。なまじ正直者と他から思はれたばかりに容易ならぬ罪を今日まで成し遂げて生涯の半を送つて来たのであります。

鏡に對へば私にも直ぐ私自身の容貌が能く解ります。私の顔には角といふものはありません。冴えた色がありません。眉毛が濃く、頬髯が多く、鼻が丸く、唇が厚く、そして何處かに間の脱けたところがあります。笑へば背に深い皺が寄るのです。それが——淺ましいことには——言ひ知れぬ愛嬌になつて居ます。それに私は随分大きな方ですから、何時も着物は裾の足りないのを着て太い手が武骨に出て居るので一見素朴らしくも見られるのであります。身體の小さい人はチヨコマカと才はじめて、身體に重味のないばかりか心の重味までが無いやうに他から推れるものですが、身體の太い男は、馬鹿でも悪黨でも横着者でも先づ他から重く思はれるのが普通で、私も其例には洩れなかつたのであります。

口數多ければ未だしも、私は口無調法でした、けれども滔々と饒舌れないかといふに左様でもないのです。時に由つては随分人並の辯舌は振ふのであります。唯々、(これが天稟でせう)大概の場合他人の言ふことのみ聞いて、例の背の皺を見せるばかり、それで居て他人の言ふことは何もかも能く解り、推測もする、邪推もする、裏表も知つて居るのであります。

私のやうな男は世間に随分見受けますが、皆其身の置かれた境遇、例へば昔でいふ士農工商の境遇に居て、それ／＼面白い芝居を打つて居ます。たゞ此種の人(私も其一人)滅多に其境遇から外には飛び出し得ないものであります、其飛び出し得ないところに彼の重味も着いて、其打つ芝居が愈々巧く當るのであります。

ところで私の境遇の低いのと、それから私には或特別の天性があるのとで、私の演じて来た芝居が誠に淺間しい、醜いものとなつたのであります。或特別の天性といふのは、今こゝで言はないで、後で段々に解つて来るでせう。

しかし誤解をふせぐ爲めに一言します、私は決して世の中のこと悉く芝居と同じだといふ説を擧つて居るではありません。たゞ前に説きました如き、私共のやうな性質を持つて居る連中は、何處かに冷たいところがあつて、身に迫つて来た事柄をも、靜かに傍觀することが出来るのです、それです。極く眞面目な、誠實な顔をしたが、而も克く巧んで物事を處置することが出来ます。

既に巧んで處置するといへば、其處に芝居らしい趣があるではありませんか。
さて、これから私の身の上を二ツお話しします。

私の父は古い英學者で永年中學校の教師を務めて居ましたが、同窓の友ともいふべき人々は皆其の學び得し新智識を利用して社會樞要の地位を占めましたけれど、私の父のみは最初語學の教師となつたぎり、終に其職以外に何事をも爲し得ず、私の十二の春まで一教師として此世を送り、變則英語の專賣者になつて生涯を終へました。

父の死と共に私は全くの孤兒となりました、といふものは母の顔を私は少しも知りません。父は私の母の亡くなつて後は、始終妾同様なものを置いたばかりで、それも七人八人ではなく、私の記憶に存つて居るばかりでも四人ばかりあり、終に眞の家庭らしいものは作らなかつたのです。

何故父は、さる不倫なことをして居たかといふ理由は知りません、けれども父の子なる私の性質から推測しますると、父は唯だ肉慾の満足を得るばかりに女を置くことを知つて、家庭などのことには全然心を動かさなかつたのだらうと思はれます。

私の知つて居る三四人の妾に就いても父は情愛を以てこれを遇した様子は少しもありませんでした。私は少しばかり酒を呑みますが父は決して酒杯を手にしたことなく、又私よりも更に無口で、家に居てもたゞ茫然と火鉢に對つて煙草を吹かして居るか、それでなくば机に向つて英書を繕いて

居るかで家中は常に寂寞として居ました。

それですから女中兼帶の妾が來ても初の中は父や私を對手に饒舌りますが、一月二月と經つ中に何時しかこれも無言の業に堪へ得るやうなつて了ふのです。

冷寒い空氣と暗鬱な影とが常に立單めて居る中に、私も亦た父と同じやうな性質で、別に悲しいとも辛苦いとも思はず生育ちました。それですから私は父の在る前から既に孤兒同然であつたのであります。

兄もなく弟もなく、頼りにすべき親戚もなく、十二歳の少年は父の死と共に父の友なる某中學校の國語の教師の家に引取られました。教師の姓は加藤、其加藤の言葉に依れば私を引取つたのは父が生前の依頼であつたさうです。

加藤が私を親切にして呉れたか如何だかといふことは別に言ふほどのこともありません。普通の學僕同様なことを仕ながら英語の夜學校に通ひ、國語の方は直接に加藤から少しづつ學んで居ましたが、孤獨には慣れて居ますから私の心持では加藤の待遇に就て格別の感じを持ちませんでした。『お前の父上は至極好人物であつたが、惜いことに活動といふものを仕ないで退居ばかり居なすつたから、折角の利器を懐きながら老朽ちて了はれた。お前は一ツウンと世の中に飛び出して大に活動しなければ可かん、學問が如何あつても活動といふことが無ければ今の世は用ゐられんぢや。』

加藤は其細い眼を光らして自分に向ひ此言葉を聞したことは幾度であるか知れませんが、なるほど左様だ、加藤の小父さんの言はれる通りだと私も思はぬではないが、天稟は争はれぬもので、重苦しい性質は言葉の弾力や、理想の楨杆では容易に動きませんでした。所謂、なるがまゝに移つてゆく其境遇に處して唯だ其日々々々をじつくりと暮す、それが私の運命であつたのです。

十九の秋、加藤は病んで床に就き、二十日ばかりで遂に此世を去りました、六十七歳ですから先づ以て長命の方でせう。死ぬ少し前に私を枕許に喚んで、斯ういひました。――

『お前の父上から私の受取つた金は四百圓足らずであつた、家財や書籍を賣つて二百圓ばかり、都合六百圓に三十圓不足する金を私がお前と一しよに預つたのぢや、父上の頼は此金を食料に、金の續く間お前を世話して呉れとのことであつた、それでお前の十二の時から今年までザツと八年の間で、預つた金は大概無くなつて了つたが、未だ百圓ばかり残つて居る勘定になる、それを今お前に此處でお返しするから、お前は私の死んだ後、この金を持つて獨立して見るが可からうと私は思ふのぢや。』

加藤の言ふことは私に能く飲みこめました。要之、加藤の死んだ後、私は百圓の金を持つて、加藤の家を出てゆき、如何にもして獨立ちて世の中を渡つて行くことになつたのであります。それでも加藤が私に百圓の金を渡すといふのが今から思ふと不思議で、實いふとあの時、加藤から一文な

して直ぐ立退きを命ぜられても私は文句なしに其言葉に従ひ、文句のないばかりか、當然のこと、考へて立退いたのであらうと思はれます。ですから百圓受取つた時は、眞實私はうれしう思ひました。加藤の死んでから一週間経つて、私は住みなれた家を、別に大して悲しいとも思はず、出てゆきました。

落着く先は麴町區某小學校の直ぐ近所にある下宿屋の一室です。私は加藤生前の世話で小學校の英語の教師になりましたので、月給は十圓、下宿料が七圓ですから差當り食ふには困りませんでした。其頃の私は今よりも丸顔の、可愛い顔つきをして居ました上に、言葉の少ない、それで愛嬌もある少年でしたから、校長初め同僚からも可愛がられ、下宿屋のおかみさんからも「澤村さんく」とちやほやされました。大概のものは斯うなると一寸得意になるものです。まして年からいふと生意氣盛ですから、つい言はないでも可い無まれ口をたゞいたり、怒らんでも可いことに顔を赤くして聲を高めて見たり、かりそめにも先生を鼻の先にぶら下げて居るものですが、私に限つてそれがありません。何時も同じやうな顔をして下宿を出て、同じやうな風で歸つて来る、袴を脱ぐと直ぐ疊んで納ふ、見たところ實體な感心な青年であつたに違ひありません。

下宿屋のかみさんといふのは其ころ四十四五でしたらう、年頃の娘と十四になる男の子と三人暮の後家の内職で、間数は僅に四個、それも立派な部屋は一間もないのです。娘はおかみさんに似て

細面の、色の蒼白い、病身らしい子でしたが、眼は黒眼勝のはつきりとしたので、先づ此子の特長とでもいひませうか、其眼で熟と人の顔を見て、暫くして微かにほゝゑむのが此娘の癖でした。名はおしんですから、私どもはしんちゃんと呼んで居たのです。

おかみさんは輕薄な御世辭も言ひませんが、下宿人の誰にも親切であつたやうです。分ても私を可愛がつてくれて二月三月居る中には親子かと思はれるまでにしてくれました。けれど私は情ないことに、親子の情といふものを知らない人間ですから、うれしいとは思ひましたが、たいして感動もしなかつたのです。

人の心ほど奇態なものはありません。それほどの親切に對して私が感動もせず、初めて下宿に來た時と少しも變らぬ態度を保つて居ましたので、おかみさんの心は益々動き、愈々私に感心して、私をば又とない正直な、温順な謙遜な青年だと全然信仰して了つたのです。

娘のおしんも同じことで、母のやうに口にくそ餘り出して言ひませんが、私を信仰する熱度は母と少しも變らぬことが其舉動で私には能く解つて居ました。

今から思ひますと、眞實に正直な、温順な、謙遜な人といふは無論、此私ではなく、此娘でありました。私はおしんをば完全無缺の人間とは思ひませんが、少くとも女として彼の位なのは餘り類がないと今では信じて居るのであります。ひとつは健康のすぐれないためでもありませんが、おし

んの起居振舞から言葉から、こゝろばせまでが如何にも穩かで、おつとりとした中に情深いやうなところがありました。

年は二つ違で、先づ同年輩ですが、私は年よりもふけて見える方、おしんは子供らしいところがあつて、二ツも若く思はれるやうでしたから、おしんの私に對する心持は母と同じながら、其うち何處かあまえるやうな風もあつたのであります。

私が一人部屋にすつこんで居ると能く遊びに參りまして色々な話をして事によると夜を更かすこともありました。そんなこんな例を申せば或晩のことです、

『あなたの親父はどんな方で御座いました、』とおしんが訊きましたから、

『どんな人ツて別に言ひやうもないが、大變煙草が好きでした。』

『きつと好い方でしたらうねえ。』

『何故して?』

『だつて貴様の親父ですもの。』

又或時のことです、おしんは私が謝絶るのを無理に私の衣服を疊みながら、

『貴様は他から話しかけないと、めつたにお口をきましませんねえ。』

『さうですか、自分ではそんな積りもないのだが。』

『でも母もさう申して居ますよ。』

『さうですか、それではこれから氣をつけませう。』

『あら、別段悪いと申したのは御座いませんわ。』

『イ、エ、そんなことは善くないことです。私の父など始終黙つて居て、碌に私にも口をきかないで死んで了ひました。』

『でも必定お心は優しい方でしたらうよ。なんでも宅の父上のやうであつたらうツて、母が申して居ました。』

『あなたの父上はどんな方です。』

『口数はきゝませんが、何時でもにこゝして居て母でも私でもめつたに叱るなんぞいふことは御座いませんでした。』

『私の父はにこゝしたことは御座いません。』

『まア、それでは可憐い方でしたの。』

『別に可憐くありません、たゞ黙つて居るばかりで小言も言ひませんから。』

『母上さんは如何でした——さうく、貴様は母上さんは御存じないのですねえ、』と言つておしんは暫らく黙つて居ましたが、何と考へたか、

『貴様宅の母を如何思つて居つしやいますか？』と訊きました。

『優しい方と思つて居ます。眞實の母のやうに思ひます。』

『あら、うれしいこと、母が聴いたら如何なるよこびませう。』

先づ斯ういふ風でしたが、おしんは矢張年頃の娘です、母と同じ親切な心ばかりではすみません、月日の経つと共に、親切以上の心で私に近づくのが私にも解るやうになりました。母親も心づいて居たには違ひないですが、如何いふものか、それを少しも氣にしないばかりか、娘と一緒になつて益々私を可愛がつてくれました。さてそれなら私はおしんを如何思ひましたかと言ふと、おしんの情の十分の一も私にはありませんでした、そんなら私はおしんを冷かに扱つたかと言ふとさうではありません、おしんの思ふまゝ思はせ、するがまゝにさせて置きました。

そして其の結果は如何でせう！ 忘れもしません二月十五日の夜の事です。夜の十二時過ぎて、下宿人は勿論、母も男の子も皆な寝て了つて家の内はシンとして居ましたが、外はドン／＼雪が降りそれに風が出て雨戸をうつ雪の音サラ／＼と折り節し聞えて居ました。おしんは九時ごろから私の部屋に来てゐたのですが、十二時打つて何分か経ちまして部屋を出てゆく時、

『よう御座いますか、必定二三日中に母上に言つて頂戴よ、母上は二つ返事で承知しますから、ね、必定言つて頂戴よ、』と繰返して言ひました。その時のおしんの顔は今でも忘れません。

この晩から私とおしんは母親の眼をも忍ぶ仲となりまして、おしんは望を達したといふ満足の様子の外に、深い決心と、かすかながらも言ひ知れぬ恐怖とで、子供のやうに笑ふ時があるかと思へば若い顔をして吐息をついて居る時もあり、そして私の様子は以前と少しも變らぬのであります。ただ竊かに願つて居た慾望、おしんの身體が自分の身體に近づく毎に愈々つのる慾望、後には機會があつたらとまで熱中して居た慾望が達せられたので大きに満足しましたが、心の平穩なることは以前の通りで自然變つた様子が顔にも舉動にも現はれなかつたのであります。

おしんは身も魂も私にゆだねて了ひました。私を愛し私を信じて少しも疑はないのです。それですから、早く母親に打明けて結婚を申込んでくれろと言ひましても、私がまア〜私にまかして置けと申せば、それで安んじて居たのです。

私が前に、自分に特別な天性があると申したのは肉慾のことです。私のやうな物に偏らず、冷やかに、其傍を素通りしてゆくことの出来る男が、男女の慾となると前後を顧ることが出来ませんでした。それですからおしんの操を一度破りました以後は、おしんの好む好まぬに關はず、母親の目も同宿の者の眼もくらし得るかぎり、此慾を満しました。それをおしんは私の愛情の猛烈なためだと解して居たのです。

それで私は結婚の積りがなにかといふに、さうでもないのです。いつそ結婚して了はうかと思つた

ことも有りましたが、どうもそれをおかみさんに打出していふ決心は起りませんでした。言へばおかみさんは大よるこびで承知することも知つては居ましたけれども、ぐづぐづで二月ばかり經ちました。

ところが四月の末のことです、其日は日曜で私は同僚の一人からは非遊びに來いと招かれまして宿に歸つたのは夜の八時ごろでした、部屋に入るとおしんが其處に坐つて居ましたが私の顔を見や直ぐ突伏して了つたので、流石の私も胸がドキリしました、急いで傍に坐わり、

『如何したの、え、如何したの。』

見ればおしんは泣いて居るのです。『え、如何したといふに、しんちゃんやコラしんちゃん？』

『だつてね、母上か餘りなことを言ふのですもの、』といひながら擧げた顔を見ますと、なるほど涙は出て居るけれど泣いて居るのか、笑つて居るのか判らないのです。これで私も少しは胸が落着きましたから、

『何て言つたの母上さんが。』

『何とつて別に判然したことは言ひませんけれど、何だか二人のことを母上は感附いて居るらしいことよ。』

『それで何とか言つて。』

『お前どうする氣かとだしぬけに聞きますから、どうするッて何を、と言ひましたら、母上にだけは明亮言つておくれ、お前は澤村さんと約束でも仕たのではないかと言ひますから、私はたゞ黙つて居たのよ。さうすると母上さんが、女といふものは操が大事だとか何とか色々なことを言ふのですよ。私悲しくなつて泣きだしたの。さうするとね、母上さんが、若しお前が澤村さんの妻になる氣なら私も決して否は言はない、澤村さんなら私も氣に入つて居るのだからお前の決心さへちやんと打明けて呉れれば私から今夜にでも澤村さんと相談するが如何かと申しますのよ。私もそんなさうして頂戴と言はうかと思つたけれど、若しね、だしぬけに母上さんが貴様にそんなことを言ひだしたら貴様に考へがあつて其とぶつかるといけないと思ひましたから、何と言つて可いか分らなくなつたから黙つて居ました、さうすると母上さんが黙つて了ひましたから、私尙ほ悲しくなつて泣いて居ましたのよ。けれどもね、何とか言はないと思ひましたから、それぢやア母上さん何卒貴女から澤村さんに聞いて見て下さいと頼みましたの。けれども其前に私から一寸澤村さんに言うて見ますから其後にして下さいと言ひましたのよ。それぢやアお前の可いやうになさいと母上さんは何だか機嫌が悪いのよ。だから私も直ぐお部屋へ来て先刻から待つて居ましたの』

斯う言はれて私はすつかり當惑して了つたのです。これが當前の方なら、「ウンよろしい、それなら私から直ぐ母上さんに相談しよう」と決心するところですけど、私には其決心が出ないのです。

私の性質として、かういふ場合に直ぐ熱することが出来ないのです。

『それは困つた、』と口を衝いて出るかといふに、さうでもないのです。

『それでは母上さんが今に何とか相談に来るでせう。其時よく相談すれば可い、』と静かに言つて火鉢にもたれて涙の痕をハンケチで拭いて居るおしんの脊を撫でました。すると例の慾情が燃えあがりましたから我知らずおしんに摩寄りました。何と淺間しい人間ではありませんか。

其トタンにすつと障子を開けて入つて來たのが母上さんです（其頃私はおかみさんと呼ばず母上さんと言つて居ました。他の下宿人の一人二人もさう呼んで居たのです）

おしんの來て居る時、母上さんの來ることは此二三ヶ月殆ど無いことですから私は喫驚しておしんの傍を飛退きました。おしんは起つて外に出てゆきました。其あとに母上さんは坐りましたから私も其向うに坐り、二人の仲には小さな長火鉢があるのです。

『私少し御相談があるので、』と先方は直ぐ切りだしました、そして力めて話を眞面目にしようとする様子ですが、やはり言ひ悪いと見えて笑を含んで居るのです。

『ハア、』と言つたぎり私は何とも言葉が出ません。

『大概お察しても御座いませうが。それで貴様のお心持は如何でせうか、それを一應承はりませんとね、私も心配でなりませんから。』

『イ、え、最早僕には如何といふ意見もないのですから、母上さんのお心持一つで……』

『それでは私にも別に否應はないので御座います、あんなものでも貴様が生涯連れ添つて下さるといふことなら私も貴様の御人物は承知して何時も感心して居ますのですから何よりだと喜びます。』

『なに僕のやうな男が……』

『それでは急に話を決めませうでは御座いませんか、それでないと、それでないと、まア貴様に限つて萬々そんなことはありませんけれども、若いもの同志のことですから世間では又た何と申すか分りませんし、さうすると貴様の學校の方も何ですから……』

『さうです、だから僕も何です其一應其校長に丈は打明けて相談して置かうと思ひますから……』

『それは可いお考です、校長さんにお話になりまして、校長さんが表面仲に立つてくだされば何より御座います、』とこれにて相談は決定たのです。

母は事の成行きを少しも疑ひませんので、校長に相談すれば萬事好結果と呑みこんで了つたのです。私が校長に相談すると言つたのは一方の血路を開いて置いたのです。私のやうな正直者は何時も波に流されながら波に乗つて居るのです。

母上さんが自分の居間（私は一室しかない二階に居ました）に歸つてゆくや私はごろり寝ころんで二十分ばかり茫然して居ましたが、其間何も考がないので、たゞぼんやりと天井を眺めてまじま

じと眼瞼を動かして居たばかりです。けれども今一度おしんが来るだらうと待つて居たのです。來さうもないから床をのべて寢てしまひました。

翌朝おしんが來て部屋を片付けて呉れましたが、すっかり妻といふ舉動です。眼だけで物を言つて口数は多く聞きません、袴の皺などを直してくれて、私の出てゆく時、ちひさな聲で、

『それでは今日校長さんに相談して下さいな、』と言ひました、其聲、其調子、少しも疑はないのです。相談といふのはたゞ一通り話して置くだけのこと、初から決めて居るのでした。

授業が終むと私は校長に少し相談があるからと、一室に連れ込んで、結婚の一條を話しました。けれど勿論私とおしんの關係は言ひません、たゞ手短かに下宿屋の女主人から娘を貰つて呉れると言はれて居るが如何したものだらうと持込んだだけです。これが他のものなら直ぐ校長に娘との關係を疑はれるのですが、私は信用されて居るから校長も平氣なもので、

『君は結婚する氣かね、』と聞きました、先づ。

『私は如何でも可いと思ふのです、だから貴下の御意見を伺ひますので、』と私も平氣な顔でいひました。

『まア不賛成だねえ、早いよ、せめて二十五六になればだが君は丁年にすら足りないのだからねえ、尤も君は二十五六の者でも及ばぬ確固したところのある人だけれど、矢張年は年だからねえ。』

「兎も角校長に相談してと先方には申して置きましたのですから……」

「宜しい、それぢやア私から謝絶つて上げませう、」と校長の言葉は頗る手輕いのです。

「けれど随分先方では熱心なのですから唯だ謝絶るわけにも參らんやうですが。」

「おかみさんが全然君にほれこんで居ると聞いたが愈々事が持上がったね。まア待ち給へ妙案があるだらう、」と校長は笑味を含んで考へて居ましたが、

「妙案がある、君今日歸つて斯ういひ給へ、校長に相談したら可らうと賛成したが、然し校長の言ふには下宿屋に居て下宿の娘と結婚するのは不味い、それよりか其處を出て校長の宅に當分厄介になる、そして一月も経つたところで校長からお前さんのところの娘を澤村にくれんかと斯う相談を持こむ、さうすれば、人目もよし、勿論儀式にも適ふし、さうし給へと親切に言つてくれたから其議に従はうと思ふ、斯う言ひ給へ、それならおかみさんも尤もだと思ふに違ひない。其處で君は直ぐ私の宅に移轉し給へ。狭いけれど玄關の三疊に弟が居る、當分あれと同居するサ。それで君は今後下宿屋に立寄らんやうにする。一月も経つたところで私から理窟をつけて破談を申込み先方だつて文句はなしそれなりで君の身の方がつくといふものだ、之だ、此妙案しか外にあるまい。」

私は其意を奉じて下宿屋に歸りました。そして校長の妙案を持出しますと、母上さんは大よろこびです、おしんは憐いで居ましたが別に否とも言ふことが出来ません。其晩おしんは十二時過ぎま

で私の室に居ましたが、其いちらしい風は今も私の目に残つて居ます。繰返へして、どうか一月と言はず一時も早く一緒になつてくれるといひました。そして私が一月の間は遊にも來ないやうにするからと申しましたら、それでは九段の公園あたりで時々會つてくれるといひますから私もそれは承知したのであります。

校長の宅に移つてから一月経ちました。私は一度も下宿屋には行きませんでした。けれどもおしんとは四度嬉曳しました。最後のとき、おしんは

「それでは明日ですよ、きつと明日ですよ。若し明日校長さんが來て呉れないなら貴郎でも可いから來て下さいよ、」と言つて、いそ／＼して私と別れました。

おしんの望通り、其翌日校長は下宿屋を訪ねました。私は如何なることかと、ないない大心配で待つて居たのです。事によるとおしんとの關係が全然ばれて了ひはせんかと、心配はそれのみでした。間もなく校長は歸宅て來ました。

「案外話が早く着いた。君、あのおかみさんなか／＼解つて居るなア、」と、これを聞いて私はほつと呼吸を吐きました。

「如何でした、おかみさん何とか申しませんでしたか。」

「何、何を言ふものか、私がこれ／＼で結婚はまだ早いし、それに澤村には未だ勉強がさせたいか

「イヤといふ氣はないけれど、先づ當分見合せてもらひたい、縁があれば何年か先のことだが、何時のことかそれも分らぬから娘さんは良縁のあり次第何時でも嫁にやられたら可からうと言つただけサ。それでもとは言へないじゃアないか。」

「娘が傍に居ましたか。」

「イヤ私が入つたら直ぐ二階へ上つて了つた。」

「おかみさん何と申しました。」

「だから今いつたやうに私が言ふと、顔色を變へて居たが、私ももとは判事の妻です、無理にとは申しません。何卒澤村さんに宜しく仰つて下さいだつて。判事の後家さんとは知らなかつた。君あれはなかく、確固ものだぜ。」

「それから娘を御覽になりましたかお歸りに。」

「イ、ヤ見ない。二階で待つて居たのサ。可哀さうに。」

その後私も二度とおしんには遇ひません。破談後一週間經つて、私は夜そつと下宿屋の前を通りましたら戸が閉まつて、「かしゃ」の札が闇の中を薄く張つてあるのを見ましたばかりです。正直者の仕事の一つがこれです。いづれ其中、外のをもお話しいたしませう。

湯ヶ原より

内山君足下

何故さう急に飛び出したかとの君の質問は御尤である。僕は不幸にして之を君に白狀してしまはなければならぬことに立到つた。然し或はこれが僕の幸であるかも知れない、たゞ僕の今の心は確かに不幸と感じて居るのである、これを幸であつたと知ることが今後のことであらう。しかし將來これを幸であつたと知る時と雖も、たしかに不幸であると感じるに違ひない。僕は知らないで宜い、唯だ感じたくないものだ。

「こゝに一人の少女あり。」小説は何時でもこんな風に初まるもので、批評家は戀の小説にも飽き飽きたとの御註文、然し年若いお互の身に取つては、事の實際が矢張りこんな風に初る。だから致し方がない。僕は批評家の御註文に應ずべく神様が僕及び人類を造つて呉れなかつたことを感謝する。去十三日の夜、僕は獨り机に倚掛つてぼんやり考へて居た。十時を過ぎ家の者は寢てしまひ、外は雨がしとく降つて居る。親も兄弟もない僕の身には、こんな晩は頗る感心しないので、おまけに下宿住、所謂る半夜燈十年事、一時和雨到心頭といふ一件だから堪忍たものでない、まづ僕は

泣きだしさうな顔をして凝然と洋燈の笠を見つめて居たと想像し給へ。

此時フと思ひ出したのはお絹のことである、お絹、お絹、君は未だ此名にはお知己でないだらう。君ばかりでない、僕の朋友の中、何人も未だ此名が如何に僕の心に深い、優しい、穩かな響を傳へるかの消息を知らないのである。『こゝに一人の少女あり、其名を絹といふ』と僕は小説批評家への面當に今一度特筆大書する。

僕は此少女を思ひ出すと共に『戀しい』『見たい』『逢ひたい』の情がむら／＼とこみ上げて來た。

君が何と言はうとも實際さうであつたから仕方がない。此天地間、僕を愛し、又僕が愛する者は唯だ此少女ばかりといふ風な感情が爲て來た。あゝ是れ『浮きたる心』だらうか、何故に自然を愛する心は清く高くして、少女(人間)を戀ふる心は『浮きたる心』『いやらしい心』『不健全なる心』だらうか、僕は一念こゝに及べば世の倫理學者、健全先生、批評家、なんといふ動物を地球外に放逐したくない、西印度の猛烈なる火山よ、何故に爾の熱火を此種の動物の頭上には注がざりしぞ！

僕はお絹が梨をむいて、僕が獨り入つて居る浴室に、そつと持つて來て呉れたことを思ひ、二人で溪流に沿うて散歩したことを思ひ、其優しい言葉を思ひ、其無邪氣な態度を思ひ、其笑顔(かほ)を思ひ、思はず机を打つて、『明日の朝に行く！』と叫んだ。

お絹とは何人ぞ、君驚く勿れ、藝者でも女郎でもない、海老茶式部でも烏田の令嬢でもない、美

人でもない、醜婦でもない、たゞの女である、湯ヶ原の温泉宿中西屋の女中である！今僕の斯う筆を執つて居る家の女中である！田舎の百姓の娘である！小田原は大都會と心得て居る田舎娘！この娘を僕が知つたのは昨年の夏、君も御存知の如く病後、赤十字社の醫者に勧められて二ヶ月間此湯ヶ原に滞在して居た時である。

十四日の朝僕は支度も勿々に宿を飛び出した。銀座で半襟、簪、其他娘が喜びさうな品を買ひ整へて汽車に乗つた。僕は今日まで女を喜ばすべく半襟を買はなかつたが、若し彼の娘に此等の品を與つたら如何に喜ぶだらうと思ふと、僕もうれしくつて堪らなかつた。見榮坊！世には見榮で女に物を與つたり、與らなかつたりする者が澤山ある。僕は心から此貧しい贈物を我愛する田舎娘に呈上する！

夜來の雨はあがつたが、空氣は濕つて、空には雲が漂うて居た。夏の初の旅、僕は何よりも是が好で、今日まで數々此季節に旅行した、然しあゝ何等の幸福ぞ、胸に楽しい、嬉しい空想を懷きながら、今夜は彼の娘に遇はれると思ひながら、今夜は彼の清く澄んだ温泉に入られると思ひながら、此好時節に旅行せんとは。

國府津で下りた時は日光雲間を洩れて、新緑の山も、野も、林も、眼さむるばかり輝いて來た。愉快！電車が景氣よく走り出す、函嶺諸峰は奥ゆかしく、嚴かに、面を壓して近づいて來る！輕い

淡々しい雲が沖なる海の上を漂うて居る、鷗が飛ぶ、浪が碎ける、そら雲が目隠した！薄い影が野の上を海の上を這ふ、忽ち又明るくなる、此時僕は決して自分を不幸の男とは思はなかつた。又決して厭世家たるの権利は無かつた。

小田原へ着いて何時も感ずるのは、自分もどうせ地上に住むならば此處に住みたいといふことである。古い城、高い山、天に連なる大洋、且つ樹木が繁つて居る。洋畫に依つて身を立てやうといふ僕の空想としては此處に永住の家を持ちたいといふのも無理ではなからう。

小田原から先は例の人車鐵道。僕は一時も早く湯ヶ原へ着きたいので好きな小田原に半日を送るほどの樂も捨て、電車から下りて晝飯を終るや直ぐ人車に乗つた。人車へ乗ると最早半分湯ヶ原に着いた氣になつた。此人車鐵道の目的が熱海、伊豆山、湯ヶ原の如き温泉地にあるので、これに乗れば最早大丈夫といふ氣になるのは温泉行の人々の皆な同感であらう。

人車は徐々として小田原の町を離れた。僕は窓から首を出して見て居る。忽ちラツパを勇ましく吹き立て、車は傾斜を飛ばやうに滑る。空は名残なく晴れた。海風は横さまに窓を吹きつける。顧みると町の旅館の旗が竿頭に白く動いて居る。

僕は頭を轉じて行手を見た。すると軌道に沿うて三人、田舎者が小田原の城下へ出るといふ旅装、赤く見えるのは娘の、白く見えるのは老母の、からげた腰も頑丈らしいのは老父さんで、人車の過

ぎゆくのを避ける積りで立つて此方に向いて居る。

『オやお絹！』と思ふ間もなく車は飛ぶ、三人は忽ち窓の下に來た。

『お絹さん！』と僕は思はず手を舉げた。お絹はにつこり笑つて、さつと顔を赤めて、禮をした。人と車との間は見る／＼遠ざかつた。

若し同車の人が無かつたら僕は地段駄を踏んだらう、帽子を投げつけたらう。僕と向き合つて、眞面目な顔して居る役人らしい先生が居るではないか、僕は唯だがつかりして手を拱ぬいて了つた。言はでも知るお絹は最早中西屋に居ないのである、父母の家に歸り、嫁入の仕度に取りかゝつたのである。昨年夏も他の女中から小田原のお婚さんなど廻られて居たのを自分は知つて居る、ああ愈々さうだと思ふと僕は嫌になつてしまつた。一口に言へば、海も山もない、沖の大島、彼れが何だらう。大浪小浪の景色、何だ。今の今まで僕をよるこぼして居た自然は、忽ちの中に何の面白味もなくなつてしまつた。僕とは他人になつてしまつた。

湯ヶ原の温泉は僕になじみの深い處であるから、たとひお絹が居なくても僕に取つて興味のない譯はない、然し既にお絹を知つた後の僕には、お絹の居ないことは寧ろ不愉快の場所となつてしまつたのである。不愉快の人車に揺られて此の淋びしい溪間に送り届けられることは、頗る苦痛であつたが、今更引返へす事も出來ず、其日の午後五時頃、此宿に着いた。突然のことであるから宿の

主人を驚かした。主人は忠實な人であるから、非常に歓迎して呉れた。湯に入つて居ると女中の一人が来て、

『小山さんお氣の毒ですね。』

『何故？』

『お絹さんは最早居ませんよ』と言ひ捨て、ばた／＼と逃げて去つた。哀れなる哉、これが僕の失戀の弔詞である。失戀が聞いてあきれれる。僕は戀して居たのだらうけれども、夢に、實に夢にもお絹をどうしようといふ事はなかつた、お絹も亦た、僕を憎くからず思つて居たらう、決して其以上のことは思はなかつたに違ひない。

處が其夜、女中どもが僕の部屋に集つて、宿の娘も来た。お絹の話が出て、お絹は愈々小田原に嫁にゆくことに定まつた一條を聞かされた時の僕の心持、僕の運命が定つたやうで、今更何とも言へぬ不快でならなかつた。しからば矢張失戀であらう！僕はお絹を自分の物、自分のみを愛すべき人と、何時の間にか思込んで居たのであらう。

土産物は女中や娘に分配してしまつた。彼等は確かに喜んだ、然し僕は嬉しくも何ともない。

翌日は雨、朝からしよ／＼と降つて陰鬱極まる天氣。溪流の水増してザア／＼と騒々しいこと非常。晝飯に宿の娘が給仕に来て、僕の顔を見て笑ふから、僕も笑はざるを得ない。

『貴所はお絹に逢ひたくつて？』

『可笑しい事を言ひますね、昨年あんなに世話になつた人に會ひたいのは當然だらうと思ふ。』

『逢はして上げませうか？』

『難有いね、何分宜しく。』

『明日きつとお絹さん宅へ來ますよ。』

『來たら宜しく被仰つて下さい、』と僕が眞實にしないので娘は黙つて唯だ笑つて居た。お絹は此娘と従姉妹なのである。

午後は降り止んだが晴れさうにもせず雲は地を這ふようにして飛ぶ、狭い溪は益々狭くなつて、僕は牢獄にでも坐つて居る氣。座敷に坐つたまゝ爲る事もなく茫然と外を眺めて居たが、ちらと僕の眼を遮つて直ぐ又隣家の軒先で隠れてしまつた者がある。それがお絹らしい。僕は直ぐ外に出た。石ばかりごろ／＼した往來の淋しさ。僅に十軒ばかりの温泉宿。其外の百姓家とても數へる許り、物を商ふ家も準じて幾軒もない寂寞たる溪間！この溪間が雨雲に閉ざれて見る物悉く光を失つた時の光景を想像し給へ。僕は溪流に沿うて此淋しい往來を當もなく歩いた。流を下つて行くも二三丁、上れば一丁、其中にベンキで塗つた橋がある。其間を如何な心地で僕はぶらついたらう。温泉宿の欄干に倚つて外を眺めて居る人は皆泣き出しさうな顔附をして居る。軒先で子供を負て居る

娘は病人のやうで春の子供はめそくと泣いて居る。陰鬱！屈託！寂寥！そして僕の眼には何處かに悲惨の影さへも見えるのである。

お絹には出逢はなかつた。當り前である。僕は其翌日降り出しさうな空をも恐れず十國峠へと單身宿を出た。宿の者は總がよりて止めたが聞かない、伴を連れて行けと勧めても謝絶。山は雲の中僕は雲に登る積りて遮二無二登つた。

僕は今日まで斯んな凄寥たる光景に出遇つたことはない。足の下から灰色の雲が忽ち現はれ、忽ち消える。草原をわたる風は物すごく鳴つて耳を掠める。雲の絶間から見える者は山又山。天地間僕一人、鳥も鳴かず。僕は暫らく絶頂の石に倚つて居た。この時、戀もなければ失戀もない、たゞ悽愴の感に堪へず、我生の孤獨を泣かざるを得なかつた。

歸路に眞闇に繁つた森の中を通る時、僕は斯んな事を思ひながら歩いた、若し僕が足を踏み滑べらして此溪に落ちる、死んでしまふ、中西屋では僕が歸らぬので大騒ぎを初める、樵夫を僦うて僕を索す、此暗い溪底に僕の死體が横つて居る、東京へ電報を打つ、君か淡路君か飛んで來る、そして僕は焼かれてしまふ。天地間最早小山某といふ晝かきの書生は居なくなるゝと僕は思つた時、思はず足を止めた。頭の上の眞黒に繁つた枝から水がぼた／＼落ちる、墓穴のやうな溪底では水の激して流れる音が悽く響く。僕は身の毛のよだつを感じた。

死人のやうな顔をして僕の歸つて來たのを見て、宿の者は如何なに驚いたらう。其驚よりも僕の驚いたのは此日お絹が來たが、午後又實家へ歸つたとの事である。

其夜から僕は熱が出て今日で三日になるが未だ快然しない。山に登つて風邪を引いたのであらう。君よ、君は今の時文評論家でないから、此三日の間、床の中に呻吟して居た時。考へたことを聞いて呉れるだらう。

戀は力である。人の抵抗することの出來ない力である。此力を認識せず、又此力を壓へ得ると思ふ人は、未だ此力に觸れなかつた人である。其證據には曾て戀の爲めに苦み悶えた人も、時經つて、普通の人となる時は、何故に彼時自分が戀の爲めに斯くまで苦悶したかを、自分で疑ふ者である。則ち彼は戀の力に觸れて居ないからである。同じ人ですら其通り、況んや曾て戀の力に觸れたことのない人が如何して他人の戀の消息が解らう。その樂が解らう、其苦が解らう？

戀に迷ふを笑ふ人は、怪しげな傳説、學説には迷はぬがよい。戀は人の至情である。此至情をあざける人は、百萬年も千萬年も生きるが可い、御氣の毒ながら地球の皮は忽ち諸君を吸ひ込むべく待つて居る、泡のかたまり先生諸君、僕は諸君が此不可思議なる大宇宙を統御して居るやうな顔構をして居るのを見ると冷笑したくなる。僕は諸君が今少しく眞面目に、謙遜に、嚴肅に、此人生と此天地の問題を見て貰ひたいのである。

諸君が戀を笑ふのは、畢竟、人を笑ふのである、人は諸君が思つてより神祕なる動物である。若し人の心に宿る所の戀をすら笑ふべく信ずべからざる者ならば、人生遂に何の價ぞ、人の心ほど虚偽な者は無いではないか。諸君にして若し、月夜笛を聞いて、諸君の心に少しにても『永遠』の倂が映るならば、戀を信ぜよ。若し、諸君にして中江兆民先生と同一種であつて、十八里霧圍氣を振舞はして満足して居るならば、諸君は何の權威あつて、『春短し何に不滅の命ぞと』云々と歌ふ人の自由に干渉し得るぞ。『若い時は二度はない』と稱してあらゆる肉慾を恣まゝにせんとする青年男女の自由に干渉し得るぞ。

内山君足下、先づ此位にして置かう。さて斯の如くに僕は戀其物に隨喜した。これは失戀の賜かも知れない。明後日は僕は歸京する。

小田原を通る時、僕は如何な感があるだらう。

小 山 生

少年の悲哀

少年の歡喜が詩であるならば、少年の悲哀も亦た詩である。自然の心に宿る歡喜にして若し歌ふべくんば、自然の心にさゝやく悲哀も亦た歌ふべきであらう。

兎も角僕は僕の少年の時の悲哀の一ツを語つて見ようと思ふのである。(と一人の男が話しだした。

僕は八歳の時から十五の時迄叔父の家で生育たので、其頃、僕の父母は東京に居られたのである。叔父の家は其土地の豪家で、山林田畑を澤山持つて、家に使ふ男女も常に七八人居たのである。僕は僕の少年の時代を田舎で過ごさして呉れた父母の好意を感謝せざるを得ない若し僕が八歳の時父母と共に東京に出て居たならば、僕の今日は餘程違つて居たいらうと思ふ。少くとも僕の智慧は今よりも進んで居た代りに僕の心はオーズブラス一巻より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出来なかつたいらうと信ずる。

僕は野山を駈け暮らして、我幸福なる七年を送つた。叔父の家は丘の麓に在り、近郊には樹林多く、川あり泉あり池あり、そして程遠からぬ處に瀬戸内々海の入江がある。山にも野にも林にも溪

にも海にも川にも僕は不自由を爲なかつたのである。

處が十二の時と記憶する、徳二郎といふ下男が或日僕に今夜面白い處に伴れてゆくが行かぬかと誘うた。

『何處だ』と僕は訊ねた。

『何處だと聞つしやるな。何處でも可えちや御座んせんか、徳の伴れてゆく處に面白くない處はない』と徳二郎は微笑を帯びて言つた。

此徳二郎といふ男は其頃二十五歳位、屈強な若者で、叔父の家には十一二の年から使はれて居る孤兒である。色の淺黒い、輪郭の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌ふ、飲まざるも亦唄ひながら働くといふ至極元氣の可い男であつた。常も楽しさうに見えるばかりか、心事も至つて正しいので孤兒には珍しいと叔父をはじめ土地の者皆に、感心せられて居たのである。

『然し叔父さんにも叔母さんにも内證ですよ』と言つて、徳二郎は唄ひながら裏山に登つて了つた。頃は夏の最中、月鮮やかなる夜であつた。僕は徳二郎の後について田圃に出で、稻の香高き畦路を走つて川の堤に出た、堤は一段高く。此處に上れば廣々とした野面一面を見渡されるのである。未だ宵ながら月は高く澄んで冴えた光を野にも山にも漲ぎらし、野末には靄かゝりて夢の如く、林は煙をこめて浮ぶが如く、春の低い川楊の葉末に置く露は珠のやうに輝いて居る。小川の末は間も

なく入江、汐け満ちふくらんで居る。船板をつぎ合はして懸けた橋の急に低くなつたやうに見ゆるのは水面の高くなつたので川楊は半ば水に沈んで居る。

堤の上はそよ吹く風あれど、川面は漣だに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡のやう。徳二郎は堤を下り、橋の下に繋いである小舟の纜を解いて、ひらりと乗ると今まで静まりかへつて居た水面が俄に波紋を起す。徳二郎は

『坊様早く早く！』と僕を促しながら櫓を立てた。

僕の飛び乗るが早いか、小舟は入江の方へと下りはじめた。

入江に近づくにつれて川幅次第に廣く、月は川面に其清光を涵し、左右の堤は次第に遠ざかり、願れば川上は既に靄にかくれて、舟は何時しか入江に入つて居るのである。

廣々した湖のやうな此入江を横ぎる舟は僕等の小舟ばかり。徳二郎は平時の朗かな聲に引きかへ此夜は小聲で唄ひながら靜かに櫓を漕いで居る。潮の退ちた時は沼とも思はるゝ入江が高潮と月の光とでまるで様子が變り、僕には平時見慣れた泥臭い入江のやうな氣がしなかつた。南は山影暗く倒に映り北と東の平野は月光蒼茫として何れか陸、何れか水のけぢめさへつかず、小舟は西の方を指して進むのである。

西は入江の口、水狭くして深く、陸迫りて高く、此處を港に錨を下ろす船は數こそ少いが形は大

概は西洋形の帆船船で、其積荷は此濱で出来る食鹽、其外土地の者で朝鮮貿易に従事する者の持船も少からず、内海を往來する和船もあり。兩岸の人家低く高く、山に據り水に臨む其數數百戸。入江の奥より望めば舷燈高くかゝりて星かとばかり、燈影低く映りて金蛇の如く。寂漠たる山色月影の裡に浮んで恰も畫のやうに見えるのである。

舟の進むにつれて此小な港の聲が次第に聞えだした。僕は今此港の光景を詳細しく説くことは出来なうが、其夜僕の眼に映つて今日尙ほあり〜と思ひ浮べることの出来る丈を言ふと、夏の夜の月明らかな晩であるから船の者は甲板に出て家の者は戶外に出て、海にのぞむ窓は悉く開かれ、燈火は風にそよげども水面は油の如く、笛を吹く者あり、歌ふものあり、三絃の音につれて笑ひどよめく聲は水に臨める青樓より起るなど、如何にも楽しさうな花やかな有様であつたことと、然し同時に此華やかな一幅の畫圖を包む處の、寂寥たる山色山影水光を忘るゝことが出来ないのである。

帆前船の影の下を潜り、徳二郎は舟を薄暗い石段の下に着けた。

『お上りなさい』と徳は僕を促した。堤の下で『お乗りなさい』と言つたぎり彼は舟中僕に一語を交へなかつたから、僕は何の爲めに徳二郎が此處に自分を伴うたのか少しも解らない。然し言ふまゝに舟を出た。

纜を繋ぐや徳二郎も續いて石段に上り、先に立つてずん〜登つて行く、其後から僕も無言で從

いて登つた。石段は其幅半間より狭く、兩方は高い壁である。石段を登りつめると或家の中庭らしい處へ出た。四方板塀で圍まれ隅に用水桶が置いてある、板塀の一方は見越に夏蜜柑の木らしく暗く繁つたのが其頂を出して居る。月の光はくつきりと地に印して寂とし人の氣勢もない。徳二郎は一寸立ち止まつて聴耳を立てたやうであつたが、つか〜と右なる方の板塀に近づいて向へ押すと此處は潜内になつて居て黒い戸が音もなく開いた。見ると戸に直ぐ接して梯子段がある。戸が開くと同時に足音靜かに梯子段を下りて來て、

『徳さんかえ？』と顔をのぞいたのは若い女であつた。

『待つたかね？』と徳二郎は女に言つて、更に僕の方を顧み、

『坊様を連れて來たよ』と言ひ足した。

『坊様お上んなさいナ。早くお前さんも上つて下さい、此處でぐづ〜して居ると可けないから』と女は徳二郎を促したので、徳二郎は早くも梯子段を登りはじめ、

『坊様暗う御座いますよ』と言つたぎり、女と共に登つて了つたから僕も爲方なしに其後に從いて暗い狭い急な梯子段を登つた。

何ぞ知らん此家は青樓の一で、今女に導かれて入つた座敷は海に臨んだ一室、欄に凭れば港内は勿論入江の奥、野の末、さては西なる海の涯までも見渡されるのである。然し座敷は六疊敷の疊も

古び、見るからして餘り立派な室ではなかつた。

『坊様、さア此處へ入つしやい』と女は言つて座布團を欄の下に運び、夏橙其他の果物菓子などを僕にすゝめた。そして次の間を開けると酒肴の用意がしてある。それを運び込んで女と徳二郎は差向に坐つた。

徳二郎は平常にない愧しい顔をして居たが、女のさす盃を受けて一呼吸に呑み干し、

『愈々何日と決定つた？』と女の顔を熟と見ながら訊ねた。女は十九か二十の年頃、色青ざめて左も力なげなる様は病人ではないかと僕の疑つた位。

『明日、明後日、明々後日』と女は指を折つて、『明々後日に決定つたの、然しね、私は今になつて又氣が迷つて來たのよ』と言ひつゝ首を垂れて居たが、そつと袖で眼を拭つた様子、其間に徳二郎は手酌で酒をグイ／＼呷つて居た。

『今更如何と言つて爲方がないぢやアないか。』

『それはさうだけれど——考へて見ると死んだはうが何程増しだか知れないと思つて。』

『ハツハツ、、、坊様、此姉様が死ぬと言ひますが如何しましょうか。——オイ／＼約束の坊様を連れて來たのだ、能く見て呉れないか。』

『先刻から見て居るのよ、成程能く似て居ると思つて感心して居るのよ。』と女は言つて笑を含んで

熟と僕の顔を見て居る。

『誰に似て居るのだ。』と僕は驚いて訊ねた。

『私の弟にですよ、坊様を弟に似て居るなどもつた、たいない事だけれど、そら、これを御覧なさい。』と女は帯の間から一枚の寫眞を出して僕に見せた。

『坊様、此姉様が其寫眞を徳に見せましたから、これは宅の坊様と少しも變らんと言ひましたら是非連れて來て呉れと頼みますから今夜坊様を連れて來たのだから、澤山御馳走を爲して貰はんと可けませんぞ。』と徳二郎は言ひつゝも止め度なく飲んで居る。女は僕に摺寄つて、

『サア何でも御馳走しますとも、坊様何が可う御座いますか』と女は優しく言つて莞爾笑つた。

『何にもいらぬ』と僕は言つて横を向いた。

『それぢや舟へ乗りませう、私と舟へ乗りませう、え、さう爲ませう。』と言つて先に立つて出て行くから僕も言ふまゝに女の後に從いて梯子段を下りた、徴二郎は唯だ笑つて見て居るばかり。

先の石段を下りるや若き女は先づ僕を乗らして後、纜を解いてひらりと飛び乗り、さも輕々と櫓を操りだした。少年ながらも僕は此女の舉動に驚いた。

岸を離れて見上げると徳二郎は欄に倚つて見下ろして居た。そして内よりは燈が射し外よりは月の光を受けて彼の姿が明白と見える。

「氣をつけないと危難いぞ！」と、徳二郎は上から言った。

「大丈夫！」と女は下から答へて「直ぐ歸るから待つて居てお呉れ。」

舟は暫時大船小船六七艘の間を縫うて進んで居たが、間もなく廣々とした沖合に出た。月は益々冴えて秋の夜かと思はれるばかり、女は漕手を止めて僕の傍に坐つた。そして月を仰ぎ又四邊を見廻はしながら、

「坊様、あなたはお何歳？」と訊ねた。

「十二。」

「私の弟の寫眞も十二の時のですよ、今は十六……、さうだ十六だけれど十二の時に別れたぎり會はないのだから今でも坊様と同じやうな氣がするのですよ。」と言つて僕の顔を熟と見て居たが忽ち涙ぐんだ。月の光を受けて其顔は猶更蒼ざめて見えた。

「死んだの？」

「否、死んだのなら却つて斷念がつかますが別れた限、如何なつたのか行方が知れないのですよ。両親に早く死別れて唯つた二人の姉弟ですから互に力にして居たのが今では別れ／＼になつて生死さへ分らんやうになりました。それに私も近い中朝鮮に連れて行かれるのだから最早此世で會うことが出来るか出来ないか分かりません。」と言つて涙が頬をつたうて流れるのを拭きもしないで僕の顔を

を見たまゝすゝり泣きに泣いた。

僕は陸の方を見ながら黙つて此話を聞いて居た。家々の燈火は水に映つてきら／＼と揺曳いて居る。櫓の音をゆるやかに軋らせながら大船の傳馬を漕いで行く男は澄んだ聲で船歌を流す。僕は此時少年心にも言ひ知れぬ悲哀を感じた。

忽ち小舟を飛ばして近づいて來た者がある、徳二郎であつた。

「酒を持つて來た！」と徳は大聲で二三間先から言つた。

「嬉しいのねえ、今坊様に弟のことを話して泣いて居たの」と女の言ふ中徳二郎の小舟は傍に來た。

「ハツハツ、大概そんなことだらうと酒を持つて來たのだ、飲みなく／＼私が歌つてやる！」と徳

二郎は既に酔つて居るらしい。女は徳二郎の渡した大コップに満々と酒をついで呼吸もつかずに飲んだ。

「も一ツ」と今度は徳二郎が注でやつたのを女は又もや一呼吸に飲み干して月に向つて酒氣を嘔吐した。

「サアそれで可い、これから私が歌つて聞かせる。」

「イ、エ徳さん、私は思切つて泣きたい、此處なら誰も見て居ないし聞えもしないから泣かして下さいな。思ひ切つて泣かして下さいな。」

「ハツハツ、、、そんなら泣きな、坊様と二人で聞くから」と徳二郎は僕を見て笑った。
 女は突伏して大泣きに泣いた、さすがに聲は立て得ないから脊を波打たして苦しきうであつた。徳二郎は急に眞面目な顔をしてこの有様を見て居たが、忽ち顔を脊向け山の方を見て黙つて居る、僕は暫くして

『徳、最旦歸らう』と言ふや女は急に頭を上げて

『御免なさいよ、眞實に坊様は私の泣くのを見てもつまりません。……私坊様が来て下さつたので弟に會つたやうな氣が致しました。坊様も御達者で早く大きくなつて豪い方になるのですよ』とおろろ、聲で言つて『徳さん眞實に餘り遅くなるとお宅に悪いから早く坊様を連れてお歸りよ、私は今泣いたので昨日からくさくさして居た胸がすいたやうだ。』

女は僕等の舟を送つて三四丁も來たが、徳二郎に叱られて漕ぐ手を止めた、其中に二艘の小舟はだん／＼遠ざかつた。舟の別れんとする時、女は僕に向て何時までも『私の事を忘れんで居て下さいましナ』と繰返して言つた。

其後十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白と憶えて居て忘れようとしても忘るゝことが出來ないのである。今も尙ほ憐れな女の顔が眼のさきにちらつく。そして其夜、淡い霞のやうに僕の心を

包んだ一片の哀情は年と共に濃くなつて、今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさへ堪へ難い、深い、靜かな、やる瀬のない悲哀を覺えるのである。

其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の兒の父親になつて居る。

流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何處の涯に漂泊して其果敢ない生涯を送つて居るやら、それとも既に此世を辭して寧ろ靜肅なる死の國に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らんらしい。

夫 婦

自分の最も親しくする友、坂本熊男から突然次のやうな手紙が来た。其頃自分は鎌倉に居たのである。

『犬養君足下——』

僕はこの頃、言ふに言はれぬ苦を有つて居る。今までこれを君にすら洩さなかつた。實は君を欺いて居たのである。君は度々僕等夫婦の上を尋ねて呉れたが其都度僕は何と答へたゞらう。

平和、此二字！この二字を繰返し君に書き送つた。そして實際は如何であらう。決して平和ではないのである。若し平和と言ふならば、冷やかなる平和である。溪間の湖水の、雪だけの氷水を湛へて一碧鏡の如き平和！僕等夫婦は果してこの如きの平和を望んで行末永き家庭を作つたゞらうか。

今日と雖も若し君以外の方が僕等夫婦の上を聞いたならば、僕は「至極平和で御座りますお蔭さまで」と答へる。昨日も妹が小聲で、

「兄様如何か爲さいましたの。」と聞くから

「イヤ別に如何も爲ないよ、何故。」

「だつて何だか此頃は浮かぬ顔をして居たさるから變だと思つて。それに姉上の様子も妙だし、若しかと思つて。」

「母上も其様ことを言つて居らつしやるかい。」

「はア。」

「だつて別に喧嘩も爲ないし卿の見て居る通りぢやないか。」と僕が言つたので妹も「さうねえ」とのみ深くは訊ねなかつた。然し君、僕等夫婦の心の不安は互の顔や様子に何時となく現はれて居るのである。たゞ僕は此不安をば今や唯だ君にのみ打明ける。

原因は何だ。これ君が第一に問ふ所だらうと信ずる。そして僕は知らないと言へるの外はない。若し原因が解つて居るならば、僕は如何なる障害がらうと、これを排除することに躊躇しない。

僕は僕等夫婦の兼ねて望んで居た如き生活、否、結婚してから四箇月間の生活のやうな生活を續けて行くことの出来る爲めならば、何物をも犠牲にすることを厭はない。

然しながら理由の知れぬ不安を如何しよう。何故吾等夫婦の平和は氷結して了つたか、其原因の知れないのに如何することが出来よう。

二三日前のことであつた、僕は庭の四阿のベンチに腰をかけて林に残る夕日影を眺めて居ると、ソツと傍に腰をかけたものがある。振向くと妻であつた。

「何を見て居らつしやるの。」と聞くから、

「たい茫乎して居たのだ。」

「佳い景色ですことねえ。」

「あア佳い景色だねえ。」

「あの煌々と光つて居るのは何んでしよう、そら向の森の中で。」

「何處かのガラス窓でも光つて居るのだらうよ。」

「さうでしようかねえ。」

僕は黙つて居ると妻も黙つて了つた。僕はまじく前の林を見て居る。妻は遠方の森の方を見て居る。空氣は澄み渡つて、日は西に傾いて、天外遠く低く白い雲が流れて居る。

「愈々秋になつたねえ。」

「さうで御座いますねえ。」

と答へた妻の聲は如何にも心細さうに僕に聞えた。そして二人は又黙言つて了つた。この時僕は言ひ知れぬ悲哀が胸を衝いて起り、若し傍に妻が居なかつたら聲を呑んで圓卓に顔を押しあて、泣

いたいらうと思ふ。

「貴様このごろ大變氣を痛めてお居てなさるやうですが如何か爲さいましたのですか。」と妻は僕の顔を見て訊ねた。

「別に如何も爲ないよ。顔色でも悪いかね。」と何氣なく言つた、則ち妻を欺いたのである。

「お顔の色は格別平常と變りませんが……」

「卿こそ如何か爲やしないかね。」

「別に如何も致しませんよ。」と妻は何氣なく答へた、則ち僕を欺むいたのであらう。僕は妻も亦た僕と同じやうな不安の念に胸を痛めて居ることを看破いて居るのである。恐らく妻もさうであらう。果して然らば互に欺いて而も互に欺かれたことを知つて居るのである。

女中が来て食事を知らしたから二人は其儘急いで家に入つた。則ち互に此問題に觸れたくないことが解る。少なくとも二人の間で公然と此問題を研究することを懼れて居ることが解る。

全く僕は懼れて居るのである。僕は如何にしても此僕の苦みを妻に知らしたくない、然し妻が既に僕の苦しんで居ることを看破して居るならば、せめて此ことをお互の口に出さない前に、此苦惱から免れたいのである、お互の胸より不安の念を取除きたいのである。以前の楽しい温かい交情に還りたいのである。

立二人の間には確に溝が出来た。げに傷ましき事實。

互の愛が薄らいだのであらうか。決して然でない、斷じて然でない！ 其證據には互に此溝を埋めて了はうと願うて居るのである。

何故此溝が出来たか、不安であるから溝が出来たのか、溝が出来たから不安であるのか、何が何であるのか僕には一切解らなくなつて了つた。

僕は初め冷やかなる平和と言つたが寧ろ熱心ある不安と言つたはうが適切である。

時々寒風一陣、頭上を吹き過ぎるやうな心地がする、これ失望に襲はれた時である。時々蒸すが如き熱の全身に漲ることがある。これ吾等夫婦を此現狀から救ひ出さんと悶く時である。

今は君の深き友情と智慧とに任すの外はない。』

二

自分は此手紙を読んで大に驚いたが然し又頗る要領を得なかつたのである。

互の不安とは何ぞや。其原因が解らないとは如何だらう。何故あゝまでして結婚して、あんなに交情の可かつた夫婦が斯ういふことになつたものか、自分にも此手紙だけでは何が何やら一切解らなかつたのである。

坂本熊雄が最初若代千代子と相知つたのは七年前、坂本が二十四、千代子が十八なので、相知る

と間もなく二人は戀に陥つたのである。

春の末であつた、或日坂本が高等商業學校の制服のまゝで突然自分の下宿を訪ねて来て、

『これから大森に往かないか。』と誘ふから、

『何を爲に往くのだ。』

『僕の下の級に若代といふ男が居る。實は一週間ほど前に運動場で懇意になつたのだが面白い奴で僕に頻りに遊びに來いといふから往つて見ようと思ふんだ、一緒に往つて見よう、何でも八景園の裏あたりで大變庭が廣い家だつて自慢して居たつて。』

春の日曜日を下宿の二階で煤ぶるでもあるまいと自分は同意して二人直ちに大森に出かけた。

若代の家は成程庭が廣くつて小高き岡あり林あり芝生あり、所謂庭といふ園藝の方からいふと決して人工の行届いた立派なものではないが、自然の風致は十分に具へて居るのである。若代はこやかに自分達を迎へて、座敷には上げず直に庭へと案内し岡の上に立つて居る吾妻屋に導いた。若代は坂本より一歳若い青年で、脊のすらりと高い色の白い柔らかな容貌の、何となく小兒らしい

快活な男であつた。

父は地方長官を勤めて居た人であるが清廉な人物で又理財に頓着しなかつた爲めに妻と二人の子に遺した財産としては以前から持つて居た公債證書と鐵道株を少しばかり、其外には此大森の屋敷だ

けて、退隠後三年ばかり大森に住んで死去したのである。

それで若代は母と妹と三人で此屋敷に住み、此處から神田の高等商業學校に通學して銀行の方を學んで居たが其成績は可もなく不可もなく、たゞ性質の鷹揚で、温順で、愛嬌があつた爲めに教師からも生徒仲間からも可愛がられて居たのである。

我等は吾妻屋のベンチに腰かけて勝手な事を饒舌り散らして居ると一人の十七八の品のよい少女が葡萄酒と果物を運んで來た。

『ヤ卿はなかく、氣がきいて居るね』と若代は例のにこやかに言つて、更に我等に向ひ『外の千代です。この方が坂本さん、それから犬養さん』と手軽に紹介した。

千代子は兄は似て色の白い、少し丸顔の、眼のすゞしい少女で、其舉動も沈重で居て無理のないスラリと爲た氣味が有つて、總てが兄に似て居たが、唯だ女だけに何處か大人びた所があつた。

間もなく正午になつて妹は又もや使者。

『兄上、お食事御座います。』

『此處で食るといふ譯にいかぬか知らん。』

『お二階でお支度が出來て居ますから。』

『左様か、可からう。』

其處で我等は家に導かれた。見たところ廣さうにもないが小綺麗で別荘風に出來て居て、二階からは東京灣を見渡し眺望は無類であつた。

食事が済むと我等は直ぐ散歩に出かけ、羽根田に出て川崎に廻り、川崎からは汽車で坂本と自分分は新橋まで、若代は大森で下りて了つた。

其後二三度坂本は自分を誘ひ出したが、千代子は何時もちや用事の時に現はれるばかり、決して談話の仲間には加はらず、又母なる人は挨拶を爲るばかりであつた。

或日、日の暮が、りに坂本がやつて來て、

『今日大森へ往つた。』

『如何ぢや、面白かつたか。』

『千代子女史のヴァイオリンといふのを聴かされちやつた。』

『公式で待遇したね、上手かね。』

『上手いのだらうね僕には解らんが、何にしる上手さうぢやつた。』

『君は軍歌でもやれば可かつた。』

『劍舞を行つてやつた。』

坂本の大森通は益々繁くなつて、自分と同道するのは五度に一度ぐらゐとなり、學校が退けると

若代と一緒に居る夜、十時ごろまで遊ぶこともあつたらしい。

其中自分は坂本と千代子の關係の尋常ならぬに氣がついたから或時、

『大分御熱心のやうだね。』

『何が。』

『大森通ひが。』

『君は感づいたね。』

『何を。』

『何をつて、君妙なことをいふぢやないか。』と坂本は、どきまぎするので自分は可笑しく、

『ヴァイオリンが餘程お氣に入つたと見えるね。』

『悪からうか。』

『善悪は別問題、兎に角、事實だらう。』

『事實だ、眞面目なる事實だ！』

『而して楽しい事實だ。羨やむべき事實。』

『秘密だよ。』

坂本は極めて率直な男で、堅造であるが、裏に燃ゆるばかりの熱情を持つて居て、思ひこむと容易

に後へ退かない、自分とは同郷、中學校時代から親友で、自分はよく彼の性質を知つて居るから、此戀の成行を注意しない譯に行かなかつたのである。

『明後日の日曜には僕も大森に行つて見よう、無論君は行くだらう。』

『ああ行く。一緒に行かう。』

夏近く、學校は試験前で吾等は随分忙がしい時であつたが二人は朝から宿を出て若代を訪うた。

二階で雑談を爲て居ると何時の間にか坂本は下に下りて了つた。暫時して若代と自分は庭へ出て吾

妻屋に行つて見たが、坂本の姿は見えない。すると若代が、

『君、君。』と小さな聲で自分呼んで林の方を指すから自分は氣をつけて其方を見ると坂本は制服

の上着を脱いで傍の枝に掛け、白シャツばかりになつて芝生の上に臥ころんで靴の爪先で土を蹴り

ながら何か讀んで居るらしい、前に洋綴の本が置いてあつて彼は一心に其を見て居る、千代子は其

横に坐つて編物を爲て居るやうであるが顔は木の枝にさへられて能く見えない。涼しい綠蔭は二

人の上を覆うて居る。

『甘くやつて居るよ！』と若代は言つて首をちよつと縮めて莞爾した。

『呼んで見ようか。』と自分が言ふや若代は手を振つて、

『止し給へ、止し給へ』と止め『君は如何思ふ、彼の二人を。』

『お楽しみだと思ふ。』

『妹も全然夢中だよ。可いサ僕は知らん顔をして居るんだ。』

『然し母上は何と思つて居なさる。』

『知らんよ、母は母、僕は僕だから。』

『然し知つて居なさるだらう。』

『どうだか。母は僕に何とも言はないから。』

『坂本は母上の氣に入つて居るか知ら。』

『母は決して人の噂を爲人^せで、おまけに無口だから解らない。然し坂本が來ると何時でも御馳走するよ。』

自分は話を轉じた。暫くすると坂本が一人ひよろりと吾妻屋にやつて來て、

『ビールが一杯飲みたい!』

『贅澤を言つてる!』と思はず自分が言ふと、

『飲さうか。』と言つて若代は家の方へ走つて行つた。

『何を讀んで居たのだ。』と自分は故意と眞面目で聞いた。坂本は澄したもので、

『銀行論』

『馬鹿を言へ!』

『じゃア見給へ!』とポケットから取出したのは成程教科書であつた。『君は見て居たね。』

『若代が見つけたのだよ。』

『何とか言つてたか。』

『笑つて居た。』

といふ中若代は自身でビールの壺を提げ女中にコップなどを持たして來たので、二人は此談話を止めて飲はじめた。饒舌るのは若代と自分ばかり、坂本は黙つて遠く郊外の樹林を眺め、自分達の笑ふ時彼も笑つたが、恐らく將來の楽しい事ばかり考へて居たのであらう、それとも現今の樂みに酔うて無念無想の境に其心を溶して居たのだらう。

試験は無事に済み坂本は優等で卒業した。某銀行に招かれ直に上海の支店詰を命ぜられたので、一寸郷するや間もなく上京して、愈々渡航といふ前の晩、自分はそれとなく千代子のことを聞く、彼は眞面目で下を見て居たが其儘談話を轉じて了つたので自分も少し意外では有つたが別に何も言はなかつた。さうすると神戸の消印で次のやうな手紙を寄こしたのである。

『僕は千代子を愛し、千代子も亦僕を愛した。然し決して一人は口に出して將來を約束することは爲なかつた。僕は今度上海に行くに就て、君に相談して公然約束を申込んで置かうかと思つた。』

けれども僕は非常に考へて見合すことにしたといふ理由は、僕が今の若さに妻を持つことは到底出来ないし、又こゝ四五年度の後の約束を爲ることは千代子嬢のために甚だ不利であると考へたからである。十八といへば既に婚期、若し強ひて公然の約束をするならば徒らに彼女を束縛することになると考へたからである。』

自分はこの手紙を見て坂本の處置に至極感心し、同時に彼が内心の苦惱を思ひやつて少なからず同情を表したのである。坂本の出立た後で自分は時々若代を尋ねたが千代子は見た處別に變つた處もないやうに思はれた。若代も亦平氣な風で、坂本とは絶えず手紙を取りかはして居たらしい。

翌年若代も學校を卒業して、直に大阪の或會社に招かれたから、大森の家は他人に貸して、母と妹を連れて赴任して了つた。

五年の歲月は忽ちゆき、其間坂本熊男は一度も歸國せず、自分も亦大阪なる若代には一度も會はず、三人の間はたゞ手紙の往復に過ぎなかつた。

六年目に坂本は東京の本店詰となり、東京に歸るや彼は郷里の父母及び妹を迎へ取つて本郷に家を持ち、自分は小石川に居たので二人の往來は又もや書生時代と變らなくなつた。自分は其頃すでに妻帯して居たが或日のこと、坂本がやつて來て、

『妻を迎へようと思ふが如何だらう。』と突然言ひだしたから自分は、

『其事なら僕も言はうと思つて居たのだ、候補者があるかね。』

『千代子嬢サ』

と答へたので自分は驚き且つ喜んだのである。

『大替成！直ぐ申込み給へ。』

『僕は直接に千代子さんの意中を聞いて見る。』

『その必要があるだらうか。』

『あるとも。僕は別れてから後、直接には手紙を出さず、千代子さんからも直接には何にも言つてよこさなかつたのだから、今となつては一應本人の心を僕から確める必要があると思ふ。』

千代子は其時まで尙ほ兄の許に居たのである。二十四になるまで結婚しないで居た理由は何であるか、其邊は能く解らなかつたので、これまで何人からも結婚の申込を受けなかつた筈は無く、受けても謝絶して居たのかも知れない、若し然らうならば何故謝絶して居たのか、斯う考へて來ると成程坂本から直接に本人の意中を確めて見る必要があつたのである。

坂本は直ぐ手紙を出したらしく、四五日經つと彼は自分の家へ飛んでやつて來て、

『まア此手紙を見て呉れ給へ！』

と投げ出したのは千代子よりの返事である、其文句の意味は斯うであつた、『お言葉は難有存じま

す。されど早樂しき夢はさめ、花は散りたる後、小妹の心には少しの温氣無之、いつその事獨身と決て居るのであります。幸と兄は御知の氣象ゆる小妹の決心の程を探らうともせず、母は承知し居れどこれ亦強ひて小妹の心を動かさうともせず、一家は至極無事平穩に其日を送り居るので御座ります。此段何卒惡からず思召して、兄と一様、行末永き友としてお交際ひくだされまし」としてある。自分は讀み了つて、

『君は此手紙を如何思ふのだ。』

『如何つて、まるで夢のやうだ。』

『可憐さうにお千代さんは絶望して居るのだぜ。』

『だから僕は如何して可いか解らなくなつて了つた。』

『君は未だお千代さんを愛して居るかね。』

『無論のことだ、だから申込んだのだ。』

『大阪へ行つて來給へ！』

『さうだ！』

彼は其夜の汽車で大阪に出發た。三日目に寄した手紙に——『案ずるより産むが易いとは此事だ！初の中は千代子嬢も兎や角う言つて居たが、僕はとうく口説落した。局面がガラリ一變すると千

代子嬢は依然たる千代子嬢。僕等は直に大森時代に立還つて了つた。

大森時代に立還つたといふだけで僕等の幸福を想像して呉れ給へ、多くは言はない。

母御も若代も喜んで僕の申込を承諾した。さて結婚は何時に爲たものか、これが今の問題である。』

然るに又もや意外の障害が起つたといふのは坂本の父が病氣になつたことで、其爲め結婚の日を延ばし病氣全快の上と決定して居た處が不幸にも父は遂に伴の花嫁を見ないで此世を辭して了ひ、坂本は若代と同様、母と妹と三人になつて了つて。

亡父の百ケ日が済むと、其歳が暮れ二月中旬になつて漸く結婚の式を擧げ、七年前の戀が遂に目出度く成就したものである。若代は祝意を表する爲め大森の家、屋敷を新婚夫婦に贈り、新婚夫婦は其最も樂しかりし昔の夢を現となして記念深き家に住むこととなつたのは半年前のこと。

三

であるから自分は坂本の手紙を讀んで驚きもし、怪しみもし、遂に要領を得なかつたのは當然のことである。其處で自分は坂本に次のやうな返事を出した。

『當局者の君にすら解らない原因は容易に僕に知れる理由がない。原因が知れなければ策の施しよ

然し原因のない現象は有るべき筈が無い。君は能く心を平かにしてこれを研究しなければならぬ。兎も角、三四日の中に君の家を訪ねて僕は二三日滞留することに爲る。其上で又相談の爲やうも有らうと思ふ。何にしる痛ましき事實。意外千萬の事實。これを若代にでも聞かしたら如何に無頓着の彼でも喫驚して如何に心配するであらう。

先づ今まで通り何人にも祕密にして置き給へ。』

右の手紙を出すと共に引きちがへて今度は千代子からの手紙が届いた。

『不快なることを貴所のお耳に入れることゝ相成りいかにも残念には候へども一應おきゝ取り下され度候。我等夫婦のこのごろの有様は其以前と打つてかはり、二人の間何となう日々に隔たりゆくを覚え候。これを思へば實に胸も張りさくばかりに候。

さればとて夫の愛の冷めしにはあらで拙なき小妹を思ひくるゝこと益々深く候。小妹とても其通り夫を愛する心は少しも昔に變らず候。斯くてもなほ我等夫婦の間の昔の如くならず成行は情なき次第に候はずや。

今のまゝにて押し進まば、二人の仲は如何になりゆくべき、このことを思ひて昨夜もよもすがら泣き明し候。

所天もいたく心を惱まし居候やうなれど、打ち明けては何も申さず、私も亦所天の前にては、力

めて心楽しく氣を引立て居候。

されど之にてはとてふ二人とも長くは忍び得まじく候。思へば七年前の夏こそ戀しく候。』とあり、何分宜しく頼むから何とか工夫をして呉れるとの依頼である。

自分は此手紙を見て愈々容易ならぬことに思ひ、いろ／＼考へたが、考へれば考へる程解らなくなつて来る。兎も角一日も早く大森に行つて實際の様子を見るより外差當つて手段もないと決心し、爲かゝつて居た調査物を大急で片着けて明日は朝早く出立うと準備して居た晩、突然又坂本から手紙が来た。

『お手紙雖有拜見した。

成程お言葉の如く、當局者の僕等夫婦にすら解らない原因が君に判定の出来る理由はない。然も君に向つて救助を求めたのは僕の愚であつた。たゞ情の窮する處、遂に君に泣きついたのは許して呉れ給へ。

お言葉に従つて僕は此頃頻りにいらだつ我心を壓へ、とくと考へて見た。昨日の晩、夕闇静かに庭の面に下りしころ、僕はそつと我部屋を脱け出て庭に出て暫時林の間をぶら／＼行きそれから例の吾妻屋に行つた。

あゝ秋の夕暮の静けさ！月は既に林の上に出て其薄い光を放ち、村々は煙り、森は浮び、大空は

澄み渡つて軽く夕づゝを支へて居る。僕は腰かけたまゝで物思ひに沈んで居ると端なく思ひ起したのは七年前の樂しかつた時である。

あの時分にはお互に未だ若かつた。今とても若い。然し今の若さと彼の時分とは文學者の口調を使ふやうだが詩と散文との相違がある。あの時分は何事も自由に快活に大膽で、而も神韻を帯びて居たのが、今は如何だらう。今の事は多く言ふを要しない。

然しこれが自然の成行とならば致し方もないことで、たゞ人性のしかく造られて居る者とあきらめるの外はない。可しい、可しい、どうしても宜しい！

可しくないのは僕等の上の成行である！僕は夫れからそれへと、昔のことを想ひだすとたまらなくなつた。君忍んで聞いて呉れ給へ、斯ういふことがあつた。……イヤ書くまい、書いた處で爲かたがない。恰度音楽を聞いた人が聞かない人に向つて、あゝであつた斯うであつたと話すと同じことで、とても他の者に自分の深い感情の曲折を傳へ得る者ではない。しかし僕は曾て有りしことどもを想ひ起し、天より吹き落して我が胸に傳へた戀の譜をたどるに従つて、其時の様がありくと眼の先に現はれ、日は光り木の葉は煌めき、なまぬるき風は草の香をこめて面をかすめる。……ああ彼の時、此時、千代子も僕もどんなに樂しかつたらう。

卒然今に還つて、今の二人の上を思ふと同時に僕は身ぶるひをして立つた。

「どうしよう！如何したら可からう。」と思はず口に出すと、啜泣の聲が耳に入つた、驚いて四邊を見廻はすと、妻である！千代子である！何時の間に来たのか、薄暗い吾妻屋の柱に倚つて顔を覆うて居た。

「オイ卿如何したのだ。」と僕は驚いて近よつて訊ねた。妻は一語を發しないで益々泣く。

「エ、如何したのだ、如何したのだ。」と僕はいよゝ急込で訊ねたが返事を爲さない。

何で返事が出来よう、千代子も亦今の二人が上を泣くのである、君に、かゝる慘澹たる光景が又と有らうか。あゝ之が二人の終か知らんと思つた時は僕の胸は張りさくばかりであつた。

「あの時は樂しう御座いましたねえ」と千代子は突然顔をあげて、舊歡の悲しみを一語にふくめて言つた。

「さうだ！私も今昔のことを想出して居た處だ。卿、何卒今も彼時のやうに爲たいものだね。」

「眞實にさうで御座いますよ。」

「卿だつて私だつて今も彼時と少しも變らず斯うやつて思合つて居るのだから決して彼時のやうな樂しい心持で暮せない譯はないよ。」

絶望の裏は希望である。僕はこれより先の二人の會話を多く言を須ひないと思ふ。

千代子語り僕語るうちに、二人の心の不思議なる重荷はだん／＼と輕くなつて来て、月の光の牙

ゆると共に二人の心は冴え、喜の餘り二人は相擁して泣いた。

そして今となりては何故二人が斯くまでに心を痛めたのか解らないのである。風の吹き廻して月の光を覆うた雲が亦天風に由つて吹き拂はれたと言つて可からう。

明月に乗じて二人は楽しく林の間を散歩し、散歩しながらも七年前の昔を語りつ。

「此處でしたよ所天が土龍を捕へるつてシャツをまくりあげて、棒で穴をお掘りになつたのね。」

「あの時の土龍が未だ生きて居るだらうか。」

「最早死んじまひましたワ。」

「イヤ未だ生きて居て、又彼の亂暴人が來たつて驚いてるだらうよ。」

月影がちら／＼と木の間を洩れて下草に置いた露がきらめく。林の奥はほの暗く森として居る。

「久しぶりで歌ひましようか唱歌を。」

「イヤそれよりは久しぶりでヴァイオリンを聞きたい。」

「さう爲ませう。」

其處で二人は内に入つた。千代子は一曲を弾いて「これは所天が初めて單獨で遊びにおいでになつた時弾いた曲ですよ。」

さう聞いて僕は繰返して二度も三度も弾いて貰つた。

さてこれで澤山だらう、いかに忍耐強き君も、此以上甘つたるい處を聞かれるのは辛からうと信ずる。」

四

信ずるも無いもんだと自分は以上の手紙を読み了つて思はず呟やいた。

然し友の上の傷しい話に眉を擧めて同情を表するよりも、甘たるい話を聞かされて笑つて呟やくはうがお互に如何に幸かも知れない。自分も先づこれならば安心と、翌日の訪問を見合して次のやうな手紙を出した。

『浮雲一過して何よりの事。實は明日お訪ね致す積りで居たが、お手紙の様子では別に事情視察の必要もあるまいと思つて止めた。』

僕も信ずる、土龍は定めし驚いたらう。お二人の談話を聞かされて。

いづれ其内僕も驚かされに行く。其時の御馳走をお二人で今から相談熟議して置いて貰ひたいものだ。』

自分は引續いて他の調査に取かゝり二週間て其を終へ、直ぐ又要務で關西に旅行し、序に若代を訪ねた。相變らずの好人物、二人は面白く飲んだが自分は無論坂本夫婦の上にあつたことは話さな

い。たゞ益々仲が可さうだとのみ傳へると。

『ちよい／＼喧嘩でも爲ると可いんだ、さうすると面白いんだ。』

『とんだ兄貴だ、彌次馬兄貴だ。』

『何に僕も女房を持つたら一月に一度位はわざと喧嘩を爲てやるんだ。僕の妹も坂本もイヤに戀がつて居るだらうと思ふと可笑くつて堪らない。』と言つて若代は更に『まあ可いサ、お日出度いサ、陰ながら祝杯でも舉げてやらう。』と杯を差上げて飲み干し、例の優しい顔に罪のない笑を湛へた。

關西の用務は一週間で終り自分は鎌倉に歸るや、一日置いて大森を訪うた。坂本夫婦の様子は別にこれぞといふ變つた處も見出さなかつたが、きりとて甘つたるい處も見せられず。食事中の雑談も普通の世間話か大阪の若代の事などで、先日來の問題に就ては自分も口を開かず、夫婦も避けて居るやうであつた。其避けて居る中にどうも多少の霧が、かゝつて居るやうに思はれて、自分はやゝ意外の感があつたのである。食事を終るや坂本と自分は庭に出て歩きながら、

『どうだね其後の経過は。』と自分は遂に口をきつた。

『御覽の通りだ。不思議だらう。』

『別に變りは無いぢやないか。』

『さうサ無いと言へば無し、有ると言へば有る。この前の初は斯な風であつた。』

『だつて先達の手紙ぢやアだいぶお安くない處を聞かされたが。』

『イヤ實に恥入る、あのことなら言はないで置いて呉れ給へ。』と坂本は下を向いたまゝ言ふ。

『妙だな、不思議だな。』

『僕は浮雲一過したやうに言つたが、ある時はどうもさうで無いらしい、僕等の見たのはたゞ雲の絶え間の月であつたのだ。』

『これは驚いた。それぢやア何か深い原因が有りは爲ないかね、君の思ひもつかん處に。』

『或は然らんだ。しかし君、今度の傾向は先日より少し違ふやうだ、つまり問題は二人の心持にあるのだ。その心持が二人にも少し先のとほ變つて居る。』

『どんな風に。』

『それがちよいと言葉に言ひ現はし難いがね。』

『兎も角善い方に變つて居るのか悪いほうか。』

『善くも悪くもない。見やうに依つて何とでも言へるがね。實は僕この頃、或る小説を読んだのだ、日本のだよ、別に大したことも書いて無かつたが、自分でいろ／＼と思屈して居ると人の立話すら胸に中ることがあるやうに、其小説の中にちよつとした文句から色々僕に考がさしたのだ。やゝ發明する處があるのだがね……』

『如何いふのだ。』

『イヤ今はいふまい、もう少し考へさし給へ、いよく斯うと僕が斷案を下したら例のやうに詳しく書いて送るから見て呉れ給へ。』と靜かに言つて莞爾笑つた。

『よからう。書いて送り給へ、それに就いて僕も所感を言はうから。つまりは、原因が解つたと言ふんだらうね。』

『まア然らだ』と言つた彼の言葉は信ずる所あるらしかつた。其夜は一泊して遅くまで笑ひ興じて翌日自分は鎌倉に歸つた。

五

一週間目であつた、坂本から手紙の來たのは――

『犬養君足下

千代子も僕も自分と自分を知らなかつたのである。此以前君に送つた手紙を今一度見てくれ給へ。

あの時僕は何と書いた。僕は千代子に向つて今も昔とお互の心は變らないから今を昔に爲る事の出來ない筈はないと言つたと書いてあるだらう。思へば我等は全く自ら知らなかつたのである。

總ての原因はこゝに在る。僕等は自から求めて苦しんだのである。

十八の少女と二十四歳の青年と、燃ゆるばかりの戀に身も魂も打こんだ時と、爾來七星霜、それがお互に昔と同じといふことが如何して言へやうか。

僕は結婚するとき七年前の戀を戀して居たのである。

千代子とても同じこと、一度は僕を怨みもしたらう、失望も爲たらう、然し矢張それは戀の作用である、だから愈々僕と結婚する時はこれ又昔の戀を戀して居たのである。

戀して直ぐ結婚してすら戀其物は持續しないのが常なるを、何で七年前の戀を戀して結婚した我等が、結婚後に於て戀せし昔を今に爲ることが出來よう。

而も我等は結婚の當座、たゞ夫れ結婚の樂しさに、戀そのものゝ夢を再演したと誤認し、其夢の永久なれかしと念じたのである。結婚の當座の酒はさめて、戀を戀する切なる情は失せざるが爲めに、二十五歳の妻と、三十一歳の夫は何となく物足りなく感じて來たのである。

僕は先の手紙に、昔の若さは詩で、今の若さは散文であると書いたが、何故彼の時、昔の戀は詩で、今の夫婦は散文であると發明することが出來なかつたらう。

青春の夢年と共にさめゆくが自然の成行ならば、戀も亦燃えたる火の其と同じく必ず消え失する時があるであらう。これ悲むべきことに相違ない、然し人性は矢張さういふ風に出來て居るならば致方もないのである。たゞ此處に人情の盡きざる火ありて永久に人の胸中に燃えて居る。詩にも散

文にも詩想は宿る如くに、夫婦には夫婦の情が宿るべきである。何も強ひて戀の音響が何時までも二人の心に其微妙の樂を奏で、居なければならぬことはない。僕は信ずる。

十年ぶりに小兒の時の友達に出會つた人がある、久しぶりだから二人は徹宵其の昔を語り、語つて居る中は、二人とも小兒の時の心持になつて、或は其昔流行つた歌の片言雜に記憶えて居たのを今更想ひ出して聲を合せて、杯をあげて唄つたかも知れない。然し二人は遂に「あゝ彼時はお互に面白かつた」と言ふに過ぎなからう。且つ彼等は其後昔の如くに相交はつて、共に楽しく流行歌を唄つて同じ工場に働いて行き得るや否やは別問題であらう。

幸に僕等夫婦は夫婦として缺くる處なく、相信じ相愛して居るのであるから、其詩たるを求めずして散文たるに満足し、散文の中に詩をもとめなば、これより幸福なことではないのである。

先夜、僕等夫婦が吾妻屋で相擁して泣いたり、林を歩いて昔を語つたり、ヴァイオリンを弾いて昔の譜を繰返したりした、あれは要するに狂花に過ぎなかつたので、其を無上に喜こんだのは愚の至りであつた。

今こそ初めて浮雲一過した、といふと君は又かといふかも知れないが、以上の發明は畢竟普通のこととて、何でもないこととて、人情の老功者に聞かせば一笑に附するだけのことであらうが、僕等夫婦に取つては非常な發明である。僕等の身に取つては實に浮雲一過したと云つて可からうと思ふ。

若し僕等夫婦と雖も、これまでも不安のまゝで、物足りないまゝで過ぎ行くなれば、遂には知らず識らず世間並の夫婦となつて、別に離婚もせず喧嘩もせず、夫婦は夫婦らしく面白可笑しく暮すやうになつたであらう。然し其故を以て僕の以上の發明の利益を無視することは出来ない、ぐづくで泣き寝入ると、さてはと膝を拍つて悟るのは、人の意力を用ゐる上に於て大變な相違があると思ふ。消極的と積極的との相違があると思ふ。

僕は常に希ふ、人は何事にまれ常に積極的に意力、智力、及び情熱を用ゐて一生を送りたいと。今一度言ふ、浮雲一過した、否な僕は雲を追拂つてしまつた。愉快で堪らない。』

此手紙に對する自分の返事は頗る簡單で『當局者の發明は假令其事が如何に小さいことであらうが、大なる成功である、情の世界に於て常に自から發明して行くといふことは智力の勝利である。其發明が美しく發展するといふことは意力の勝利である。僕は君の如き友を有することを誇る』といふだけであつた。

七

夫

秋の末冬の初、大阪から若代が上京して大森に三四日滞在したので、自分も妻を伴れて大森を訪うた。若代の用向の一には、坂本の妹を同僚の一人に世話する相談もあつたのである。相談は首尾よ

く收つたらしい。

あゝ、楽しき集合よ！殊に若代の一名加はると我等の圓居は別様の光を添へて来る。彼の性情は酸味苦味がない、彼は戦闘の人でない代に、戦闘ふ必要のない人である。自分は若代の顔を見て、其談話を聞いて、其の無限の愛嬌に對して、何時も思ふ、斯ういふ人が若し社會に一人も居なかつたら、さぞ世の中がぎくしゃくして住み心地の悪いことであらうと。人を人生必要の器具にたとへたら彼は樂器である。

さなきだに楽しい筈の集合に此人が加はつたので、我等は如何なに愉快に此一日を楽しんだらう。

夜食前一同は庭に出て且つ笑ひ且つ語り、林に入り、落葉を踏み、縦横になつて居る小路を各自に歩いて居ると、坂本夫人は自分の妻と隣の路を歩いて居たが、突然自分達の方を向いて、

『所天真實に未だ土龍が生きて居るでせうかね。』と言つたので坂本は自分をちよつと顧みて笑ひながら、

『未だ卿あんなことを言つて居る、大變土龍が氣になると見えるね。』

『だつて可笑しいんですもの、所天の掘つた穴がちゃんを残つて居ますから。』

『何だ何だ、其の土龍といふのは。』と若代が振りかへつて訊くから、自分が其由來を手短に話すと、

『何のことだ其土龍なら三年前に死んで了つて今は子息の代になつて居る。』

坂本は『子息と言へば僕等もそろゝ小兒があつて可い時分だね、ね君。』と自分を顧みた。自分は笑つて答へなかつたが腹の中で、『聯想まで違つて來たわい。』

夜食が済むや、坂本と若代、自分と三人で久しぶりに海岸の方へ散歩に出た。

夕和の海暮れんとして沖の白帆は朦朧と其影を倒映し、岸に沿うた家々には既に灯を點けて居る。

夕煙地を這ひ軒を罩め、小兒の群は往來を駈け廻つて居た。

すると往來から横に入つた路次で、突然けたまほしい人聲がして、小兒が二三人駈け込んだ。何

事かと路次の口まで行いて見ると、低い長屋が四五軒並んで居て、其一軒の前に幾人かの男女が立つて居る。

『ヤイ殺すなら殺せ、サブ殺せ。てめえのやうな者と一緒になつて居るとナ、終果にはどんな目に

遇しやあがるか知れたものぢや無い。』と叫ぶのは女の聲である、叫ぶ中にも人の寛める氣勢がする。

『何だ此死ぞこなひめ、大きな口をきゝやアがんな、心中の爲ぞこなひめ、人殺しめ、誰がてめえ

のやうな奴を殺すものがあるか、死にたきやア勝手に死ね、よう死ねまい、心中の爲ぞこなひめ！』

『死んでやるから見ろ、屹度死んでやるから見ろ、化けて出ててめえを取殺して呉れるから。』と女

が叫んだので外面に立つて居る者がクスリと笑つた。

『死ね、死ね、死んで鐵五郎の跡でも追駈ける功德になるわ、人殺しめ、心中の爲ぞこなひめ！』

『餘計なお世話だよ、鐵さんの跡を追はうと追ふまいとてめえの指圖は受けませんよ、生意氣言やアがんな、てめえと心中しやア爲まいし、盜棒め!』

『何だと。』と男の一喝する時、どや／＼と其家から人が出て「まア」まア」と止めながら直ぐ前の長屋に連れ込んだのは女の方らしい。

『見やがれ乃公が毆殺して呉れるから!人殺しめ。』と男は猶も怒鳴つて居た。

坂本は我等と並んで路次の口に立つて居た土地の者の一人に向ひ、

『何事ですナ。』と訊くと四十年輩の、肥つた男が笑ひながら、

『夫婦喧嘩でサ、毎度の事です。』

『心中の爲ぞこなひといふのは何のことです。』

『ナニ彼女が未だ娘の時に情人を作らへて、添はれんとか何とか言つて六郷川で心中をやつたのですがね、男ばかり死んで自分は恐くなつて逃げ出したのでサ。』

『鐵五郎といふのですか、其情人とかいふのは。』

『さうですよ、米屋の作でね、ちよいと美しい男でしたがね、彼女を内へ入れることは親も親類も皆な承知しなかつたのでサ。漁師の娘でね彼女も其時は此土地ぢやア珍しい美しい女でしたよ。』

『そして今は彼男に添うてるんですね。』

『さうですよ。何に矢張初は野合いたのですがね。さうですな一緒になつてから最早六七年も経ちますかな。随分仲の可い時は可いんですがね、如何かすると喧嘩をオツ初るんです。』

『そこで心中の爲ぞこなひが出ようといふもんだナ。』と若代は口を入れた。

『ハツハツハツさうですよ、……田夫野人といふのは彼の手台でせうナ。』と四十男は漢語を以て其談話を止めた。

我等は行き過ぎて、やゝ暫くすると若代は、

『田夫野人が可かつた。』と獨り莞爾いて居る。坂本は頻りに考へながら、眞面目な顔をして歩いて居る。

『僕は如何ら美しい女でも心中を爲そこなつて男を見殺しに爲た女は女房に爲る氣にならんナ。』と若代が言ふや坂本は、

『何故、愛があれば可いぢやないか。』

『愛?男を見殺しに爲る女の愛は劍呑だ。』

『然し若し今の夫婦が極く仲よく暮して喧嘩一ツ爲なかつたら如何する。人によつたら喧嘩しないで暮すかもしれない。』

『それは別問題だ。』と若代は笑つて逃げかけると坂本は進んで、

『さうさ別問題だ。心中して男を殺したこと、後になつて夫婦仲善く、楽しく暮すこと、は別問題だ。』

『どうだか。若し夫婦の間に絶えず心中の事實が記憶されて居て、常に彼等の心の底にそれが蟠居まつて居たら如何だらう。』と自分は口を入れた。

『さうとも。だから完全の夫婦では無論ない。然しあゝいふ社會では必ずしも我等が思ふ程には過去の事實を以て現在の情を殺すやうなことは爲ないよ。』

『兎に角、不完全の夫婦だ。』と自分が言ふや、

『然し矢張り夫婦だ。』と坂本は少し考へ『それを完全に發達さすのが人の責任だ、又夫婦の面白味も其處にあるだらうと思ふ。』

『だつて一度有つた事實は消えは爲ないよ、一度男を見殺しに爲た女は何時まで経つても其女だ。』と自分は云つて坂本の顔を見ると彼は微笑を含んで、

『事實は無論消えない、然し事實といふ者は左まで執着すべき價値のあるものでないんだ、事實よりも人の心の方が人に取つては大なる者だ、大なる事實だ。女をして男を見殺しに爲たことの罪に泣かしめ、夫は其情を憐れんで更に正しく清く高き方に導びくならば、即ち人の心が事實に勝つといふものだ。だから僕は如何なる事情があらうとも、夫婦の情誼を發達せしむるが人の責任、又必

ず發達させ得ると信ずるのだ。どうだね若代、僕の議論は。』

『感服した、僕の妹は幸福だ。』と若代は眞面目で答へた。坂本は莞爾して、

『イヤ僕が幸福なんだ、この議論の半分はお千代の持論なんだから。』

三人やゝ勞れて歸つて見ると、婦人連の琴、ヴァイオリン、風琴などいふ華やかな場が開いて居た。それが濟むとめでたしく幕。

春の鳥

今より六七年前、私は或地方に英語と數學の教師を爲て居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、餘り高くはないが甚だ風景に富んで居ましたゆゑ私は散歩がてら何時も此山に登りました。

頂上には城址が残つて居ます。高い石垣に蕨葛からみ附いて其が眞紅に染つて居る安排など得も言はれぬ趣でした。昔は天守閣の建つて居た處が平地にあつて、何時しか姫小松疎らに生ひたち夏草隙間なく茂り、見るからに昔を偲ばす哀れた様となつて居ます。

私は草を藉いて身を横たへ、數百年斧の入れたことのない鬱たる深林の上を見越しに近郊の田園を望んで樂んだことも幾度であるか解りませんほどでした。

或日曜の午後と覺えて居ます、時は秋の末で大空は水の如く澄んで居ながら野分吹きすさんで城山の林は烈しく鳴つて居ました。私は例の如く頂上に登つて、やゝ西に傾いた日影の遠村近郊を明く染めて居るのを見ながら、持つて來た書籍を讀んで居ますと、突然人の話聲が聞えましたから石

垣の端に出て下を見下しました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾つて居るのでした。風が烈しいので得物も多いかして澤山脊に負つたまゝ猶も四邊をあさつて居る様子です。むつまじげに話しながら樂しげに歌ひながら拾つて居ます、それが何れも十二三、多分何村あたりの農家の子供でせう。

私は暫時見下して居ましたが、又もや書籍の方に眼を移して何時か小娘のことは忘れて了ひました。するとキヤツといふ女の聲、驚いて下を見ますと、三人の子供は何に懼れたのか枯木を背負たまゝアタフタと逃げ出して忽ち石垣の彼方に其姿を隠して終ひました。可怪なことゝ私は其近處を注意して見下して居ると、薄暗い森の奥から下草を分けながら道もない處を此方へやつて來る者があります。初は何物とも知れませんでした、森を出て石垣の下に現はれた處を見ると十一か十二歳と思はるゝ男の兒です。紺の筒袖を着て白木綿の兵兒帶をしめて居る様子は農家の兒でも町家の者でもなきゝうでした。

手に太い棒切を持つて四圍をきよろく見廻して居ましたが、フト石垣の上を見上げた時思はず二人は顔を見合しました。子供は熟と私の顔を見つめて居ましたが、やがてニヤリと笑ひました。其笑が尋常でないのです。生白い丸顔の、眼のぎよろりとした様子までが唯の子供でないと私は直ぐ見て取りました。

『先生。何を爲て居るの？』と私を呼びかけました。で私も一寸驚きましたが、元來私の當時教師を務めて居た町は極く小さな城下ですから、私の方では自分の教兒せうごの外の人を餘り知らないでも土地の者は都から來た年若い先生を大概知つて居るので、今此子供が私を呼びかけたも實は不思議はなかつたのです。其處へ氣がつくや私も聲を優しうして

『書籍ほんを讀んで居るのだよ。此處へ來ませんか。』と言ふや、兒童こどもはイキなり石垣に手をかけて猿のやうに登りはじめました。高五間以上もある壁のやうな石垣ですから私は驚いて止めようと思つて居る中に早くも中程まで來て、手近の葛からに手が届くとすらくとこれを手繰たぐつて忽ち私の傍に突立ちました。そしてニヤ／＼と笑つて居ます。

『名前は何と呼ぶの？』と私は問ひました。『六』『六？六さんといふのかね。』と問ひますと、兒童こどもは點頭うなづいたまゝ例の怪しい笑を洩して口を少し開けた儘私の顔を氣味の悪い程熟視まじて居るのです。

『何歳いくつかね、歳は？』と私が問ひますと、怪訝な顔を爲て居ますから、今一度問返しました。すると妙な口つきをして唇を動かして居ましたが急に兩手を開いて指を屈まて一、二、三と讀んで十、十一と飛ばし、顔をあげて眞面目に、

『十一だ。』といふ様子は漸やと五歳位の兒の、やう／＼數を覺えたのと少しも變らないのです。そこで私も思はず『能く知つて居ますね。』『母上おつかさんに教つたのだ。』『學校、ゆきますか。』『往かない。』

『何故往かないの？』

兒童こどもは頭を傾かしげて向うを見て居ますから考へて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然兒童はワア／＼と啞おの様な聲を出して駈出しました。『六さん六さん』と驚いて私が呼止めますと『烏々』と叫びながら、後おも振りむかないで天守臺を駈下りて忽ち其姿を隠くしてしまひました。

二

私は其頃下宿屋住ひでしたが何分不自由で困りますから色々人に頼んで、遂に田口といふ人の二階二間を借り、衣食一切のことを任ずことにしました。

田口といふは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のまゝに構へて有福に暮して居ましたので此二階を貸し私を世話して呉れたのは少からぬ好意で在つたのです。

所で驚いたのは田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとするや城山で逢つた兒童こどもが庭を掃いて居たことです。私は

『六さん、お早う』と聲をかけましたが、兒童こどもは私の顔を見てニヤリ笑つたまゝ草箒で落葉を掃き言葉を出しませんでした。

日の經つ中に此怪しい兒童こどもの身の上次第に解かつて來ました、と言ふのは畢竟私が氣をつけて

見たり聞いたりしたからでせう。

兒童は名を六藏と呼びまして田口の主人には甥に當り、生れついでに白痴であつたのです。母親といふのは四十五六、早く夫に分れまして實家に歸り、二人の兒を連れて兄の世話になつて居たのであります。六藏の姉はおしげと呼び其時十七歳、私の見る處ではこれも亦白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口の主人も初の程は白痴のことを隠して居るやうでしたが、何にをいふにも隠し得ることので無いですから終に或夜のこと私の室に来て教育の話の末に甥と姪の白痴であることを話しだし、如何にかしてこれに幾分の教育を加へることは出来ないものかと私に相談をしました。

主人の語る處に依ると此哀れなきやうだいの父親といふは非常な大酒家で、其爲に生命をも縮め家産をも蕩盡したのださうです。そして姉も弟も初の中は小學校に出して居たのが、二人とも何一つ學び得ずいくら教師が骨を折つても無益で、到底他の生徒と同時に教へることは出来ず、徒らに他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばかりですから、却て氣の毒に思つて退學をさせたのださうです。成程詳しく聞いて見ると姉も弟も全くの白痴であることが愈々明白になりました。

然るに主人の口からは言ひませんが、主人の妹、則ちきやうだいの母親といふも普通から見ると餘程抜けて居る人で、二人の子供の白痴の原因は父の大酒にもよるでせうが、母の遺傳にも因るこ

とは私は直ぐ看破しました。

白痴教育といふが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることですから私も田口の主人の相談には浮かと思ひませんでした。たゞ其容易でないことを話したゞけて止りました。

けれども、其後だん／＼おしげと六歳の様子を見ると、如何にも氣の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。啞、聾、盲などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざる者、見る能はざる者も、尙ほ思ふことは出来ません。思うて感ずることは出来ません。白痴となると、心の啞、聾、盲ですから殆ど禽獸に類して居るのです。兎も角人の形をして居るのでから全く感じがない譯ではないが普通の人と比べては十の一にも及びません。又不完全ながらも、心の調子が整うて居ればまだしもですが、更に歪になつて出来て居るのでから、様子が餘程變です、泣くも笑ふも喜ぶも悲むも皆な普通の人から見ると調子が狂つて居るのだから猶ほ哀れです。

おしげは兎も角、六藏の方は兒童だけに無邪氣な處が有りますから、私は一倍哀れに感じ人の力で出来ることならば如何にかして少しでも其智能の働きを増してやりたいと思ふ様になりました。すると田口の主人と話してから二週間も経つた後のこと、夜の十時ごろでした、最早床に就うか

と思つて居る處へ

『先生、お寢みですか』と言ひながら私の室に入つて來たのは六歳の母親です。春の低い、瘦形の、頭の小さい、凸の顔、何時も齒を染めて居る昔風の婦人。口を少し開けて人のよきよらな、たわいのない笑を何時も其眼尻と口元に現はして居るのが此人の癖でした。

『そろ／＼寢ようかと思つて居る處です。』と私が言ふ中、婦人は火鉢の傍に坐つて、

『先生私は少しお願ひが有るのですが。』と謂つて言ひ出しにくい様子。『何ですか。』

『六歳のことで御座います。あのやうな馬鹿ですから將來のことも案じられて、其を思ふ私は自分の馬鹿を棚に上げて、六歳のことが氣にかゝつてならないので御座います。』

『御尤です。けれどもさうお案じなさるほどのことも有りますまい。』とツイ私も慰めの文句を言ふのは矢張り人情でせう。

三

私は其夜だん／＼と母親の言ふ處を聞きましたが何よりも感じたのは親子の情といふことでした前にも言つた通り此婦人とても餘程抜けて居ることは一見して解るほどですが、それが我子の白痴を心配することは普通の親と少しも變らないのです。

そして母親も亦白痴に近いだけ、私は益々憐れを催ふしました。思はず私も貰ひ泣きをした位でした。

其處で私は六歳の教育に骨を折つて見る約束をして氣の毒な婦人を歸へし、其夜は遅くまで、いろいろと工夫を凝らしました。さて其翌日からは散歩ごとに六歳を伴ふことにして、機に應じて幾分かづゝ智能の働きを加へることに致しました。

第一に感じたのは六歳に數の觀念が缺けて居ることです。一から十までの數が如何しても讀めません。幾度も繰返して教へれば、二、三と十まで口で讀み上げるだけのことは爲ますが、路傍の石塊を拾うて三個並べて、幾個だときゝますと考へてばかり居て、返事を爲ないのです。無理にきくと初は例の怪しげな笑方をして居ますが、後には泣きだしさうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根氣よく務めて居ました。或時は八幡宮の石段を數へて昇り、一、二、三と進んで七と止り、七だよと言ひ聞して、さて今の石段は幾個だときゝますと、大きな聲で十と答へる始末です。松の並木を數へても、葉子を褒美に其數を教へても、結果は同じことです。一、二、三といふ言葉と、其言葉が示す數の觀念とは、此兒童の頭に何の關係をも有つて居ないのです。

白痴に數の觀念の缺けて居ることは聞いては居ましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私も或時は泣きたい程に思ひ、兒童の顔を見つめたまま、涙が自然に落ちたこともありました。

然るに六藏はなか／＼の腕白者で、悪戯を爲るときは随分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で城山を駈廻るなどまるで平地を歩くやうに、道のあるところ無い處、サツサと飛ぶのです。ですから従来も田口の者が六藏は何處へ行つたかと心配して居ると晝飯を食つたまゝ出て日の暮方になつて城山の岨から田口の奥庭にひよつくり飛び下りて歸つて來るのださうです。木拾ひの娘が六藏の姿を見て逃げ出したのは必定これまで幾度となく此白痴の腕白者に嚇されたものと私も思ひ當つたのであります。

けれども又六藏は直きに泣きます。母親が兄の手前を兼ねて、折り／＼痛く叱ることがあり、手の平で打つこともあり、其時は頭を抱へ身を縮めて泣き叫びます。併し直ぐと笑つて居る様は打たれたことを全然忘れて終つたらしく、之を見て私は猶更此白痴の痛ましいことを感じました。かゝる有様ですから六藏が歌など知つて居る筈も無さうですが知つて居ます。木拾ひの唄ふうな俗歌を諳んじて、をり／＼低い聲でやつて居ります。

或日私は一人で城山に登りました、六藏を伴へてと思ひましたが姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖國ゆゑ天氣さへ佳ければ極く暖か、空氣は澄んで居るし、山のぼりには却つて冬が可いのです。

落葉を踏んで頂に達し例の天守臺の下までゆくと、寂々として満山聲なき中に、何者か優しい聲

で歌ふのが聞えます、見ると天守臺の石垣の角に六藏が馬乗に跨がつて、兩足をふらく／＼動かしながら眼を遠く放つて俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、古い城址、そして少年、まるで晝です。少年は天使です。此時私の眼には六藏が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな對照でせう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の兒であるかと、つく／＼感じました。

今一ツ六藏の妙な癖をいひますと、此兒童は鳥が好で、鳥さへ見れば眼の色を變へて騒ぐことですがけれども何を見ても鳥といひ、いくら名を教へても憶えません。『もず』を見ても『ひよどり』を見ても鳥といひます。可笑しいのは或時白鷺を見て鳥といつたことで、鷺を鳥といひ黒めるといふ俗諺が此兒だけには普通なのです。

高い木の頂邊で百舌鳥が鳴いて居るのを見ると六藏は口をあんどり開けて熱と眺めて居ます。そして百舌鳥の飛立つてゆく後を茫然と見送る様は、頗る妙で、この兒童には空を自由に飛ぶ鳥が餘程不思議らしく思はれました。

四

さて私もこの憐れな兒の爲めには随分骨を折つて見ましたが眼に見えるほどの効能は少しも有り

ませんでした。

彼是するうちに翌年の春になり、六藏の身の上に不慮の災難が起りました。三月の末で御座いました、或日朝から六藏の姿が見えませんが、晝過になつても歸りません、遂に日暮になつても歸つて来ませんから田口の家では非常に心配し、殊に母親は居ても起つても居られん様子です。

其處で私は先づ城山を探すが可らうと、田口の僕を一人連れて、提灯の用意をして、心に怪しい痛ましい想を懐きながら、平常の慣れた徑を登つて城址に達しました。

俗に蟲が知らずといふやうな心持で天守臺の下に来て、

『六さん！六さん！』と呼びました。そして私と僕と、申し合はしたやうに耳を欬てました。場所が城址であるだけ、又索す人が普通の兒童でないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天守臺の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行く中に北の最も高い角の眞下に六藏の死骸が墜ちて居るのを發見しました。

怪談でも話すやうですが、實際私は六藏の歸りの餘り遅いと知つてからは、どうも此高い石垣の上から六藏の墜落して死んだやうに感じたのであります。

餘り空想だと笑はれるかも知れませんが、自状しますと、六藏は鳥のやうに空を翔け廻る横りて石垣の角から身を躍らしたものと、私には思はれるのです。木の枝に来て、六藏の眼のまへまで枝

から枝へと自在に飛んで見せたら、六藏は必度、自分も其枝に飛びつかうとしたに相違ありません。

死骸を葬つた翌々日、私は獨り天守臺に登りました。そして六藏のことを思ふと、いろ／＼と人生不思議の思に堪へなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との關係。生命と死などいふ、問題が年若い私の心に深く／＼哀みを起しました。

英國の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります。それは一人の兒童が夕毎に淋しい湖水の畔に立つて、両手の指を組み合はして、梟の啼くまねをすると、湖水の向うの山の梟がこれに返事をする、これを其童は楽しみにして居ましたが遂に死にまして、靜かな墓に葬られ、其靈は自然の懷に返つたといふ意を詠じたものであります。

私はこの詩が嗜きて常に讀んで居ましたが、六藏の死を見て、其生涯を思うて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六藏のことは更に意味あるやうに私は感じました。

石垣の上に立つて見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。其一は六藏ではありますまいか。よし六藏でないにせよ。六藏は其鳥とゞれだけ異つて居ましたらう。

憐れな母親は其兒の死を却つて、兒のために幸福だといひながらも泣いて居ました。

或日のことでした、私は六藏の新しい墓にお詣りする積りで城山の北にある墓地にゆきますと、

母親が先に来て居て頻りと墓の周圍をぐる／＼廻りながら、何か獨語を言つて居る様子です。私の近づくのを少しも知らないと思つて、

『何だつてお前は鳥の眞似なんぞ爲た、え、何だつて石垣から飛んだの？……だつて先生がさう言つたよ、六さんは空を飛ぶ積りで天守臺の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも鳥の眞似をする人がありますかね、』と言つて少し考へて『けれどもね、お前は死んだはうが可いよ。死んだはうが幸福だよ……』

私に氣がつくや、

『ね、先生。六は死んだはうが幸福で御座いますよ、』と言つて涙をハラ／＼とこぼしました。

『さういふ事も有りませんが、何しろ不慮の災難だからあきらめるより致方がありませんよ……』

『けれど何故鳥の眞似なんぞ爲たので御座います。』

『それは私の想像ですよ。六さんが必定鳥の眞似を爲て死んだのだか解るものぢやありません。』

『だつて先生はさう言つたぢや有りませぬか。』と母親は眼をすゑて私の顔を見つめました。

『六さんは大變鳥が嗜であつたから、さうかも知れないと私が思つたゞけですよ。』

『ハイ、六は鳥が嗜好でしたよ。鳥を見ると自分の兩手を斯う擴げて、斯うして』と母親は鳥の搏翼の眞似をして『斯うして其處らを飛び歩きましたよ。ハイ、さうして鳥の啼く眞似が上手でした』

と眼の色を變へて話す様子を見て居て私は思はず眼をふさぎました。

城山の森から一羽の鳥が翼をゆるやかに、二聲三聲鳴きながら飛んで、濱の方へゆくや、白痴の親は急に話を止めて、茫然と我をも忘れて見送つて居ました。

この一羽の鳥を六歳の母親が何と見たでせう。

18835



発行所 東京牛込区矢來町三番地 振替(東京)一七四二番 新潮社 電話番町(八八九九番)	※ 獨歩集 ※			大正六年六月十二日印刷 大正六年六月十八日發行 大正六年七月二十日再版
	發行所 東京牛込区矢來町三番地 振替(東京)一七四二番	發行所 東京牛込区矢來町三番地 振替(東京)一七四二番	發行所 東京牛込区矢來町三番地 振替(東京)一七四二番	發行所 東京牛込区矢來町三番地 振替(東京)一七四二番

縮刷獨歩叢書

—刊行書目—

- 武藏野及渚
- 獨歩集
- 獨歩書簡集
- 運命
- 獨歩小品集
- 濤聲

刊行書籍は此以外にも及ぶべく、出版は必ずしも上掲の順序によらず。毎編その装畫を異にするも、一樣の體裁に據る可し。

—新潮社出版—

代表的名作選集

第一	牛肉と馬鈴薯	國木田獨歩	十二	今戸心中	廣津柳浪
第二	坊っちゃん	夏目漱石	十三	耽溺	岩野泡鳴
第三	蒲團	田山花袋	十四	明治詩歌選	詩壇六家
第四	透谷選集	北村透谷	十五	戀ざめ	小栗風葉
第五	春	島崎藤村	十六	別れた妻	近松秋江
第六	わが袖の記	高山樗牛	十七	はつ姿	小杉天外
第七	たけくらべ	樋口一葉	十八	お艶殺し	谷崎潤一郎
第八	爛れ	徳田秋聲	十九	俳諧師	高濱虚子
第九	平凡	二葉亭四迷	二十	煤煙	森田草平
第十	高野聖	泉鏡花	廿一	子規花枕	正岡子規
第十一	何處へ	正宗白鳥	廿二	選集	武者小路實篤
			廿三	その妹	武者小路實篤
			廿四	旅役者	長田幹彦

— 錢四料送 錢五十三册一本美製特紙表重二羽 —

新進作家叢書

中版百七十頁
定價四十錢
送料一册四錢

新人競ひ起つて面目全く改まれる現下文壇の鳥瞰圖を示すべく本叢書を刊せしが果して大歡迎を受け賣行き極めて盛也。

第一	新らしき家	武者小路實篤著(再版)
第二	恐ろしき結婚	里見 淳著(再版)
第三	生あらば	豊島與志雄著(再版)
第四	大津順吉	志賀直哉著(再版)
第五	生と死の愛	谷崎精一著(新刊)

刊 續

■結婚前	長與善郎	■手品師	久米正雄
■ギプスの床	相馬泰三	■澄子の兄	江馬 修
■偷盜	芥川龍之介	■題未定	中條百合子

ルツソオ	懺悔録	生田長江氏譯	全一册九十五錢宛
ツダヌオン	縮死の勝利	生田長江氏譯	定價九十五錢 送料八錢
ゴンチャ	オブローモフ	昇曙夢氏序論 山内封介氏譯	全二册(上)九十五錢 全二册(下)八十五錢 送料
ドストリヒン	赤い部屋	阿部次郎氏譯 江馬修氏譯	定價一圓六十錢 送料十二錢
同	地獄	江馬修氏譯	定價七十五錢 送料八錢
ダアキン	種の起原	大杉榮氏譯	定價一圓五十錢 送料八錢
ゲンセン	聖フランシス	久保正夫氏譯	定價一圓三十錢 送料十二錢
聖フランシス	の小さき花	姉崎正治氏序 久保正夫氏譯	定價一圓二十錢 送料十二錢

ドストエー	罪と罰	中村白葉氏譯	定價一圓五十錢 送料十二錢
同	白痴(全部完了)	米川正夫氏譯	定價金十二圓 送料
ニイチエ	ツアラトウストラ	生田長江氏譯	定價一圓七十錢 送料十二錢
同	人間的な餘りな人間的な	生田長江氏譯	全二册各一圓六十錢 全二册各一圓二十錢 送料
ネルゲフ	散文詩	生田春月氏譯	定價五十五錢 送料六錢
ビルクマン	當來の文藝及思潮	益田國基氏譯	定價金一圓 送料六錢
エリザベド	妹の見たるニイチエ	磯部泰治氏譯	定價七十五錢 送料八錢
スシエーヤク	沙翁名作選	久米正雄氏譯	定價一圓 送料八錢

■書叢ルテルエ■

編一第

若きエルテルの悲み

ギョオテ作
秦豊吉譯

若きエルテルが、美しき、されど既に人妻なるロツテを戀ひて、悲みに胸破れ、自ら殺して果つる迄のなやみとわづらひとを、書簡體に直叙せるもの。飽迄清く、飽迄美しく、而して飽迄も悲しき此の戀物語は、古來幾多の人の青春の涙を絞つたことであらう。戀愛文學として世界第一の書。

□□□□
『若きエルテルの悲み』に見た戀と涙と嘆きとを、同じく其中に湛えた西洋の名作を集め、『エルテル叢書』の名を冠した。即ちエルテルの如き戀愛文學と云ふ意味を寓したのである。

□□□□

『エルテルの悲み』と並び稱せらるゝ世界高名の戀物語。南の海の小さき島なる椰子の葉蔭に幼なき戀をはぐゝんだ少年少女が、浮世の運命に隔てられて、娘は花の都の巴里に出たが、戀人を忘るゝことが出来ず、都を遁れて島に歸らうとして不幸船が難破して死ぬと云ふあはれ限りなき物語。

編二第

海の嘆き

ポオルト
ギルジニイ

サンピエル作
生田春月譯

綿洋布天金極美本一冊六十五錢 送料六錢

